
赤い月が見ている

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い月が見ている

【Nコード】

N2617F

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

尚子に残された道は二つ。父と愛する祖国のために心を捨てて生きるか。それとも、父や兄弟を捨てて愛する人と共に生きるか。

それは、自分らしく生きたいと願った二人の激しい恋の物語。
エロカッコイイ(?) 平将門によるラブファンタジック将門記1(平安のロミオとジュリエット)

《 9 / 26 加筆終了 》

ブローグ

赤い。

どこを見ても、赤い。

今、自分はその“赤”に囲まれている。

彼の家も、村も、何もかも、あっという間に、“赤”に食い尽くされてしまった。

さっきまで聞こえていた隣の家のお姉ちゃんの泣き叫ぶ声も、夕方まで一緒に遊んでいた友達の助けを呼ぶ声も、あっという間に“赤”の餌食になった。

もう、誰もいない。

何もない。

ごうごう、と鳴る炎が、彼から全部、奪ってしまった。

わかってる。次は自分だ。

いいよ。

こんな体、“赤”にあげる。

もう、僕には必要ないから。

一緒に笑い会う家族も。

守るべき妹も。

何もないんだ。

僕の命なんて、もう、何の意味もない。

いつそ、父ちゃんや母ちゃんが、“赤”に喰われた時、僕も一緒に喰ってくればよかったんだ。

なんで、僕だけ生き残らせたの？

僕は死ぬ価値すら、ないのかな。

そこまで考えて、彼は静かに目を伏せた。

でも、それも、もうどうでもいいことだ。

今度は自分もこの村の人たちと一緒に逝く。そして、村のみんなのもとへ、父ちゃんと母ちゃん、妹の^{おまへ}ところへ行くんだ。

彼は燃え盛る家屋へとゆっくり足を進めた。

と、その時、それまで炎の音しか聞こえなかった彼の耳に、不思議な声がささやきかけてきた。

おいで。もう、苦しむことも、悲しむことも、一人ぼっちになることもない。だから、こっちへおいで。

誰がいる。

あの炎の中で、自分を優しく呼ぶ声がする。

「……母ちゃん？」

彼は胸が高鳴るのがわかった。

ああ。

母ちゃんが呼んでる。

僕を待ってる。

（待つてて。今行くよ）

彼は、また一步、また一步と“赤”へと足を進めた。
そのたびに、心も体も軽くなるような。

この世から、だんだんと魂が抜け出ていくような。
そんな不思議な感覚にとらわれた。

そして、彼が“赤”へとゆっくり手を伸ばした、その瞬間。

「おいっ！」

彼は自分の体が、ふわりと浮き上がるのを感じた。

ああ、これが死ぬってことなのか。妙に納得する。
これで自由だ。

自分はもう、苦しみから解放される。

（暖かい……）

次を感じたのはそんな感覚だった。

例えるなら、遠い昔、母ちゃんの腕に抱かれていた時の温もりに似ていた。でも、母ちゃんとは違うのはすぐにわかった。

別の、もつと柔らかくて暖かくて、すべてを任せてもよいと思わせる……そんな包容感。

これが、自分を迎えに来た天女の腕なのか。

彼は、目を閉じそんなことを考えていた。

「怪我はないか？」

彼の背後から柔らかい声が聞こえてきた。

聞こえてきたその声で、彼はゆっくりと瞼を押し上げる。

「……」

焦点の合わない彼の目に、少しだけ黒い色が戻る。すると、それを合図にするかのように、一度放棄した彼の五感が、すーっと次々に引き戻されていく。

（……あれ？）

いつもより視野が高い。しかも、ふさふさと柔らかな毛と、暖かな生き物の温もりを太ももに感じる。

そうか、馬だ。自分は今、馬に乗っている。でもなぜだろう。乗った覚えなどないのに。

「おい、大丈夫なのか？」

再び、頭上から彼を心配するように怒鳴る声が聞こえてきた。

（え？ 頭上？）

驚いて、思わず後ろを振り返る。

途端、息ができないほど、強い輝きを放つ二つの目に 捕らえられた。

（……………）

吸い込まれる。

目が離せない！

もうその二つの目から逃げることはできないと悟った。

なぜだろう。

彼は、怖いほどの、強い光をその瞳の中に見て、動けなくなった。

「大丈夫そうだな」

その人はふわりと笑った。

それを見たと同時に、彼は自分の心臓が大きく脈打つを感じた。

どくん。

どくん。

また一つ脈打つ鼓動に、全身の感覚が鮮明になっていく。

頭も回り始めたのか、やっと自分の置かれた状況が飲み込めた。

炎の中にその身を投じようとしていた自分は、この男に馬上へと担ぎ上げられた 命を助けられたのだと。

「よしたか良尚様！」

背後から蹄の音とともに別の男が姿を現した。その男は馬にまたがったまま一礼する。

「だめですね。遅かったようです。生存者は」

後からきた男はそう告げると、すつと顔を上げたので、そこで彼は男と目があつた。

「生存者は、その子供だけのようですね……」

「そうか……」

良尚と呼ばれた人物は、苦しそうに顔をしかめ、目の前に広がる赤い村を眺めやった。

「すまなかつた……私がもう少し早く気づいてやれば……」

彼は静かに、良尚を見上げる。その大きな良尚の瞳は、青空に舞い上がる炎を映し出していた。

「もう少し……私が……」

彼にはその良尚の大きな瞳に、自分の胸が切り刻まれるような痛みを感じた。

この人はなんて泣きそうな顔をしているのだろう。

なんて苦しそうな顔をしているのだろう。

（みんなが死んだのは、この人のせいではないのに……）

それなのに、必死に泣くまいと唇を噛しめ、挑むような目つきで

“赤”を睨みつけている良尚の姿が不思議だった。

この人は、“赤”から逃れられると思っているのだろうか。

“赤”に勝てると思っているのだろうか。

不意に、良尚が彼を見下ろした。

視線が交わったその瞬間、彼の胸がどきんと跳ね上がったのがわかった。良尚の大きな瞳の奥に暖かさを感じた。

良尚がそつと彼に手を伸ばし、優しく頭をなでた。その手の平が彼に、強く訴えかけてきたような気がした。

『生きる』と。

…… 赤。

それは命の最後。
全てを無に変える

最後の叫び……。

1 畑の若君

1 畑の若君

「若様、それじゃ全然だめですぜ。あーあー、なっちゃいないね、まったく」

そう言ったのは、浅黒い顔の中年の男だった。すぐ横から良尚の手元を見ていた彼の顔には、言葉とは裏腹に、暖かさがにじんでいる。

「手伝ってもらえるのはありがたいんですけどね」

畑でしゃがみこんで作業していた良尚が、それを聞いて、苦笑いを浮かべながら腰を上げた。

「なかなか難しいものだな」

「なに、慣れれば簡単にできますよ」

中年の男、松吉は、よく日に焼けた顔を良尚に向け、白い歯を見せた。内心、彼は残念に思わずにいられない。

いつも、良尚は実に熱心だった。真剣に農作業を学ぼうとしているのが伝わってくる。飲み込みも早いし、覚えもいい。良尚が自分の息子であつたら、いくらでも農作業を手ほどきしたのだが。本当

に残念だ、と今日まで何度思ったか知れない。

ふと良尚の視線が松吉からはずれ、周囲に広がった。それを追いかけるように彼もあたりに目をやる。すると、顔をほころばせこちらを見やる村人たちと目が合った。どうやら、他の村人たちも自分と同じような気持ちでこの少年の働きぶりを見守っていたらしい。

「ツネ婆！ 無理をするとまた腰を痛めるぞ！！」

良尚の明るく澄んだ声が、秋の高い空に飛んだ。良尚が、村一番の長寿を誇る老婆、ツネを見つけたようだ。

松吉も背後を振り返る。遠くに小さく、天を仰ぎ見て背伸びをしている彼女の姿が目にとまった。

良尚に気付いた老婆はその年齢からは想像できないような大きな声で答えた。

「おまえのような、ひよろっこい若造に心配されるほど、やわじやないわいっ！」

良尚が目をまるくさせ、のけぞる。

「確かにそれだけでかい声が出れば大丈夫だな」

降参だ、とでもいうように両手を挙げてつぶやいた良尚に、村人たちからどっと笑いが起きた。

「さあ、もうひとふんばりだ」

皆の笑顔を満足げに見た良尚は、そう言いながら泥のついた手で鼻の下をこする。おかげでヒゲのようについた泥も気にす

る様子もなく、畑仕事を再開した。

松吉はその横顔をまじまじと見つめた。

良尚の顔は連日の畑仕事により、薄ら日に焼けている。長い黒髪を一つに束ね、泥だらけの着物を着ていると、どこから見てもこの辺り一帯を治める豪族の息子には見えない。しかも血筋においては、四代さかのばれば皇族に行き当たるという話を耳にしたこともある。

だが、そのようなことは、今一緒に農作業をしている村人たちのほとんどが知らないことで、松吉自身、普段はそんなことをすっかり忘れてしまっていた。そのくらい良尚は気さくで、気立ても良く、気安い雰囲気を持っているということなのかもしれない。この武射^{むしや}村の者たちは、良尚のことは変わり者の若様としてしか認識がない。

それもそのはず。有力豪族の嫡子だというのに、良尚は頻繁に村人の様子をうかがいに来ては、農作業についてあれこれ質問し、一緒になって土まみれになった。とは言え、手伝いとはよくいったもので、村人にとって見れば農作業の“の”の字も知らないような貴族の若様が土遊びをしているようにしか見えないのだが。

それでも村人の中には良尚を慕わない者はいない。その明るい性格とまるで女子のようにかわいらしい屈託のない笑顔は誰をも笑顔に変えた。

「まつきち
松吉」

良尚が作業を続ける手を止めずに、すぐ隣で同じ作業をしている松吉に声をかけてきた。

「間に合わなかったよ、すまない」

松吉は一瞬、この若様がまた農作業中に何かへまをしたのではないかと思った。が、良尚の暗い横顔を見やり、すぐにそれが先日
隣村のことだと察した。

「若様のせいではないさ」

「子供一人しか助けられなかった」

松吉は返す言葉を見つけれなかった。

先日、すぐ隣の牛熊村うしくまむらが盗賊に襲われた。盗賊は食物を奪い、女
子供をさらい、すべてを焼き払った。

最近、その牛熊村の周辺で盗賊の集団が頻繁に出没するという噂
を聞いていた松吉は、良尚にその話をしていたのだ。良尚がすぐに、
村へ警戒するように指示をだし、良尚自身も何度も足を運んでいた
矢先のことだった。

その村の方角から煙が上がっているのに気がついた良尚が、馬に
またがり疾風のごとく村へと向かったが、全てを奪われた後であっ
たという。

だが、たとえ良尚が間に合ったとしても、良尚の細い腕一本で何
人が救えると思っっているのだろうか。いや、きっと良尚はそんな無
力な自分には重々気がついていいるのだ。それでも向かわずにいられ
なかったのだろう。

（まったく……たいした若様だよ）

きっとこの若様は、松吉たちの村が襲われても同じように身一つ
で駆けつけるに違いない。たとえどんなに遠くにいようとも。

まるで自分の息子を眺めるような暖かな気持ちで、松吉はこの十

四・五の少年を見つめていた。

「良尚様」

聞き覚えのある男の声が聞こえてきた。手を止め声の方を向くと、良尚よりも少し年長だろう、背の高い男が立っていた。

この男は、いつも良尚と一緒に現れる。良尚の側近の一人なことはわかるが、主人とちがって実に無表情な、つまらない男だった。松吉を含め、村人たちは、この男がいつも良尚を奪い去ってしまうので、面白くない。

「鷹雄^{たかお}か。おまえもこっちにきて手伝え」

良尚が、笑顔で鷹雄と呼ばれた男を手招きした。鷹雄は眉一つ動かさずに、もう一度良尚の名を呼んだ。

「なんだ」

次の良尚の返事は、少々不機嫌さを含んでいた。

そんな様子を見ると松吉は嬉しくなる。この若様も自分たちと一緒にいることを楽しいと思っていてくれるのだ。もちろん、そこには身分という見えない壁と、主従という鎖がまわりついているのだが。

「そろそろ殿がお戻りになられる頃です」

その鷹雄の言葉に、良尚がぴたりと動きを止めた。そして、小さく、と呟いたような気がした。

「それを早く言え！」

良尚は慌てて立ち上がり、周囲に聞こえるように声を張り上げた。

「すまん、また来る！」

良尚は、言い終わるが早い、鷹雄の引いてきた馬にひらりとまたがり、あっという間に小さくなった。まるで風のようなと、松吉は口元を緩ませた。

「ありやく、また、殿様にこつてりしぼられるな」

松吉の呟きを聞いた妻は、からからと声をたてて笑った。

「体中が泥だらけだからね。着物を着替えただけじゃ殿様の目はごまかせんだろうね、たぶん」

二人は顔を見合せて、同時に噴出した。

良尚は、屋敷に着くと自分の馬を馬番の鷹雄に預け、足早に自室へ向かった。しかし、ふと頭を先日の焼け落ちた村の子供の顔がよぎった。

「あの子供はどうしている？」

良尚は振り返らずに、背後に控える鷹雄に声をかけた。

「相変わらず、一言も話しません」

良尚の顔が一瞬だけ曇る。

「そうか」

良尚は何かを振り切るように、勢いよく鷹雄を振り返った。

「ならば、後で名をつけてやろう。呼び名がなければ、困るだろう？」

良尚は笑顔を向けた。しかし、うまく笑えなかったような気がした。それを鷹雄に見抜かれる気がして、すぐに目をそらした。

「あの子供は、自分で火の中に入ろうとしていた。気をつけてやってくれ」

良尚はまるで鷹雄の目から逃げるように、屋敷の中へ入っていった。

鷹雄の自室は、屋敷の敷地内にある馬屋の隣にあった。
馬屋に戸を付けただけで、木製の壁はところどころ腐り、隙間風が入りこむ。寝床も、土の上に藁を編みこんだ、御座を引いただけものだ。

それでも、鷹雄にとってはどんな立派な屋敷よりも居心地がいい鷹雄だけの場所だった。

ここがある限り、自分は良尚に必要とされている。ここにいてもいいのだと、良尚からそう言われている気がした。

その狭く薄暗い自室にその背中を見つけて、小さくため息をついた。子供は明り採りのための窓の傍に立ち、そこから覗く青空に目を奪われているようだった。

「おい、おまえ」

鷹雄は履き捨てるように呟くと、子供の隣へ腰を下ろした。土の上に敷き詰められた藁からは、ひんやりとした冷気が簡単に伝わってきた。

「おまえと俺は同じだ」

子供からは何の反応も感じられなかったが、鷹雄はそのまま続けた。

「おまえにも良尚様は、新しい名を下さる」

鷹雄は雨漏りする、自室の天井を見つめた。

「おまえにも、新しい人生を下さる。だから、あの方のために生きる」

鷹雄と分かれた後、にわかに屋敷が騒がしくなったことで、良尚は父が帰郷したことをすぐに悟った。

しかし、なにやら様子がいつもと違う。何かあったのだろうか。

（まさか、外に出ていたことがバレたんじゃ……）

良尚は心の中で舌打ちをし、苦々しい顔をした。もし、良尚の想像どおりならば、まもなく烈火のごとく怒り狂った父が、この部屋に押しかけてくるに違いない。

「藤乃ふじの……」

良尚は部屋の女官に情けない顔で振り返った。

「知りません」

藤乃がびしゃりと言い放つ。その眉はわずかにつり上がったように見えた。

藤乃は高齢の、良尚の母の代から家に仕える女官である。良尚の祖父がこの地に移住する時に、彼女も母について一緒に来た。母が良尚を産み落とすとすぐに死んでしまったため、そのまま良尚付きの女官になったのだ。

(……藤乃まで怒ってる)

「私は何度も申し上げております。仮にも、帝の御子であられた親王の血筋でありますお方が、何ゆえ身分も卑しき村人と一緒になつて泥まみれになられ！」

良尚は、しまったと思った。藤乃の小言は長い。

「わかった、わかった。藤乃、わかったから」

「何がわかったというのですか。そのお姿で！」

そういわれた良尚は、先ほどまで畑にいた泥だらけの着物に袴姿のまま。その上、顔や腕には、からからに干からびた泥がこびりついていた。

「誰か、濡れ布と着物を持て」

藤乃は部屋の外に控えている女官に命令した。そして、再び良尚を振り返ると、さあ続けましょうかと言わんばかりの鋭い視線を向けた。

「よろしいですか。そもそも、我らが殿、良兼様は」

逃がしはしないぞという気迫に満ちた藤乃の背後に、燃え盛る炎の幻を見た良尚は、げんなりして、肩を落としながら藤乃に適当にあわせて相槌を打つしか、この場を逃れる手は無かった。

（それにしても……）

身なりを整えた頃には、藤乃の怒りはほぼ鎮火していたが、反比例して良尚の中で疑惑が大きく膨れ上がっていた。

なかなか父が現れない。これは本当に何か大事が起きたのだ。冷静沈着な父が、慌てるほどの大事が……。

良尚は、ちらりと藤乃の顔を盗み見た。藤乃は他の女官に気を取られている。今しかない。

（ごめん、藤乃！）

良尚は、心の中でそう叫ぶのとほぼ同時に、閉じても手の平の幅ほどある扇を掴むと、部屋を飛び出した。

その様子にあっけに取られ、静止するのを一瞬忘れてしまった藤乃が、良尚を追って部屋を庇に飛びでた時には、良尚の後ろ姿はもう良尚の父の自室の方へ消えていた。

まもなく、どたんという大きな音がし、その音の発生源を察した藤乃は、眩暈を覚え、額を押さえるようにその場に崩れ落ちた。

お育て方を間違えた……。藤乃は深い深いため息をついた。

良尚は、父の自室に走り込んだ時、うっかり足元を滑らせたので、父の元へ頭から滑り込む形になってしまった。

苦笑いを浮かべながら恐る恐る父の顔を見上げると、父の顔は一瞬見せた驚きから、見る見る間に険しくなっていた。

「おまえというやつはっ！」

良尚は慌てて父の前に座り、優雅にひれ伏した。そのしぐさは、どこから見ても貴族のそれであり、どこか目を引く気品にあふれたしぐさであった。

「お早いお戻りにつき、父上に何か大事がありましたかと、心配いたしました。ご無事なお姿を拝し、安堵しております。どうか先ほどの無礼をご容赦ください」

良尚は頭を下げたまま、すらすらと美しい言葉を並び立てた。

父を案じて慌てて走り込んできたというその良尚の様子に、父はすっかりほだされ、頬を緩ませてしまい、咳払いをしてそれを誤魔化する。もちろん、頭の回転の速い良尚の機転によるものだ。

「まあ、よい。もう用が済んだのなら、下がりなさい」

良尚は、すっと顔を上げ、父の顔を見つめた。父のその黒々とした瞳が、わずかに揺れる。

（やっぱり何か隠している）

良尚は確信した。

何を隠そうとしているのだろう。察するに、お家の大事にかかわることであろう。それに、父はどこか浮き足立っているように見えない。吉報なのだろうか。だが、手放して喜べる類の吉報でもなさそうだ。ますます、解せない。

（何だというのだろう。父上がこの私にも言えないこと……？）

隠そうとするなら、あばくまでだ。良尚は、父の命を無視し、わざとらしく、ばさつと大きな音を立てて扇を開き、口元を隠した。

「父上。常陸のおじ上はお元気でございましたか」

「ああ、兄上は変わりない。さあ、もう行け」

「それは良うございました。下総の叔父上もお元気でございましたよ
うか？」

父は、一瞬ぎくりとなったように見えた。だが本当に一瞬。その小さな動きは、相手が他の人ならば、父は隠し通せたかもしれない。

しかし、相手は、この家族一、いや一族一の観測眼をもつ良尚だ。

（あたりだ！ 下総の叔父上に何かあったのだ）

何があつたのだろう、と良尚が思った時、父が見たことの無い不気味な笑みを浮かべたのだ。

「……父上？」

良尚は恐る恐る父を覗き込む。

「良将^{よしまさ}が……死におつた」

背筋がぞくりとするのを感じながら、良尚は父を見つめた。

「死におつたわ。はは……ははは……」

（叔父上が……死んだ？）

良尚にはそれだけでも衝撃的だった。血のつながった叔父が死んだのだから。だが、それ以上に信じられないことに、父は実の弟の死を心底喜んでるように見えるという事実が良尚を打ちのめしていた。

（鬼……）

良尚の喉がごくりと鳴った。

父が鬼に取り付かれた。そう思った。全身の毛が逆立つような悪寒に吐き気すら覚える。

確かに父と叔父の良将は、良尚が物心ついた頃から折が合わなか

った。その兄弟の溝は年を経るごとに深く大きく、埋められないものとなっていったのも、良尚にはわかっていた。

しかし、それでも血を分けた実の弟の死だ。良尚にも別腹の弟が三人いるが、別腹であつても弟には変わりない。その死は、良尚には恐ろしく、悲しいものであると思う。

それが、父と叔父のように同腹の兄弟であつたなら、もつともつと胸が張り裂け、自らも死に追いやられるような苦しみを味わうものではないのだろうか。それが普通なのではないのか。生れ落ちた日から祖母の元で供に育つ、それが同腹の兄弟なのだから。

それなのに　　。

理解できない。理解したくもない。同腹の兄弟も実母もない良尚は、何かが心の中で碎けていくような気持ちになった。と、同時に初めて自分の父が恐ろしいと感じた瞬間だった。

「あやつの息子は今、京にいる。跡目はそいつが継ぐことになるう
継ぐものがあれば、の話だな」

良尚は、はつとした。父が考えていることがわかったような気がしたのだ。

（まさか……）

「父上……」

良尚の声に、父は我に返ったように、ばつの悪そうな顔をした。話すつもりのないことまで、話してしまったと思ったのかもしれない

い。

良尚はその表情から、もうこの話を掘り下げることにはできないと察した。

「ところで」

父の声に、良尚が父の顔を見直すと、いつもの父の顔に戻っていた。

「おまえ、また良尚などと名乗って、ちよろちよると遊び歩いているそうではないか」

良尚は、その不意打ちに返す言葉を見失った。

「そ、そんなことは」

「もう十五になるんだ。わかっているのか。小さなころに馬や剣を教えたのは確かに私ではあるが、しかし、おまえは」

「父上。隣村が盗賊に襲われ全滅いたしました」

良尚は父の言葉をさえぎった。

「何だと？ また盗賊が出たのか」

「盗賊が何とかならねば、安心して農作業もできず、せつかく取れた作物も奪われてしまつては、意味がありません。このままでは、民は減り、残った民も飢えて命を落としましょう。それを見逃せば、この国の衰退を招くことは必定。早々に対策を」

「そうだな。何か良い手はないか」

父は腕を組んで数秒考えて、慌てて良尚を諫めた。

「おまえが首をつっこむことではない！ 盗賊も村人も、おまえにはまったく関係のないことだ。まったく、盗賊よりも、おまえを屋敷に閉じ込めておく方法を藤乃と練るほうが先だ！ さあ、自室へ戻れ！」

良尚は、ちつと舌打ちをした。

「ちつ、とは何だ！ ちつ、とは！ そのようなこと、どこで覚えたのだ！ ええい許さん！ 藤乃！！ こやつを部屋へ閉じ込めておけ！！」

こうして、村人たちが心配したとおり、良尚の頭の上にだけ、大きな雷が落とされたのだった。

2 新しい翼

2 新しい翼

すがすがしい秋の日光を一身にあびるようにして、良尚は背伸びをした。

屋敷から南へ少し馬を飛ばすと、東西へ流れる川に出る。こここの川原から、良尚の父、良兼よしかねが治める領土を眺めるのが、良尚は好きだった。

良兼が京都から移住するまでは荒れ野だったこの上総の国（現在の千葉県中部）も、ずいぶん耕地が増えてきた。耕地を増やし、取れる税を増やし、着々と力を付けてきたのが良兼や良尚を含む一族、平氏である。

今や平氏は、平良兼の実兄である平国香たいらのくにかを頂点に板東（現在の関東地方）において絶大な力を持っていた。

この国香の息子、貞盛さだもりの子孫が、源平合戦で有名な平清盛たいらのきよもりである。

「うーん……良い天気だ！」

仰ぎ見た空の青さと、屋敷を忍び出て自由になった開放感を全身で感じた。

こんな時、良尚はヒトに生まれた自分を呪わずにいられない。

鳥になりたい。

体中に風を感じて、自由に気ままに生きていけたらどんなにいいだろう。

「しゅうた 驚太……」

良尚の口からこぼれ落ちた言葉は、傍らにいた幼い子どもに拾われた。子どもはじつと良尚を見上げる。すると、秋晴れよりもまぶしく暖かい笑顔が彼にきらきらと降り注いだ。

「驚のように勇ましく、自由にどこまでも飛んでいけるように。おまえの名は今日から驚太だ」

子どもは微かに唇を動かした。良尚は、その唇の動きが“しゅうた”と読めると同時に、再び破顔した。

「そうだ、驚太。気に入ったか？」

子どもは、こくと頷いた。良尚はその様子を見て、頷き返す。そして再び青空を見上げた。その瞳には何が映っているのだろうか。驚太は必死に良尚の視線を追った。

「驚太。おまえは風に乗ってどこまでも遠くへ飛んで行くんだ」

鷺太は良尚を再び見上げた。その良尚の目が、一瞬、さびそうに伏せられた気がした。急に良尚の背中が小さく見え、鷺太は鷹雄の言葉を思い起こしていた。

『おまえにも、新しい人生を下さる。だから、あの方のために生きる』

鷺太には、この言葉の意味が少しだけわかった気がした。

この人にはいつも笑っていて欲しい。

悲しい顔をさせたくない。

鷺太はそう思った。

「さあ、行こう」

良尚の掛け声に、鷺太は何とか馬によじ登る。それを見届けてから、良尚は軽やかに鷺太の後ろにまたがった。

川からの風に乗って、ふわりといい香りがした。

「松吉、頼みがある」

良尚はすくと馬から下り、農作業をしている松吉に声をかけたのだった。

松吉は顔を上げるついでに、曲がりきった腰を伸ばした。

「この子を預かってほしい」

良尚は、馬からなかなか下りれず、じたばたしている鷺太を指差した。

松吉たち夫婦には子供がいない。いや、3人ほどいたのだが、どの子も幼くして亡くなっていることを良尚は知っていた。同時に、夫婦が子供好きなのも、村の子供の対応を見ていれば一目瞭然だ。だから、良尚はこの鷺太を助けてすぐに松吉の顔が浮かんだのだった。

「どこの子なんです？」

松吉は手放しでは喜ばなかった。そのことが良尚には意外だった。てっきり大喜びしてくれると思ったのだ。

「先日の村の生き残りだ」

良尚は自分の顔が強張るのを隠すために、鷺太の方へ歩み寄る。どう馬から下りたらいいのかわからず、まだ馬の背にしがみついている鷺太の姿に、すぐに良尚の口元が緩んだ。そっと手を貸してやると、鷺太は迷わずその手を取った。

「名は鷺太だ」

鷺太はなんとか着地し、良尚と共に松吉と対面した。

「預かる……ねえ」

（そういうことか！）

そこで初めて、良尚は松吉の渋っている理由がわかった気がした。預かるとなると、返さねばならない。しかも、良尚からの預かり者となれば、扱い方もぞんざいになるわけにはいかない。これでは厄介者だ。松吉はそう思ったのだろう、と良尚は瞬時に察した。

やはりこういう時には、目に見えない強固な主従の鎖を感じる。

「松吉、お多恵^{たえ}」

良尚は松吉夫婦の名を改めて呼んだ。少し離れたところで、作業していた手を止めてことの成り行きを心配そうに見ていた松吉の妻、多恵が慌ててこちらに駆け寄ってきた。

改めて名を呼ばれば、命令が下るものと、夫婦は思い込んでいたのだろう。二人は固い表情を見せ、黙って良尚の顔を見つめた。だが、良尚は、ふっと笑ったのだ。意表を疲れた夫婦はぼけっとその笑顔に見とれてしまった。

「松吉たちには子供がいない。鷺太には親がいない」

良尚は三人の顔を交互に見つめながら言った。

「三人で、家族にならないか？」

松吉はぼかんと口を開けたまま、良尚の笑顔を眺めた。

「もちろん、三人がよければ、の話だ。隣の村が盗賊に襲われ、助けられなかったのは国守である我が父、そして、この私の失態だ。しかし、驚太を屋敷で面倒みるわけにはいかない。だから、この村の一員として、できれば松吉の息子として、育ててやってほしい」

良尚はかがみ、驚太と目線の高さをそろえた。

「驚太。松吉ならおまえを、立派な男にしてくれる。たくましく賢い、立派な男になり、私の元へ戻って来い」

驚太は、こくと頷いた。その瞳には、もう強い光がともっているように良尚には思えた。

（いい目だ）

もう、驚太が自ら命を絶つことはないだろう。ちゃんと生きていくはずだ。

そのやり取りを見ていた多恵が、松吉より先に口を開いた。

「驚太。今日からこれだけは守るんだ」

多恵は驚太の前にしゃがみ込むと、両肩に手をやり微笑みかけた。

「良く食べ、良く寝て、良く働く、そして良く笑う。これがうちの家訓さ。守れるかい？」

驚太は、再びこくと頷いた。すると、多恵は本当に嬉しそうに驚太に笑いかけたのだ。その笑顔は、驚太に自分の母の顔を思い出

させた。

「……母ちゃん」

初めて聞く鷺太の声に良尚は、息を呑んだ。そればかりか、鷺太の顔には笑顔が浮かんでいるではないか。

（……良かった）

良尚の胸に熱いものがこみ上げてきた。本当に良かった。多恵に笑いかけようと良尚が振り返れば、多恵は目にいっぱい涙をためながら鷺太に暖かい眼差しを向けていた。

そこにいたのは、母親とその息子だった。

母親とはこんなに暖かいものなのだ。暖かくて、優しくて、安心するものなのだ。

良尚は、自分が向けられた記憶のない、母親の愛情をはじめて肌で感じた。

「……ほら、なにぼさつとしてるんだ。ここまでやつちやわなけりや、今日の飯は抜きだぞ！」

そこで初めて松吉が照れくさそうに口を挟んだ。鷺太と多恵の視線から逃げるように、農作業を再開してしまった。

しかし、その声が少しだけ震えていたのは、良尚の気のせいではなかったらしい。それは、多恵が良尚に笑って見せたので、確信へと変わったのだった。

良尚が松吉に新しい家族を紹介したその日から、あっという間に1ヶ月がたった。鷺太は、良尚が舌を巻くほどに農作業が上達し、見違えるほど元気になっていた。

もともと、鷺太はまじめで、根気もあり、頭の回転も速い性格だった。松吉などは良尚よりもずっと飲み込みがいい、筋がいい、などと良尚をからかった。確かに、今では、良尚が鷺太に農作業の手ほどきをされるほどだから、良尚も舌を巻かずにはいられない。

そんな日々の中、鷺太に明るい笑顔が見られるようになってきた。そして、声を出して笑うようになった、とか、村の子供たちと一緒に悪戯をして松吉に怒られた、などという話もちろほら聞こえてきた。

いつしか、変化していく鷺太の様子を見に、村を訪れるのが良尚の楽しみの一つになっていた。

3 女狐VS妖気姫

3 女狐VS妖気姫

ぱちん。

ぱちん。

一定のリズムで聞こえてくる。扇が開閉される音だ。

かと思うと、魂がすべて抜け出してしまうのではないかと思うくらい深い深いため息が部屋を漂う。

「……父上はまだ出かけぬのか」

澄んだ水のような声が、暇をもてあました感たつぷりで吐き出された。その質問に、傍に控えた女官が、否、と短く答えた。

すると、よりいっそう深い深いどこまでも深いため息が再び部屋中を覆う。南向きの明るい部屋なのに、どんよりと暗いのは気のせいだろうか。

「父上も、行くならとつと行けばよろしかるうに。何もモタモタ、ノタノタ、ぐずぐず、じたばたと……」

何度聞いても、見目麗しく、高貴な姫の言葉とは思えない。

女官はもう、完全にお手上げだった。どう扱っていいかわからないのだ。女官長には、“片時も傍を離れてはならない”ときつく何度も何度も念を押された。

しかし。

女官は、思わずため息をついてしまった。

とたんに、姫はそのため息を同意と捕らえたらしく、嬉々とした返事が返ってきた。

「そうであろう？ そちもそう思うであろう？」

「は、はあ」

もうやけくそだった。

（誰か来て。私一人で姫を見ているのは無理よ）

女官は祈るように、部屋の入り口を見た。

すると、かたん、とその入り口の妻戸が押し開けられる音が聞こえた。女官にとっても、姫にとっても、天の救いのように感じられた。

が、現れた人物に二人は同時に心の中で悲鳴をあげた。

（お、お方様！！）

女官は慌ててひれ伏す。姫も、優雅な身のこなしでさつと立ち上がり、上座を譲った。そして、誰もが見とれる上品なしぐさで、義母に頭を下げた。

「一姫。^{いちのひめ} 変わりはありませんか」

母は、扇で口元を隠しながら、姫に声をかけた。その声は抑揚がなく、一切の感情を感じられない。

しかし、姫はにこりと微笑み、母と同じように扇で口元を隠しながら、返答した。

「ご心配ありがとうございます。母上もお変わりございませんか」

親子であり、同じ屋敷にあつたとしても、毎日顔を見合すことは無い。母は屋敷の北に部屋が設けられ、そこからめつたに出てこない。姫も、自分の部屋からはめつたに外にでない。……ことになっている。

「一姫に、今日はお話があつてまいりました」

母は、機械的に話をする気のような。姫は、それでもまったくかまわない。かまわないが、この人が嫌いだった。

大嫌いだ。

この母も自分のことを好いてない。それは全身でびしびしと、物心ついた時から感じていた。

それが証拠に、この母は姫のことを、一姫と呼ぶ。これは一番目の姫という意味で、名前ではない。姫はこの人が、自分の名を呼んだのを生まれてこの方聞いたことが無いのだ。

（もったいぶってないで、さっさと話せばよいものを）

姫もそんなことを思っているなどと表には一切ださない。
そもそも、この女性は、弟たちの母ではあるが自分の実の母ではない。

父、良兼は、京都から姫の母と共にこの上総に赴任したが、すぐに地元の権力者、源護みなもとのまもるの姫を正妻に向かい入れた。それが、この女性だった。その後、姫の実母は亡くなってしまふ。

姫にしてみれば、実母の座を押しやって正妻に納まり、挙句、母が亡くなった後はいよいよ姫までも邪険に扱われ、幼き頃から憎む要素しか見当たらない人物だった。

（いったい何だというの）

姫の心の中のいらだち様といったら表現に尽くしがたいものがある。

「一姫もそろそろ、お年頃。わたくしの父がとても一姫を気にかけておいです」

「お気遣い痛み入ります」

姫はわざとらしく、にこりと微笑み、深々と頭を下げて見せた。
内心でははらわたが煮えくり返っていたのだが。

（余計なお世話だ！ だいたい、私は誰にも嫁ぐ気はない！！）

口元を扇で覆っているのが幸いし、姫の口が引きつっていることは誰にも分からない。

「そこで、殿と相談しましたところ、わたくしの弟の、扶たすくに一姫が嫁ぐことになりました。そのつもりで」

姫はさすがに二の句が告げなかった。

何だって？

今、この女狐は何て言った？

姫が絶句している間に、母はすつと立ち上がり部屋を後にした。そのことに気がつかないほどに、姫は頭が真っ白になっていた。

（嫁ぐ？ 私が？ しかも、よりによって、女狐の生家に？ それも狸親父の息子に！？）

姫は呆然としたまま、その場から動けなかった。

その一部始終を、固唾を吞んで見守っていた女官は、その姫の背中から、まるで妖気のようなドス黒い怒りを感じた。そして、誰でもいいから来てくれと懇願した自分の愚かさを心底悔やんだのだった。

4 妖の子（1）

4 妖の子

その日は、雲ひとつ無い晴天だった。

驚太は、頭上を見上げた。背もたれにしていた木の枝と葉の間から、太陽が覗いている。

まるで、ずいぶん長いこと今の暮らしをしているみたいだなと驚太は思った。あの悪夢のような日が遠い昔に感じる。

松吉も多恵も、驚太を自分の息子のようにかわいがってくれていた。その愛情が、自分に向けられたものではないのはわかっていた。

自分は夫婦の死んでしまった息子たちの代わり。それはわかって
いる。

それでも、嬉しかった。

それでも、安心できた。

一人ではない。自分のことの存在を気にかけてくれる人がいる。

それだけで胸が熱くなる。

多恵に「ほら、よく噛んで食べるんだよ」といわれればそれだけで、どんな夕飯より美味しかった。

松吉に「おまえは、賢いな。よし、これをやってみる」と言われれば、誰よりももっと働いて松吉の力になりたいと思った。

（でも……）

驚太は手のひらの握り飯をじっと見つめた。
彼はわかっていた。

こんな幸せは長くは続かない。幸せはいつだって、簡単に奪われる。そして自分にそれを守るだけの力はないのだ。

「驚太！」

驚太は、声のする方を見た。松吉が畑の中に小さく見えた。こちらに手を振っている。驚太は手早く握り飯を口に頬張ると、松吉のもとへと急いだ。

松吉は驚太が近くへ来るのを見ると、自分の分の握り飯を一つ驚太に手渡した。

「ツネ婆さんて分かるか？」

驚太は握り飯を受け取ると、口に頬張りながら頷いた。
ツネ婆さんとは、村で一番の長寿を誇る元気な老女だ。元気な分だけ口が悪い。驚太はこの老婆が少し苦手だった。

「様子を見てきてくれよ。朝から調子が悪いらしい」

驚太よりも頑丈なんじゃないかと思うくらいのツネ婆さんが、と驚太は目を丸くした。

（会いに行ったら、蹴られないかな……）

驚太はわずかに眉をひそめた。
そのわずかな表情の変化を、松吉は見逃さなかった。松吉はガハ

ガハと笑いながら鷺太の背中を軽くたたいた。

「あの婆さん、見かけによらず手が早いからな。うまくかわせよ」

鷺太は返事をする代わりに、がつくりとうなだれてみせた。

鷺太が村に戻ると、入り口に見かけない後姿を見つけた。

（屋敷の人かな……？）

鷺太は首をかしげながら、その後ろ姿に歩み寄った。

声をかけるつもりというわけではない。ただ、その人物がツネ婆の家への通路にちょうど居たというだけのことだった。まもなく、鷺太に気がついたその男がこちらに近寄ってきた。

「おい、上総殿のお屋敷はこのあたりか？」

その男は、すらりと背が高く、実によく鍛えられた体付きをしていた。日に焼けた小麦色の肌も、たくましさをさらに強調させる。

太い眉と力強い光を放つ切れ長の目が顔全体を印象付ける。年は良尚とそれほど違わないのだろう。しかし、どこか繊細でやわらかいイメージの良尚に比べて、この男は無骨者という言葉がぴったり当てはまる。気品や優美という言葉とは対称の位置にある人物と言えよう。

ぼろぼろの着物と汚れきった袴姿だったが、腰に挿した刀だけが不釣合いに立派で、鷺太の目を引いた。直後、鷺太の心臓が、どくと大きく脈打った。頭からざあっと音を立てて血が引いていくのがわかる。

鷺太は思わず後ずさりする。しかし、足がうまく動かない。尻もちをついてしまう。

あの時と一緒だ。
あの日と一緒だ。

あの日も、刀を腰に差した男たちが村に押し入ってきて、あつと
いう間にすべてを奪った。

父を、母を、家を、村を、そして鷺太の生きる希望を。

（殺される！）

足が震えた。逃げなきゃ。そう思っのに足が動かない。
ふと鷺太の脳裏に暖かい笑顔がよぎる。

「……良……尚……さま……」

知らず知らずに口をついた。途端に、涙があふれた。

「どうした。おい」

男が怪訝な顔で鷺太の肩に手を伸ばす。反射的に鷺太の体がビク
リと大きく震える。その様子に男は思わず手を止めた。

「大丈夫か？ 顔が真つ青だぞ」

驚太はがちがちと震える齒を、必死で抑えた。

（助けて、良尚様！！ 助けて！！）

その時だった。

「おめえ、そこで何してんだ！？」

驚太も男も一斉に声の方を振り返る。ツネ婆だ。ただならぬ気配に気がついた老婆が、思うように動かない体に鞭打って、家の外へ出てきた来たのだ。

驚太には背中の中がった小さな老婆の姿が、自分でも信じられないほど頼もしく思えた。

ツネはその高齢からは想像ができないほど、凜としていた。その眼光は矢のように男を射た。

ツネの目には、どう見ても幼い少年を図体のでかい男が迫っているようにしか見えない。子供のおびえ用といったらどうだろう。尋常じゃない。それで、思わずドスの聞いた声を張り上げたのだった。しかし、男は飄々としたものだった。

「何もしていない」

何もしていないのなら、なぜ子供がそんなに真つ青な顔をしているというのだ。もしかして、こいつが盗賊ではなかるうか。

「ぼつずをこっちへよこしな」

ツネ婆は、相変わらずにらみを効かしながら男に言い放った。男はほとほと困ったというように、肩をすくめる。

なんて白々しい演技だろう。きっと子供をさらって、人買いに売り飛ばすつもりだったに違いない。

「何か誤解しているようだが、俺はこいつに道を尋ねただけだ」
「嘘をつくな」

「嘘じゃない。俺は、平良兼殿の屋敷へ行く途中なんだ。このあたりのはずだが、と思い、道を聞くためにこの村へ立ち寄っただけだ」

ツネの顔に少し変化が見られた。

確かに、このあたり一帯を治めるのは、平良兼である。だが、こんな汚らしい格好の、どこからどうみても怪しい者が屋敷の主に何の用があるというのか。

ツネはちらりと子供を見た。ぎりぎりのところで耐えていたのだろう。ツネの登場に気が緩んだのか、まるで川が決壊したように、彼の目から涙があふれている。可哀相に。よっぼど怖い思いをしたのだろう。

「じゃあ、なぜそのぼつずは泣いておるんじゃ」

「こっちが聞きたい。突然泣き出したんだ。俺は何もしちゃいないさ」

男はわざとらしくため息をついた。

「突然？ 何もしていないのか？」

「ああ。誓って、指一本触れてない」

ほとほと男が弱りきった情け無い顔で鷺太を見下ろすので、ツネはいよいよ真相が分からなくなってきた。ツネの脳裏に、この子供が村へ来た当初の頃のこと浮かんできた。彼が、発作的に村の若い男におびえ、悲鳴を上げたことがあると松吉がぼやいていたような気がする。

困ったようにツネは子供の顔を眺めやった。

何があつたというのだろう。こんな幼い子供が、どんな恐ろしい記憶を抱えて生きているというのだろう。

ツネは胸を締め付けられるような痛みに襲われながら、子供によたよたと歩み寄った。そしてそつと子供の頭に手を置いた。

ツネ婆の豆だらけの硬い手が鷺太の頭をそつと撫でた。その暖かさに、鷺太の涙はますますあふれた。

たまらずツネ婆の胸に飛び込むと、ツネ婆は何も言わずに鷺太を受け止めた。ツネ婆の胸は、広く、大きく、懐かしい匂いがした。

すると突然、男が村の外をうかがうように振り返った。

鷺太の耳に、悲鳴が飛び込む。見上げた男の顔に緊張が走ったことを鷺太は感じた。

間もなく、無数の蹄の音が聞こえてきた。

再び鷺太の鼓動が大きく、早く、体中を駆け巡る。

「物陰に隠れろ！ 早く！」

男は鋭い声で叫んだ。

ツネ婆ははつとした顔を見せたが、鷺太はすでに腰を抜かして動けない。

男は、ちつと舌打ちすると、鷺太を軽々と担ぎ上げた。そして、最初に目に入ったのが馬の飼葉の山だったのだらう。その中へ、無造作に鷺太を放り込む。

「絶対に物音を立てるなよ！」

そう言つと男は自分の馬を飼葉の脇の馬屋につなぎ、自分も物陰に身を潜めた。ツネ婆も積んである薪の陰に隠れることに成功する。鷺太は何とかもぞもぞと身動きして、全身を飼葉の中に消し去った。

数分後、鷺太の耳に「用が済んだら、燃やせ」と、まるで鬼が地獄の底から発するような恐ろしい声が届いた。

妖の子（２）

「格子を開けよ」

姫はそばに控える女官に言い放った。女官はその命令を聞くべきか否か迷っているようだった。

「部屋に風を入れたいのだ。格子を開けよ」

苛立ちを隠さずに、姫はそう言うと、手に持っていた扇を広げて立ち上がった。

「どちらへ？」

女官が慌てて声をかける。

「そなたたちが、やらないのなら私がやる」

女官は慌てて、姫の部屋と外界とを隔てている格子戸を押し開けた。姫にそのようなことをさせるわけにはいかない。

そんな女官の様子を横目に、姫は開けられた格子戸の向こうを見る。透けるような青空に、簡単に心を奪われた。今の今まで感じていた苛立ちもどこかへ消えてしまったように、胸の中がす

つと晴れ渡っていく。

その青空に誘われるように、姫はそのまま足を進めた。御簾みすを押し上げて格子戸の方へ近付く。

「ひ、姫様！」

女官が慌てて姫を御簾の中へ戻そうとした。

普通、身分の高い姫様は、その顔を人の目に触れさせないものだ。御簾というベールの向こうに身を置き、さらに、几帳と呼ばれる布の影に身を隠し、さらに大きな扇で顔を隠す。それがこの姫は、自ら御簾を持ち上げ、誰の目に留まるかわからない、開け広げられた格子の前に平気でたっている。広げられた扇などは、無造作に片手で握られ床を向いていて、用をなしていない。

天皇の血を引く血筋である平良兼の娘ともあろう高貴な姫の、このようなはしたないところを屋敷の別の女官に見られたら、自分は罰を受ける。女官なら誰でも考えることである。懇願するように、自分にひれ伏す女官を姫は冷ややかに一瞥した。

「姫様、お戻りください！」

別にこの女官が嫌いなわけではない。困らせてやろう、などと思っ
っているわけでもない。

ただ、不憫に思う。姫が何を考え、何を思い行動しているのか理解しようとし
ない。理解しようとも思わない。それでいて、なぜ姫がこのようなことをする
のか、言うことを聞いてくれないと嘆いてばかりいる。上の命にしたがっ
ている彼女には何も非はないのだらう。

だが、姫自身はそんな生き方はしたくない。納得の出来ないことに、二度と戻らぬ貴重な時間を捧げるなど愚の骨頂。そう思うだけだ。

姫は再び視線を部屋の外へ向けた。次の瞬間、目を見開いた。

「あれは……なんだ」

見る見る打ちに姫の顔から血の気が引いていく。

「あれは何なのだ！」

わけが変わらず、女官が姫の視線を追う。女官の目にも、青空の中に黒い一筋の煙が上がっているのが見えた。方角は、この屋敷の南。

「まさか……」

姫は一瞬、唇をかみ締めたかと思うと、声を張り上げた。
この黒煙の方角は……！

「鷹雄——！」

数秒後、姫の声を聞きつけた身分の低い男が現れた。男は静かに膝を折り、頭を深く下げる。

姫が決死の表情で口を開きかけた、その時だった。

「尚子様^{たかこ}」

姫と女官はまるで稲妻にあたったかのように動けなくなった。

なんとか姫がその声の方を見ると、般若はんにゃの形相をした年配の女官が立っていた。

「ふ、藤乃……」

姫が顔を引きつらせる。

「下がれ」

藤乃は膝をついたままの鷹雄に、怒りのこもった低い声で命じた。そして姫に向き直る。

「なりません」

藤乃が先手を打った。

「でも……」

「なりません。由緒正しき、帝の血を引く姫なのですよ、あなた様は」

「わかっている。しかし……」

「なりません！」

藤乃はぴしゃりと言い放つと、自分の後ろに控えていた女官たちを勢いよく振り返った。

「姫を部屋へお連れしなさい。さあ、早く！」

御簾の中へ押し戻そうとする女官たちに、姫はあせりを覚えた。

「藤乃！」

姫は引きずられるように、部屋へ押し戻されて行った。

鷹雄は、姫の表情から何か異常事態が発生したことを察知していた。

姫からは何の指示も得られなかったが、彼女が何かを自分に訴えてようとしていたことは伝わったのだ。詳しく事情を聞いたかったが、女官の長である藤乃から下がれと命じられたのでは無言で身を引くしかなかった。

身分の低い鷹雄から姫に声をかけることは許されない。本来ならば、一生涯、目をあわすことすらかなわぬ高貴な姫なのだから。

しかし、何事かがあったのは明白。なんとかして調べるしかないな、と鷹雄は思った。

そもそも、命じられたことだけするような家臣は主人の本当の望みをかなえられるとは思えない。ただ指示を待ち、それを遂行するだけならば二流。主人が必要な時に、必要な分だけの手を差し出せる必要がある。

無論、その手には主人の一番ほしいものが握られていなければならない。それは、武器であったり、助言であったり、自身の命であったり。

そのためには、普段から主人の思考に寄り添って、同じものが見えていなければならない。主人が、何を感じているのか、何を思っ

ているのか、何を欲しているのか。

今だけではない、これから先のこともすべてだ。それが分かれば、おのずと自分の行動は決まってくる。

鷹雄は姫の部屋の前から下がろうと、一礼して踵を返した。その鷹雄の視界を何かがかすめる。

(……あれは！)

鷹雄は、無礼と知りながら再び姫を振り返る。すると、女官3人がかりで部屋の中へと引きずり込まれていく姫と目が合った。姫が、力強く頷いた。その姿が、自分に“頼んだ”と言ってる。これは確信に近い。

鷹雄はすぐさま屋敷を後にし、馬に跨る。そして、南の空に上る黒い煙の元へと、馬の腹を何度も蹴り、急ぎ向かった。

鷹雄と姫の悪い予感当たった。

鷹雄が肩で息をしながら村の付近までくると、目を覆いたくなるような光景が待っていた。

普段、この時間は農作業をしているはずの村人たちの姿が見当たらない。あるのは、むごたしく惨殺された村の男たちが田畑にころがっているという現実。あまり感情を表に出さない鷹雄も、思わず顔をしかめた。

鷹雄は馬を降り、近くの木の枝に馬を繋ぎ、煙の立ち上る村へと急いだ。

主は、自分が報告するまで、この煙は村のボヤだと信じているに違いない。

残念だが、盗賊に村が襲撃されたことは間違いないだろう。彼女の悲しむ顔が脳裏に浮かび、鷹雄の胸を締め付ける。

（せめて、驚太が生きていてくれれば……）

鷹雄は村の様子をうかがうべく、村を囲う垣を迂回し、入り口へと忍び寄る。そして、村の中をそっと覗き込んで目を丸くする。

（あれは……なんだ!?!）

鷹雄は自分の目を疑った。

どう見ても、ありえない。

信じられない。

鷹雄は、よろよろと、それに引つ張られるように近づいていった。

「どうなってるんだ……」

鷹雄は、それを見つめながら、呟いていた。

「わからん。もうずいぶんと、あの調子だ。水をかけても火が消えん」

鷹雄の驚きは、その場に人がいたことに気付かないほどだった。

それもそのはず。

鷲太が燃えている。

燃えているのだが、どこも燃えていない。

鷲太の体は確かに真っ赤に燃え盛る炎の中にあるのだが、鷲太の髪も肌も着物も何も燃えていない。鷲太自身も痛みや熱さは感じていないようで、その表情は穏やかだ。つまり、文字通り“炎に包まれている”だけなのだ。それは、まるで炎の殻に護られて眠っているようだった。

「鷲太……まさか」

（妖の子どもなのか……？）

しかし、短いながらも、彼と共に過ごした時間が鷹雄にその事実を拒ませる。

鷲太はどこからどう見ても人間の子供だった。姿かたちはもちろん、彼のどこか寂しげな微笑みも、不器用な優しさも。彼が、人を喰らうような恐ろしい妖であるとは、到底思えない。

鷹雄は吸い込まれるように、鷲太に手を伸ばそうとしたが、隣にいる男にその手を掴まれる。

「やめておけ。焼かれる」

男は強い口調で鷹雄を制した。

「見る。あの子供がああ馬小屋を焼いた。ついでに、そこに転がってる黒い塊にならなくなければ、手を出さないほうがいい」

鷹雄は男が顎で示した方を見た。

確かに、そこは村の馬小屋があつた場所だつた。黒い煙が上がつていたのはこの馬小屋からだつたようだ。今は真つ黒な墨が転がっているだけだつた。

その横に、二つの黒い塊が目に入った。

（あれは……まさか……）

鷹雄が男を振り返ると、男は臆せずに言い捨てた。

「俺の馬と、こいつが隠れていた飼葉の山に火をつけた運の悪い男のなれの果てだ」

鷹雄はぞつとした。原型をとどめていない。

「それより、こいつ……どうにもならんぞ」

男は、ごうごうと音をたてる炎の中に身を置く鷺太を眺めやる。

「矢を射てみたが、あつという間に燃え落ちた。今、この刀を投げ射てみようかと思つていたところだ」

そう言つて男は腰に下げた刀を抜いた。甲高い金属音が響き渡る。

確かにこのままでいいはずが無い。

しかし、殺すのか？

（……絶対に泣くぞ……あの方は……）

脳裏に浮かぶその泣き顔に、鷹雄は男の提案を受け入れることができない。

「水……水はかけてみたのか？」

「やってみたさ。消えたのは水のほうだな」

男は肩をすくめた。

（殺すしかないのか……）

鷹雄は苦い気持ちでいっぱいになった。

出来れば殺したくない。

生きていてほしい。

自分の主人の悲しむ顔が見たくないから、というだけではない。

鷹雄は鷺太に幼い頃の自分を重ねていたのだ。

『死ぬくらいなら、私のために生きよ』

自分よりも5つも年下の小さな子供が、鷹雄の主人になった瞬間だった。あの時の幼子の笑顔は忘れない。

この人のために生きよう。

そしてこの人のために 死のう。

その時、そう心に誓ったのだ。

「刀でも刃が立たないかもしれないがな」

男は刀を構えた。今にも投げようとしているが、鷹雄はそれを止

めることも促すこともできない自分を情けなく思った。

どうしたらいいんだ。

何か他にないのか。

鷹雄の気持ちだけがはやる。

「驚太ーっ!!」

背後からの声に鷹雄は勢いよく振り返った。そこには、鷹雄の主人の姿があった。

主人は、長い髪を一つに束ね、着物に袴という姿だ。慣れた様子でひらりと馬を飛び降りると、目の前に広がる想像以上の光景に呆然と立ち尽くしている。無理も無い。目の前で、子供が生きながら焼かれているのだから。

それにしても、と鷹雄は思った。

(……まさか、屋敷を出て来れるとは……)

鷹雄が屋敷でひと悶着あったにちがいないと、藤乃の鬼の形相を想像して、ぐったりしてる間に、主人がふらふらと歩きだした。

「……良尚様!」

鷹雄は驚太に近寄ろうとする細い良尚の体を抱き止めた。

「近づいてはいけません!」

「何をしている! なぜ、火を消してやらない!」

「消せないのです……」

「何を言っている」

「水をかけても、矢で射殺そうとしても、だめだったそうです」

そう鷹雄が言ったとたんに、良尚の表情が変わった。

「射殺そうとしただと！？ 誰が殺せと命じた！！」

良尚は鷹雄を突き飛ばした。そして鷲太に駆け寄ろうとする。が、今度は違うところから良尚に静止の手が伸びた。

「やめておけ。死ぬぞ。どう見てもこいつは人間じゃない」

良尚は、男をにらみつけ、その力強い腕を振り払う。そして低く唸った。

「離せ」

男は、確かにその少年の言葉に魔力を感じた。自分よりもはるかに小さく、細い華奢な体つきのこの男に、自分が力負けするはずが無い。それなのに、いとも簡単に腕を振りほどかれた。

いや、動けなかったのだ。

自分がこんな小僧に、圧倒されたというのか。

（何者だ……？ ただのガキだと言われても俺は納得せんぞ）

男は目の奥をきらりと光らせながら、少年の背中を目で追った。

「驚太！！ 聞こえるか！ 私だ！」

良尚は叫んだ。炎の中の驚太に届くだろうか。

「もう大丈夫だ！ 目を開けろ！」

もう、驚太と良尚の前には数十センチほどの距離しかない。驚太を包む炎が良尚の髪を焼く匂いがする。

「良尚様！」

背後から鷹雄が駆け寄ってくる気配がする。
頬が熱い。

衣がちりちりと焦げる。

それでも、良尚はそつと驚太に手を伸ばした。

『良……尚……様……？』

その時、ゆっくりと驚太の目が開けられた。焦点の定まらない目が空を彷徨う。

「そつだ。もう心配いらない。よく頑張ったな」

良尚は驚太の頬に触れた。触れることができたのだ。不思議と炎に触れている手は焼かれる様子もなく、痛みもない。ただ、無性に熱いだけだった。

『良尚様……』

驚太が、力なくほほ笑んだ。良尚の胸に、刃物でえぐられたような痛みが走る。

（人間じゃない、だと？）

こんなに優しい心を持つ子供が人でないはずがない。どこからどう見ても、子供が親を奪われて、泣いているようにしか見えないじゃないか！

「もう、いい。おまえは村を護ったぞ。見ろ、焼けなかったじゃないか」

良尚は驚太になんとか微笑みかけた。本当は胸が張り裂けそうなほど痛かった。今にも瞼から涙がこぼれ落ちそうだった。それを必死で絶える。

（間に合わなかった……私はいつもこうだ……）

また、間に合わなかったんだ。

ここにたどり着くまでに目にしたたくさんの遺体。つい先日笑顔で語りあつたばかりの村人たちだ。その中に……松吉の姿も見つけたきがした。

女たちはひどい目にあわされていないだろうか。

子供たちは無事なのだろうか。
彼らの笑顔を、彼女たちの明るい笑いを思い出ただけでも、苦しくて息が出来ない。

どうして、自分はこんなに無力なのだろう。
何のための身分だ。
自分の大切な民を守れなくて何が若様だ。

（せめて…… 鷲太だけでも生きていてほしい）

良尚はいつのまにかあふれていた涙を振り切るようにぬぐう。そして、両手で鷲太を抱きしめたのだ。

その様子を背後から見守っていた者には、良尚が炎の中にその身を投じたようにしか写らない。ぎよつとした鷹雄は、自分の頭からさあつと血の気が引く音を聞いた気がした。

「良尚様……！」

悲鳴にも似た鷹雄の声も良尚の耳には届かなかった。

（ごめんな、鷲太。すべて私が悪いんだ）

怖い思いをさせてすまなかった。
不安な思いをさせてすまなかった。
二度もおまえを死のふちに立たせてすまなかった。
もう、大丈夫だから。
もう泣かなくていいから。

戻っておいで。

ふと気がつくと、良尚の耳元で泣き声が聞こえてきた。

「う……う……」

良尚が驚太から体を離すと、驚太の体を包んでいた炎が見る見るうちに消えていくのが分かった。そして完全に消えてしまふのを見届けると、再び驚太を力いっぱい抱きしめる。

「我慢するな。悲しい時はいっぱい泣けばいい。泣いて泣いて、泣きつくせ。そしたら、明日は笑えるから」

驚太は良尚の胸の中で声をあげて泣いた。両親を失くしてから初めて、声を上げて泣いた。

1 タヌキとキツネ

1 タヌキとキツネ

一瞬にして部屋の空気が変わった気がした。
大股で部屋に入ってきたのは、良尚の父、平良兼たいらのよしかねその人である。
良兼は身にまとう権威を振りかざすように上座へ座り、ひれ伏して彼を待っていた良尚と小次郎に代わる代わる刺す様な視線を送った。

京の都から良尚の祖父、高望王たかもちのおきみがこの上総の国に赴任して十数年上総の介すけとして絶大な力を振るった。任期を終えた高望王は都には帰らず、そのまま土着し、豪族となってめきめきと力をつけてきたのだ。

祖父の後をついで上総の介に着任したのが、父の良兼である。

高望王のように、天皇家の直系ではない皇族は、朝廷にとって稼がず浪費するばかりの厄介者。そのため地方の役人として職を与えて働かせるのが慣例になっていた。

余談ではあるが、高望王の祖父が794年に平安京創設したことで有名な桓武天皇かんむある。

ちなみに、介とは国司こくしのうち次官をさす。国司は上から順に、守・介・掾・目じょう・さかんという4つのランクがある。今で言う県庁に勤める高給

取りのオエライ様方のことであり、上総の介というのはつまり、上総の国のナンバーツーということだ。

しかし、長官である守は、ほとんど京の都にいて地方の田舎の政治には首を突っ込むことがなかったり、そもそも守自体が空席だったりで、その実、次官の介が統治していた。

「この者は、下総の良将叔父上の名代で参ったと申ししており、こうしてお連れいたしました」

うやうやしく良尚は頭を下げながらはきのある口調で告げると、顔を上げた。

「ほう、良将と、のう…」

良兼の眉がピクリと『良将』という言葉に反応した。良将は良兼の同母弟であり、幼き頃からの目の上のタンコブである。その名を聞いただけで、まるで条件反射のように苛立ちを覚える。

とにかく気に入らない。何もかもが鼻につく。なぜあれが弟なのかと何度思ったことか。

なんと言っても、兄の国香くにかと自分よりも高い身分にある。そのため、一族の氏を束ねるのは三男の良将なのである。長兄の国香を差し置いてだ。人の良い国香は、力のあるものが氏長になればよいのだ、などと笑って言うが、良兼は甚だ気に入らない。

まだある。奥州で蝦夷えみしとの戦いに勝って、征夷大將軍せいいたいしやうぐんとなった坂上田村麻呂かのうえのたむらまろと言えば、中学校の教科書でも登場する有名人物である

う。

その奥州を監視する役として『鎮守府將軍』という長官がいる。
この長官に国香が抜擢された。

長兄の国香の任期が終われば、次は次兄の良兼か、と当然思うではないか。しかし、命を受けたのは三男の良将。腸が煮えくり返る思いで兄からその連絡を受けたのが昨日のことのようだ。

そんな良兼の胸中などしるわけもない小次郎は、顔を伏せ床の木目の一点を見つめながら全神経を耳に集中させていた。

久しぶりに耳にした良兼の声は低く重い。記憶の中の声とは少しずれていた。とは言っても、数えるほどしか接点もなく、自分の幼い頃の記憶だから仕方のないことだろうとすぐに納得した。

「面を上げよ」

「はっ」

良兼の重たい視線を感じながらも、小次郎は顔を上げ、臆せずに見つめ返した。

「お前は……」

良兼の口元が緩む。しかし目は笑っていない。逆にぴりりと痛みすら感じるほどの鋭さをはらむ。

「お久しぶりです、伯父上」

小次郎は堂々とした声で言い放った。斜め前方にいる良尚の驚きの視線を感じながら小次郎は続ける。

「相馬の平小次郎将門たいらのへいじろうまさかどにございます」

「将門……？ おまえ良将叔父上の嫡子か！？」

良尚の声が部屋に響いた。小次郎は、一瞥いちべつするだけでそれを肯定する。

しかし、良兼の顔に驚きの表情は微塵もなかった。

「都から戻ってきていたのか」

「はい、先日。その足でこちらへ。父の良将が亡き後、頼れるは常陸（今の茨城県北東部）の国香伯父上と、この上総の良兼伯父上しかおりませぬ。なにやら良くない噂も道中で耳にいたし……どうかお力添えのほど宜しくお願い申し上げます」

この小次郎の低姿勢には、良尚も驚いた。さっきまでの、でかすぎる態度はどこへいったのだろう。

図体がでかいから余計に横柄に聞こえるあの物言いは。思わずパクパクと口を動かしてしまう。

（え、演技！？）

それにしては、なんと自然。こうやって、恐ろしい都の政争を生き抜いてきたのだろうか。良尚は呆れる返って逆に、関心してしまっていた。

「良くない噂とな」

良兼は面白そうに問う。だが、眼光は鋭いまま、小次郎を捕らえて、一瞬の隙も見逃すまいとしているようにも見える。

「なにやら、常陸の源護殿が我が亡き父の下総の国をのつとろつと画策している……………とかいないとか……………」

良尚はぎくりとなった。小次郎は困った困ったと言わんばかりにため息をついていたし、父は「ほう、それは聞き捨てならぬのう」となぜか暢気に言う。

そんな様子に、なぜか良尚は背中が凍るような冷たい感覚を覚えた。

一見穏やかにかわされている会話。ゆっくりとかわされる久しぶりの伯父と甥の談笑。

もし、今、この場が小次郎との初対面だとしたら気がつかなかったかもしれない。

（キツネとタヌキ…………）

腹の探り合いだ。そう、それはまるで、自分と義母のように…………。

そう感じた瞬間、良尚の体を言い得ぬ嫌悪感が襲った。鳥肌が全身を駆け巡る。

汚い。

醜い。

大人は、男は、政治は。

権力を得るために、平気で人を蹴落とし嘲り笑う。女を蔑み道具のように扱い、人を殺し勝利と歌う。

（…………女も同じだ。醜い）

良尚は急にむかつきを覚えた。口元を思わず押さえる。

「どうした!？」

父の声が慌てた様子で声をかける。どうやらキツネとタヌキの化かし合いは一旦終結していたようだ。

「大事はございません」

かすれた声で答えるも、急激に目が回り朦朧としてきた。真っ青な顔で後ろに倒れそうになる良尚を、間一髪、小次郎のたくましい腕が受け止める。

「良尚殿!？」

覗き込む小次郎の顔がぼんやりかすんで見える。

(……………誰だっけ……………この人……………)

と一瞬、寝ぼけた良尚は、それまでが嘘のように、がばりとすばやく起き上がる。

「……………ぎゃあ!-!」

大げさまでに、小次郎の腕の中から飛びのく良尚。

小次郎はその良尚の突飛な行動に驚き、固まっている。手など、先ほど良尚を抱きかかえた時のまま、宙に浮いている。

「……………お前というやつは……………何をやっとなるんじゃ、馬鹿者っ!-!」

良尚の高貴でない、気品もない、知性もない、ないない尽くしの行動に良兼の雷が落ちたのは言うまでもない。ぽかんと口を開けたまま、小次郎はこの親子喧嘩をしばらく見学していた。が、どこを探しても、先ほどまでの恐ろしい良兼や平氏の子息である良尚の姿は見当たらない。だから、不意に、ぷつと吹き出してしまった。この場合不可抗力であろう。

その笑い声で我に返った良兼がばつの悪そうな顔で咳払いをする。

「とにかくっ！！ 将門、長旅で疲れたであろう、ゆっくりしていきがいい」
「はっ」

真顔に戻った良兼は、部屋を後にしようと将門に背を向けた。その時だった。

良尚は聞いた。確かに聞いた。
鬼の声を。

「やつを殺せ」

2 いっその手で

2 いっその手で

「どうかしたのか？」

背後からの声で、良尚は我に返る。

振り返れば、腰を上げた小次郎が腕を組んでこちらの様子をうかがっている。先ほどまでのしおらしさは、どこへやら。

（すっかり騙されたじゃないか）

良尚はじろりと睨み付ける。

（何が相馬小次郎だ。平将門と名乗れば、私だってすぐに分かったものを）

だが、それを本人に言ったところで、「嘘はついてない」などと言われるに決まってる。

それにしても、何故気付かなかったのだろう。

自分も幼少のみぎり、この屋敷で会ったことがあると言うのに。

でも、その時の印象は、目もくりくりとして大きく、笑顔の柔らかい心優しいお兄ちゃん、という感じだった。幼心に、淡い憧れすら抱いたような記憶もある。それなのに、こんなに不貞不貞しく、

しかも図体もでかく、態度も威圧的な無骨者に育つなどと誰が想像しただろう。

（詐欺だ。あの人がこんなになるなんて……あんまりだ！！　まさか……いずれ鷲太も……）

良尚は、自分の想像に悪寒を覚え、激しく首を振ってそれを吹き飛ばす。

そんな良尚の胸中を一切察するすべがない小次郎は、良尚がものすごい眼光で自分を睨み付けていたかと思うと、突如、首が振り切れて飛んでいってしまうのではないかと思う勢いで左右に振るのでギョツとするしかない。

「な、なんだなんだ。おまえ大丈夫か？」

おそろおそろ小次郎が声を掛ける。

「うるさい！！」

「……いい加減、機嫌直せよ」

「お前、いったい何しに上総に来た」

良尚は小次郎に詰め寄る。

「……俺の話は無視かよ」

小次郎は肩をすくめて見せたが、その顔は面白いものを見つけた子供のようにも見える。ますます良尚の気を逆なでする。

「返答次第では、追い返す」

「おいおい、伯父上はゆっくりしろっておっしゃっていたぞ」

「あれは、翻訳すると『とつとと帰れ、狸野郎』という意味だ」
「……お前口悪いな、意外と」

ますます、小次郎は面白そうににやりと笑う。

「お前、ではない。良尚だ」

良尚は胸の前で腕を組んで、わざとらしく胸を反らす。そんな良尚の様子に小次郎はふっと笑った。

「良尚ねえ……」

小次郎は探るように良尚の顔を覗き込む。しかし良尚の表情につける隙は見られない。

二人は数秒、無言で見つめ合った。お互いに昔の面影を相手に捜していたのかもしれない。

「恐れ入ります」

第三者の声が二人の間を割って入るまで、ずいぶん長い時間だったように思えた二人だった。

声の方を振り返ると、良尚付きの女官、藤乃が床にひれ伏していた。

「げ、藤乃……」

思わず良尚の顔が引きつる。

「良兼様から、相馬様に客室をご案内するようにと、承りました。藤乃にございます」

藤乃はやうややく一礼した。そして、後ろを少しだけ振り向き、一緒に控えていた女官たちを紹介する。

「こちらは、相馬様のご滞在中、お世話をさせていただきます女官にございます」

女官達は、ずっとひれ伏したままであったのに、さらに深々と頭をさげ、口々に名を名乗る。

「小萩こはぎにございます」

「梅花うめはなにございます」

藤乃はすつと立ち上がり、小次郎の目を捉えた。小次郎はその瞳の中に、好意とは別の種ものを感じ取った。

「部屋へご案内いたします。さあ、どうぞ」

藤乃はそのまま、小次郎を先導しようとする。

「かたじけない。よろしく頼む」

良尚は、ちらりと小次郎に視線を送った。そう言った小次郎は、事もあるうにさわやかな笑みを浮かべていたのだ。

（ま、また偽小次郎！！）

どうなってるんだ。この変わり身の早さはいったい何なのだろう。

藤乃たち女官に、騙されるな！！　と言ってやろうかと口を開い

たところで、歩き始めた小次郎がくると良尚を振り返ったので、口をパクパクと開閉させ言葉を飲み込んだ。

「あとで、このあたりを案内してくれ」

小次郎は、にこりと微笑んで見せた。

（なんで私がそのようなことをしなくてはならないのだ。冗談じゃない。これから、鷹雄の後を追って盗賊退治に合流しようと考えていたのに）

藤乃の手前、说不出的良尚は、どうやってその申し出を断ろうかと考えあぐねていると、再び小次郎がふっと笑う。そして、ずっと良尚に顔を近づけた。

ぎよっとして固まった良尚の耳に、小次郎がそっと囁く。

「口実を作ってやる。口裏を合わせろ」

離れていく小次郎の顔を目で追うと、柔らかな微笑みに捉えられた。

（な、なっ！？）

お見通しなのだ。

良尚が再び屋敷を抜け出そうとしていたことも。それが、彼に許されていないことも。

その上で、なんの目的か知らないが、良尚に手を貸そうと言うのだ。

「……承知した」

「決まりだな」

小次郎は、ニヤリと口端を上げて、再び藤乃の後を追う。

「あとで部屋へ行くから、ちゃんと、支度しとけよ」

含みのある言葉を残し、振り返らずに良尚に手をふる。その後ろ姿を良尚はじっと見つめた。

お前は何のために私に近付こうとする。

何を考えている。

何をしに上総へ来た。

お前の命を狙う者がいるこの、上総へ……。

小次郎は、廊下を歩きながら、口元が緩むのを押さえるのに必死になっていた。

（あいつ、ほんとウツケだな）

あの時の顔ときたらどうだ。鳩が豆鉄砲を食らった時の顔とは、あの事だ。

もともと大きなドングリ眼が、本当にまん丸に見開かれて、ぽかんとしていた。

「ぷっ……」

思い出し笑いに思わず小さく息が漏れる。

「何か……？」

先導していた女官が表情を変えずに、こちらを振り返った。

「いや、何でもない」

優しく微笑みかけると、藤乃はにこりとみせず、再び歩き出す。後続の女官は、頬をほんのり染めているというのに、食えない女官だ。

小次郎はまたしても、要注意人物の発見に、自分の現状を思い出して顔を引き締める。

そう、ここは敵陣まっただ中だ。

さっきの良兼との対談で明らかになった。

良兼とその兄、国香。そして、二人の義理の父、源護。みなものまもるこの三人が、自分を亡き者にして、父良将の領土を自分達の者にしようとしているのだ。

（首謀者はおそらく、源護）

源護は前任の常陸の国司である。任期を終えても、都へ帰ることなくそのまま常陸の国に土着した。

この護がこの地で蓄えた富と権力を平国香は後ろ盾として利用し

た。それは婚姻という形で、現れている。

源護の娘が、国香をはじめ良兼、そして、二人の腹違いの弟良文よしふみにも嫁いでいる。

当然、小次郎の父良将にも、この護の娘との縁談話は来た。

しかし、良将はこれを拒否。長兄、次兄からは「義父の娘を突っぱねるなどあつてはならぬこと」と激怒されたのは言うまでもない。

以来、兄弟間の確執はますます大きく、いつしか修復不可能になり今日まで来てしまっている。

（長居は無用だな）

しかし、良尚という男に興味を持たずにはいらなかった。

先ほどの、良兼との謁見の際、序盤は小次郎も息を呑む豹変ぶりだった。身につけている着物は、村の火事現場で付着した泥や煤で汚れ、髪も乱れている。

それなのに、父親を前にした良尚はどこから見ても、貴族の嫡子であった。こんな都から忘れられた遠く離れた土地の田舎貴族の嫡子ではない。明らかに、帝の血を引く皇族の嫡子だ。

小次郎は、ひれ伏しながら息を呑んでいた自分に気がついた時、思わず笑ってしまいそうだった。自分だって帝の血を引いているのに。

（どうやら俺は、気品というやつを母親の腹のなかに忘れてきたらしい）

そう思い、やっとの思いで笑いをかみ殺した。

そんな時、部屋の外からのさわやかな秋の風が、小次郎の鼻をそ

つと撫でていったのだ。

(……この時期に?)

花の香りがした。庭の花から、風に乗ってきたのだろうか。どこか懐かしさを感じる、心地よい香りだったので印象に残ったのだ。しかし、その謎は先ほど思わぬ形で解決する。

先ほど、今にも触れそうな距離で同じ香りを嗅いだ。そう、良尚からだ。

(香をたしなむとは、さすがに貴族の嫡子。都でもあるまいに、女を口説くのに忙しいと見る)

なかなか角におけない。あの華奢な体で、恋人がいるのか。

小次郎はそれに付随した諸々を勝手に妄想して、再び、ぷつと噴き出してしまった。

ちなみに、風呂になかなか入れなかったこの時代、体臭を隠すために、香を服に炊き込む風習があった。現代も趣味趣向で香水を使用する人はいるが、当時ではエチケットに近かったかもしれない。

好きな人と一緒に夜を共にすると言うのに、“髪が臭い！脇が臭い！臭すぎて耐えられない、帰ります！！”ではムードもへったくれもないではないか。

余談であるが、貴族は自分でこの香をブレンドする。つまり、一人一人オリジナル品なのだ。同じ香りの香を使う人はいないので、香で人を識別できたとかできないとか。

「こちらでございます」

藤乃は客間の戸を開き、小次郎を案内する。

「ご苦労だった。下がってくれ」

小次郎は入り口でそう女官達に伝え、女官達は同時に一礼する。下がるうとした女官達の中で、その場を動かない者がいた。藤乃だ。

「相馬様」

部屋へ入ろうとしていた小次郎は呼び止められ、足を止める。

「……早々にお帰りになられた方が良くかと存じます」

その内容に、小次郎は正直驚いた。どういう意味だというよりも、その女官の意図がわからなかった。

（見方が敵か）

瞬時に小次郎の心が身構える。もちろん表情には何一つ出さないままに。

「それはどういう意味だ？」

“そのまま”にございます」

つまり、命が危ないと。

しかしそのようなことは、小次郎にはとうに分かっていた。今更

言われるまでもない。

だが、何かが小次郎の中で引つかかった。

「……良尚様を巻き込まないでくださいまし。あの方は純粋なお方。白いままお育ちになられた方です。どうかお帰り下さい」

力強い言葉だった。

（しかし、そのままでいいられないことも分かっているように）

藤乃大切に思う良尚とて、嫡子である以上、この腹黒い権力闘争の中にどっぴりつかって、もがき苦しみながらも生きながらえなくてはならないのだ。

彼の父がそうであるように。

祖父がそうであるように。

小次郎自身がそうであるように。

（そうか……）

だから自分は良尚が気になるのだ。あまりにも白く眩しい良尚が。

自分も、そうであったのに。

いつの間にか、真っ黒に染まって……夜の闇とも見分けがつかぬほどに……。

（いつそ）

小次郎の瞳に怪しげな光がとる。

（黒く染めてやろうか……）

戻れぬほどに、真っ黒に。

触れたモノまでも、黒く染めてしまうほど……深い深い闇に……。

いっそ、この手で
。

まるで脱獄でもするように、慌てて屋敷を後にした男たちがいた。
良尚と小次郎である。

良尚は小次郎など見向きもせずに、一心に馬を走らせている。そんな良尚に小次郎はしばらく黙って従った。

（こいつ、ちゃんと考えてるんだろうか）

どう見ても、小次郎には闇雲に走っているようにしか感じられない。
い。

盗賊の討伐隊の行き先は掴んでいるのだろうか。

（適当につっぱしってるだけじゃないのか？）

小次郎は、舌打ちして前方の良尚に声をかける。

「おい、行き先に当てはあるのか!？」

しかし、小次郎の声はむなしく置き去りにされた。良尚は返事どころか振り返ることすらしない。

（愚行か……それとも？）

良尚と小次郎が離れたのは、ごくわずかな時間。その間に賊のアジトに繋がる情報を手に入れたのだとしたら、かなりの手腕と認めざるを得ない。

（どっちだ）

小次郎は黙って良尚の小さな背中に視線を送り続けた。

しかし、小次郎は結局判断する機を逸した。前方から良尚の弟と鷹雄が率いる屋敷の私兵が現れたからだ。

ずっと馬を飛ばしてきたので、さすがに小次郎も息が乱れていたが、それどころではない。眉を細めて事の次第を見守る。

（闇雲に走ってたわけじゃなかったのか……？）

良尚は肩で息をしながら、弟と鷹雄から報告を受けていた。その内容は小次郎の耳までは届かなかったが、良尚の表情から、満足のいく結果ではなかったと簡単に推測できる。

後で小次郎の得た情報によると、賊にはうまく撒かれてしまい、連れ去られた女子供の消息もまったくつかめなかったようだ。

一心不乱に駆けて来た往路とは違い、帰路はまるで魂が抜けたような良尚の姿に、小次郎はまったく目が離せなかった。肩を落とし、今にも落馬しそうなほどに意気消沈している。

（まったく、わけが分からないやつだ）

てつきり、感情にまかせて無策なままに盗賊退治にでかけたのか
と黙っていた。

村人たちを取り返すことも出来ず、すぐごと引き返すことにな
っても、思いのほか動じずに屋敷へ引き返す指示を下していた。

（泣き叫ぶか、怒鳴り散らすかとおもったんだがなあ）

小次郎は斜め前方の良尚の顔をちらちらと伺う。

納得はしていないのだろう。村人を助けられなかったことを。

もっと色々な場所を搜索したい、もっと兵を増やして。

もっと、もっと。

しかし、ここで搜索を打ち切ることを選んだ。父の良兼の貴重な
私兵を長期にわたって独占するわけにはいかない。特に、今、得
体の知れない男　小次郎が屋敷にいる、このような時期に。そう考
えたのかもしれない。

（あの男、鷹雄の入れ知恵かもしれないがな）

小次郎は良尚に併走する鷹雄を盗み見た。

全力で良尚の身を案じているようにしか見えないが、小次郎の拳
動の一部始終にも気を張っているに違いない。その鉄仮面のような
表情の下で何を思っているのだろう。

考えるまでも無い。主人良尚のことだけだ。何が良尚にとって最善であるか。

それが、たとえ主人の意に反することであつたとしても、先を見越して主人に最善の結果を用意する。

（そういう男であつてほしい。それでこそ口説く価値があるってものだ　買いかぶり過ぎか？）

小次郎からくすりと笑い声が漏れた。

「相馬殿」

前方から鷹雄の声がすぐさま飛んできた。小次郎はますます口元が緩むのを抑えることができない。

（理想通りの反応で嬉しい限りつてもんだ）

小次郎は胸の高揚を押し殺して、返事をする。

「呼んだか？」

「良尚様は村に寄って行かれるとのことですので、相馬殿はどうぞこのまま屋敷へ」

「……俺も同行しよう」

小次郎の返事に、鷹雄は馬を小次郎の横へ移動させた。

「遺体のごろつく村へ客人をご案内するわけには参りません。どうぞこのまま屋敷へ」

「いや。気遣いは無用。何も知らないわけじゃないからな。むしろお前さんより当事者だ。俺も行く」

「……………」

二人は数秒無言で見つめあった。お互いに思惑を探るような視線が交差する。

「……承知しました」

鷹雄は無表情のままにいい置き、再び良尚の隣へ馬を移動させた。

こうして、小次郎は良尚たちに同行し、惨劇の舞台となった村へ再び足を踏み入れた。

村へついた途端、良尚は再び息を吹き返したようにくると動き回った。生き残った村人一人ひとりに声をかけてまわり、元気付けるように笑いかける。その微笑に人々は、春の雪解けのように、柔らかな表情へかわっていく。

小次郎はなんと信じがたいものを見ている気分になった。ついに、良尚が眠り続ける子供を抱きかかえて村を後にするまで、小次郎は少し離れた所から、ただただ良尚を目で追った。追わずにいられなかった。

（笑ったり、泣いたり、忙しいやつだ）

小次郎は、自分でも気がつかないうちに、頬が緩んでいたのだった。

3 紅

3 紅

姫の部屋は屋敷の西側にあるが、南向きで非常に日当たりがいい。

部屋と外界を隔てるいまいましい戸という戸をすべて開け広げると、広々とした庭が一望できた。最初に目に飛び込んでくるのは、緑から朱や黄のドレスにお色直しをしつつある楓や銀杏。

重力に身を任せ、ヒラヒラと最後のダンスを競い合っている。

その木々の足下には鯉が優雅に水音を重ね、大きな池に波紋を描く。

池を挟んで反対側には、梅、桃、そして桜の木たちが、お互いにお互いを引き立てるように立ち並んでいた。

どちらも冬仕度にかかるという頃合いにも見える。

つい今しがたまでバタバタとしていた姫の部屋も平安が訪れたと思えば、部屋に姿を現した藤乃が嵐を運んできた様子。

藤乃は軽く一礼すると真っ直ぐに姫の前へと進み出て、言い放った。

「父上様がこちらへ参られます」

その言葉に、姫は息をのむ。

藤乃は姫の返事を待たずに、館の主を部屋へ迎え入れる準備を始めるように部下たちに指示をだす。

指示をうけた女官たちは、大急ぎで姫の乱れた衣服を着替えさせ、髪を整え始める。部屋も、普段は用をなしてない几帳が並べられ、花の生けられた花瓶がどこからか運び込まれる。

父親相手にここまで取り繕ったとしても、もうバレてると思うのだが。

姫は、あつという間に様変わりしていく部屋と自分の姿に毎度ながら呆れた。

そんな様子を藤乃の鋭い目が見守る。姫に異を唱えさせるものか。その目が口よりもはつきり物を言っているように姫には感じた。

「ち、父上はなに用で？」

されるがままの姫は、顔をひきつらせながら藤乃に問いかけた。

また説教だろうか。それとも、先ほどの用件だろうか。

思い当たることが多すぎて、かえってわからない。

（今くるなんて……間が悪く目を覚ましたりしないといいけど……）

姫は襖で仕切られた隣の部屋をチラリと盗み見る。

隣の部屋を父に見られたら大変だ。

何を言われるかわからない。

その前に藤乃にバレるわけにもいかない。というのも、そこに年端もいかぬ子供が寝ているからだ。

内心どきまぎしながら姫は素知らぬ顔を決め込む。

「さあ？」

低く重い声が帰ってきて、姫は打ちのめされた気分になる。

知っているくせに、と恨めしそうに睨めば、日頃から慎みを持つて行動してください、という藤乃の反撃にあえなく敗退することとなる。

そうこうしている間に、部屋に父が姿を表した。

「尚子」

父は大股で姫のところへ歩み寄る。姫はさつと上座を譲りひれ伏した。

それとほぼ同時に父は女官たちを部屋から下がらせる。

「はい」

女官たちの着物のすれる音を聞きながら、姫は伏せたまま短く答えた。

「おまえ、あの男をどう見た」

姫はすつと顔をあげ、父を見た。どうやら説教をしに来たのではないらしい。

姫は数秒父を見つめた。父の意図は表情からは何も読みとることはできない。

「……あの男……ですか」

「将門だ。あやつをどう見る」

姫は再び思案するように数秒間をあけてから、観念したように口を開く。

「……探りに来たのでしょうか」

姫がはつきりとした口調で父に告げると、父は嬉しそうな顔をした。

口端を僅かに上げて続けて問う。

「何を探りにきたと思うのだ」

「……それは」

姫は口ごもった。

「よい。申してみよ」

渋々姫は、再び口を開く。

その声にはすでに遠慮というものはなく、真っ直ぐに父を貫いた。

「……父上とこの国が手に入るか否か」
「ほう……」

父は、ふんと鼻を鳴らした。

どうやら父は想像していた以上の良い解答を姫から得たようだった。しかし、同時に悔しさもこみ上げる。もちろん、忌々しい甥っ子に対してである。

「なぜそう思う」

「父上と国香伯父上が良将叔父上の領地を我がものにせんとしていると噂で聞いたのは本当でしょう。そしてそれは事実……」

姫はそこで父の顔を伺った。父は無言で姫を見つめる。それが肯定であるのは姫にはすぐにわかる。やはり、父は将門親子の領地を取り上げようとしているのだ。

「私が将門でありましたならば……まず噂を確かめる必要もある。そして、父上や国香伯父上の下に付くべきかそれとも逆に……。しかしそれを判断すべき材料が足りない。そう考えると思います。ならばいつそ敵陣に乗り込む。手っ取り早く、噂などに惑わされず、自分の五感で判断材料を得ることができますゆえ」

姫が口を噤むと、部屋に静寂が訪れた。風で庭の木々がざわめいたように感じた。

「ふふ……ふふふ……」

父の不気味な笑い声が部屋に響きわたった。

だからこの姫が父は好きなのだ。同時に、なぜ男に生まれてこなかったとかと、悔やまれてしかたがない。

姫が男であつたなら……父の知恵も財力も、自分の持つものすべてを与えるというのに。

「尚子」

父は低い声で姫の名を呼ぶ。

「今宵、やつを部屋へ引き込め」

姫は一瞬何を言われたのか理解できなかった。

（引き込む……？）

「そして、やつが油断している間にこれで刺せ」

ゴトンと重たい音が部屋に響き渡った気がした。父の懷から放り出された短剣に姫の目が釘付けになる。

「あの手の男は、若くて美しい姫がこの屋敷におると知れば、必ずや夜這いに現れる。その時に応じたふりでもして　殺せ。よいな」

姫は父の顔を見ることができなかった。
見たくない。きつとそこには鬼がいる。
赤い血で染まった鬼が。

（私にも鬼になれというのか父上は　　）

遊女のように男を誘い、そして体を許し、安心させ、隙をみせた
時に殺す　　だまし討ちのように。

（私は……道具でしかない……父上にとってはただの女という道具）

父は自分の甥も殺せるのだ。

自分の娘がその男に好きなようにされても痛くもかゆくもないの
だ。

「なに、安心しろ。鷹男といったか　あの男を部屋に控えさせて
おけ」

姫のひきつった表情から父は心うちを読みとったのだろう。姫を安心させるように、優しくほほえみかけた。

「お前は大事な私の一人娘。婿は決まっておるからのう。お前を傷物にされてたまるか。だから安心せよ」

それは姫のよく知る、大好きな父の暖かい笑顔だった。

姫はつられて微かにほほえむ。

「承りました」

そう言つて姫が頭を下げたので、父は満足げに部屋を後にした。

姫は再び静寂に包まれた部屋で一人取り残された。出口のない闇の中に落とされた気がした。もがけばもがくほどに、苦しく息がでない、そんな闇の中に。

「ん……」

ふすまの向こうの部屋から小さな声が聞こえて、姫ははつとなつた。慌てて立ち上がり、ふすまを開ける。そして布団に横になる少年の枕元へと急いだ。どうやら、寝返りを打っただけのようで、まだ目覚める気配はない。

しかし、その無邪気な寝顔を眺めていると、なんだか心が軽くなつた。救われた気分だった。

姫は、そつと少年の頭を撫でる。その頃には、姫の顔に柔らかな笑顔が戻っていた。

「驚太」

ぼんやりとした視界の中、はつきりと頬に誰かの暖かい手のひらを感じた。

（あ……）

やっと定まった視線の先に良尚の春の日差しのような笑顔があった。

なんだか、ずいぶん怖い夢を見たような気がする。

「驚太、私がわかるか？」

良尚が自分のおでこ、驚太のおでこにこつんと当てる。ふわりといい香りがして、ほっとする。

「……」

驚太の口がパクパクと動いたがかすれて声にはならない。

（あれ？）

声がでない。なぜだろう。

ひどく体も重たい。腕を動かすのも辛いくらいだ。いったいなぜ？

どうして、良尚は心配そうに自分を覗き込んでるのだろう。

そもそも、自分は何で横になってたんだろう。

(どこどこ?)

キョロキョロとあたりを見回すもまったく検討がつかない。立派な天井、上等な布団。

記憶をどうたどっても、見覚えがなさそうだ。

「お前が心配だったから、私の屋敷へ運んだんだ。落ち着くまでここに私が一緒にいるから安心しろ」

遠くからそんな良尚の声を聞いたきがした。

まだ夢心地のままに、驚太はゆっくりと体を起こそうとした。思うように力が入らなかったが、良尚が手を貸してくれた。

柔らかな絹の着物が驚太の肩にかかる。あでやかな赤い着物だ。同時にさらさらと長い黒髪が驚太の目の前に落ちてきた。

そこでやつと驚太は気がついた。

(え? 誰!? 良尚様じゃない!)

目の前にいるのは、良尚じゃない。声も顔もたしかに良尚なのに。

驚いた驚太は、思わずその人を押しのけて立ち上がった。

「驚太?」

不思議そうに見上げる視線に脅えながら驚太はか細い声を押し出す。

「だ、誰？」

言われた方はきょとんと目を丸くしている。

（この人、良尚様にそっくり……でも、どう見ても……）

鷺太はじつとその人の返事を待った。鷺太には分からないが、その人は、小袖こそでといわれる白い着物に紅の打袴うちばかまといういわば下着の上に、単ひとえ、五衣いつつきぬ、小袷こうちぎという着物を7枚も重ねて羽織っている。

わかりやすく言えば、十二単がフォーマルドレスなら、この女性の装いは高級ブランドのワンピースといったところだろうか。いわゆる貴族の女性の略装であった。

華やかな色の着物は、その人の紅の白くすけるような肌によく栄える。ほんのりピンクに色づく頬と小さな唇はふっくらとしていて柔らかそうだ。絹糸のように艶のある黒髪は、肩で緩やかに波打っている。

（綺麗……）

鷺太は胸がどきどきした。顔が沸騰するんじゃないかと思うくらいに、かーっと熱くなってきた。

が、そんな鷺太の緊張は、一瞬で吹き飛ばされる。

「ぶぶっ」

目の前のお姫様は、それはもう豪快に噴出し、腹を抱えて大声で笑い出したのだ。今度は鷺太が目点を点にする番だった。

そんな驚太の様子がますます可笑しくてしょうがないようで、しまいには目に涙をいっばいにためて、ひーひー言い出した。

「あ……あの」

気品あふれる外見とは、まるで不釣り合いなその挙動に、驚太の脳内は許容範囲をあっという間に飛び越えていた。

「ああ、ごめん。私だよ驚太」

「……え？」

「村のみんなには秘密だぞ」

驚太は、愕然としながら、目の前でいたずらっこのように微笑むその人をまじまじと見つ返した。

（ま、まさか……本当に良尚様！？）

驚太は驚きのあまり、へなへなとその場に座り込んでしまった。

「驚太？」

少し心配そうにその人が驚太をのぞき込む。と、驚太の膝の上に生温かい温もりを感じた。驚太はぎよっとして自分の膝の上に視線を送る。二つのドングリ眼に捕らえられ息を呑む。

「！」

驚太の膝の上には、両手の平に乗りそうなほど、まだ小さな白猫がこちらを見上げていた。そんな驚太の様子に、その人は軽やかに笑った。

「私には拾い癖があるみたいだ。屋敷の前で野垂れ死にしそうだったから部屋へ連れ帰ったんだよ。……お前が気に入ったらいい。雪白だ。この部屋に関しては、雪白のほうが先輩だからな、仲良くしてやってくれよ?」

くすくすと笑うその人の言葉を、すんなり受け入れる事ができなくて、鷺太は僅かに首を傾げた。

「ここは私の部屋だ。鷺太が落ち着くまで、ここに居ていいからな」

「良尚様の……?」

「尚子^{たかこ}。この姿では尚子だよ。よろしくな、鷺太」

4 星たちの宴（1）

4 星たちの宴

渡り廊下に座り、ぷらぷらと足を動かしている鷺太の見つめる空には、だいぶ太った月がぼんやりとあたりを照らしている。池にうつった月が風で出来た波紋にキラキラと反射する。美しく切りそろえられた木々も、鷺太のもちあわせるどんな言葉をつかっても足りないほど、すばらしいものである。

でも、全部が全部、屋敷の垣に閉じ込められている。

美しい。

素晴らしい。

でも、物悲しい。

（みんなニセモノみたい）

鷺太には、なぜかその、池の中で輝く月が良尚であるように思えた。

（まるで月が池に閉じ込められてるみたいだ）

良尚はずっとこの屋敷で、庭の向こうにあるものが見たかったんだ。

姫としてずっと屋敷の中で閉じ込められていたんだ。

鷺太は、良尚の寂しげな表情と一緒に、あの時の言葉を思い返し

た。

『鷺太。おまえは風に乗ってどこまでも遠くへ飛んで行くんだ』

青く高い空を飛んで、どこまでもどこまでも遠くへ。

自由に。

（本当は、鳥になりたいのは 自由に飛んで行きたいのは良尚様の方なんだ……）

鷺太は、胸をぎゅっと掴まれたように、苦しくなった。

（こんな広いお屋敷で、美味しいものをお腹いっぱい食べて、綺麗な着物をきて、働らかなくてもいいのに。お父様もお母様もいて、何だってここにはあるのに。でも良尚様が本当に欲しいものは、ここには無いんだ）

鷺太はすっかり仲良くなった白猫の雪白を眺めた。雪白は鷺太の膝の上で丸くなってすやすやと居眠りをしている。

鷺太はそつと雪白の背中を撫でてやった。

すると、その時、突風が巻き起こる。一瞬で、木々がざわめき、水面から月が消えた。先ほどまで聞こえていた虫たちの合唱が、草の葉音でかき消される。

鷺太がビクリと体を震わせるのと同時に、雪白が飛び起きて庭の方へ走り去ってしまう。

「あつ」

鷺太がちいさく声を上げた時には、庭はまるで何事も無かったかのように、すまし顔をした。

「ゆきしろ、待って！」

鷺太は慌てて子猫の後を追ったが、猫は足音も立てずに、すすつと大きな桜の木の枝によじ登ってしまった。

鷺太は呆然と、子猫を見上げた。いくら手を伸ばしたところで子猫のいる枝には手が届きそうも無い。

「降りてきてよ！ そろそろ部屋へ戻らないと良尚……じゃなかった尚姫様たかひめが心配するよ！」

人に見つかるわけにはいかないので、つい小声になる。だが、猫に言葉が通じるわけもなく、子猫は悠然と鷺太を見下ろしているだけだった。

「雪白！」

鷺太は枝の下で手を広げて、子猫を待つしかなかった。

何もない客室にごろりと横になっていた時、部屋の向こうから女官の声がした。

「相馬様」

「ん？」

空返事をしながらも天井を見続ける小次郎は、心ここにあらずと
いったところか。

「ご用意が整いましたので、ご案内します」

そうだった。夕方、屋敷の主人から小次郎との再会を祝して宴を
催したいという申し出があったのだ。その後の良尚たちとのドタバ
タですっかり忘れていた。

（面倒だなあ……）

この屋敷の誰もが、自分を歓迎していないというのに、何でそんな
茶番に付き合わされねばならないのだろうか。

どう考えても何か企んでいるに違いない。わかりやすすぎて逆に
恐ろしい。裏の裏を読んでしまいそうだ。

「あの……」

難しげな顔で天井を見つめている小次郎から返事がないので、部
屋の外から困惑した声が届いた。

「ああ、すまん。案内してくれ」

小次郎は渋々立ち上がり部屋を出た。小さなため息も漏れるとい

うものだ。

「こちらでございます」

灯りで小次郎の足下を照らしながら、女官の小萩が先頭に行く。少し肌寒くなった夜風が小次郎の頬を撫でていった。

するとその時だった。

庭の方から、驚くほどの強風が小次郎達を襲う。女官の持っていた灯りは一瞬にして吹き消され、あたりに暗闇が訪れた。誘われるように小次郎は庭を見る。

目が暗闇に慣れるまでは、半月はとうに過ぎた太めの月が唯一の光源だった。だが、なぜかはつきりと小次郎の目に映し出されたものがあつた。

（なんだあれは？）

ぼーっと白く輝くものが、庭の闇の中に浮いているように見える。目をこらしてみてもよく分らない。

「今灯りを！ 少々お待ち下さい」

女官が慌ててその場を立ち去るも、全く小次郎は聞いてない。引き寄せられるように、その淡い白光に歩み寄っていった。

「雪白！」

その白いモノしか見ていなかった小次郎は、思わぬ方向から押し

殺したような声が聞こえて心底驚いた。

（人が居たのか！）

ずいぶん目も慣れてきたのだろう。やっと周りが把握できる。

どうやら、白い光は、木の枝の上にいる白猫で、その木の下で子供が猫に降りてくるように両手を広げているといったところだ。

「お前の猫か？」

小次郎が背後から声をかけると、子供はぎょつとしたように小次郎を振り返った。顔はよく見えない。しかし、聞き覚えのある声のような気がする。

「だ、誰！？」

「屋敷の客人だ」

「ご無礼を」

子供は慌てて地面にはいつくばって、ひれ伏した。

「いい。気にするな。それより……」

小次郎は自分の身長よりすこし高い位置にいる子猫に手を伸ばした。

「ほら、自分で降りたくとも降りられなかったんだらうよ。まだ子供だからな」

小次郎は猫を抱き寄せ、頭を撫でる。
なんだか懐かしい気持ちになった。

こんな小さな命を、愛でる気持ちが自分にもかつてあった。あの猫の名前はなんと言っただろう。拾った猫を屋敷に持ち帰り、父に怒られた。あれはいくつのことだっただろう。

小次郎は、ふっと笑みをこぼした。

「かわいがってやれ」

子供に猫を手渡した時、遠くから声がした。

「驚太？」

どうやら屋敷の西側の部屋からようだ。人影が見える。

（女？）

暗闇で輪郭しか見えないが、声や背格好から、若い女性の様だった。声は高く、透き通っていて心地よい。女官だろうか。

「はいっ！　ここにいます！」

子供は、慌てて小次郎に会釈をし、足早に声の方へ向かう。しばらくして、二人の会話が小さく聞こえてきた。

「どこへ行つたのかと心配したぞ」

「すみません。雪白が庭に逃げてしまつて……」

「ほら、体が冷えてるじゃないか。そんな薄着でいるからだ。こつちへおいで」

小次郎は、何となくその女性の声にも聞き覚えがあった。はて誰だっただろう。小次郎は腕を組んで、ううんと考え出して

しまった。

（までよ？　今、あの女、鷺太と言ってなかったか？）

確か、あの子供の名前もそんな名前だったような気がする。あの“燃えていた”子供だ。良尚がそう呼んでいた気がする。

（そもそも、どこかで聞いた声だと思ったが、良尚の声に似ているんだ！　でも……女だったなあ………どういう事だ？）

うーん、とますます唸り声が深くなっていく。

「小次郎様？どこにおられますか？」

廊下から慌てた女官の声が聞こえてきて、小次郎も庭をあとにすることにした。しかし、その間もずっと考えこんでいた。そして、一つの結論を導き出した。

「おい」

「何か」

「あそこはどなたの部屋だ？」

小次郎は、廊下から見える西の部屋を指さした。

「一姫様のお部屋でございます」

「……良尚の姉妹か。さぞ美人だろうなあ………」

小次郎はぼそりと呟いた。

あれだけそっくりな声ならば、容姿も良尚に似て整っているに違いない。

「今何かおっしゃいました？」

「……いや、先を急ごう」

小次郎はなんだかふわふわした気分だった。あの女性の声が耳について離れないし。これから、宴という戦場に赴こうとしているというのに、気分が高揚していた。

実に、彼の演技は非の打ち所がなかった。

「さあ、飲め飲め」

そう酒を勧めてくる伯父の笑顔とて完璧だ。

演じている本人たち以外の誰が見ても、それは久しぶりの再開を祝う伯父と甥の喜びに満ちた宴の席であった。

小次郎は、にこやかに伯父の酒を受けた。とくとくと、無色透明な液体が朱色杯に注がれると、まるで鮮血にみえてくる。

いや、事実そうかもしれない。自分たちは笑いながら人の流す血を酌み交わしているのだ。

「伯父上もどうぞ。伯父上は酒にお強い。私はもうだいたい酔っぱら

つてしまいましたよ」

小次郎は赤い顔で伯父の良兼の杯に酒を注ぐ。
実は小次郎は顔は赤くとも、まだまだ正気であった。敵陣で正体を無くすほど愚かではないし、そんな好機を伯父にくれてやるほど、人間ができてない。それに、この宴会に長居できるほど物好きでもないし。こんな宴は茶番以外のなにものでもない。

小次郎は、伯父をたてる甥を演じながら、常に四方八方を警戒して神経をすり減らしていたので、すでに限界だった。酔ったふりをして、さっさとこの場から出よう。そう、腹に決めた時だった。

「ところで、殿、尚姫様の縁談がまとまったとか。おめでとうございまする」

伯父の側近が、おもむろに立ち上がり、伯父の前に座り直した。そして、軽く一礼すると、「ささ、一献」と、とっくりを伯父に差し出した。水音をたてて、朱色の杯を酒が満たしていく。

「うむ。そうなのだ。これで、わしも肩の荷がおりた」

嬉しそうに、伯父は破顔した。

（尚姫……先ほどの姫か……）

良尚の妹姫であろうから、まだ年若い姫なのだろう。さぞ、はかなくもかわいらしい姫なのだろう。

と、そこで気がつく。そういえば、この宴の席に良尚の姿が見当たらない。良尚が弟と呼んでいた、公雅きんまさの姿はあるが。嫡子がここに居ないというのはどういいうわけなのだろう。

小次郎は、ずずっと、手元の杯を一気に仰いだ。

「しかし、姫様ほどの器量よしであれば、早くに手を打たねば、どこぞの悪い虫がつくかわかりませんからのう。賢明なご判断かと存じます」

家臣は、まるで自分の娘であるかのように、誇らしげに言い放った。実の父親の方だとて、まんざらではない。酒が入っているのではなおさらだ。

「まあ、相手は我が義父の息子の（たすく）殿であるし、何の申し分ない話だとて」

「そうですなあ、これで、この坂東（現在の関東地方）も安泰」

邪魔な良将が死んだのだから。

その言葉が、後に続くことは衆知。あえて言う者は、この場にはいない。

（ふん。敵対する父が死に、元々坂東にいた豪族の源護の一族を婚姻によって吸収合併してしまえば国香伯父と良兼伯父の天下、というわけだ）

小次郎は表情を変えずに杯を空にする。

（それは、おもしろくないな　実におもしろくない）

しかし、今はまだ、この良兼に刃を向けるのが得策とも思えない。まだ小次郎は、父の跡目を継いでない。自分が跡目と伯父たちに認めさせていない。　牙を向くのはそれからでも遅くないはずだ。

第一、避けられる戦ならば、しないにこしたことはない。

同族で争ううちに横から、高みの見物をしていた豪族、はたまた朝廷に全ての土地をかつさらわれてはたまらない。

だからこそ小次郎の父と二人の伯父たちは、長年冷戦状態にあったのだから。

（かといって、黙って指を啜えてみている手はないな）

ずっと小次郎の目に黒い闇が宿る。

その花　この手で手折ってくれようか　。

（なんてな、そんなことしたら、それこそ伯父上のご不興を買うだけだしなあ）

小次郎は再び、一気に杯をあおると、にこやかに伯父へ向き直った。

「今宵は、祝い酒に酔ってしまったようです。いや、面目ない」

参った参った、と頭の後ろをかくと、小次郎はよたよたと立ち上がった。

「先に休ませていただきます。伯父上はどうぞごゆっくり」

小次郎は、ははは、いや参った、と言いながら部屋を後にした。伯父たちは、その背中をじっと見送った。

その時、伯父と家臣たちがそつと目配せした意味を、小次郎が知

る由も無かった。

小次郎は、部屋まで案内するという女中を丁重に断った。夜風に当たって酔いを覚ませたい。そうは言ったが、その実、小次郎はちっとも酔ってない。

女官が見えなくなるまでは、「おお、これは月が綺麗なことで、まゝ」などと、陽気なフリを見せていたが、あたりから人の気配がなくなると、小次郎の表情からも笑顔消えた。

（さて、用は済んだし、明日にでも下総へ帰るとするか……殺される前にな）

酒で温まった体には心地よい秋の風が、再び夜空へと舞い上がる。星に誘われて、虫たちが唄いだす。

あたりを見回せば、なんと風情のある情景が広がっていることが。

よく出来ている。

色鮮やかな日の元であっても、色の無い月明かりの中であっても、どの季節であっても。美しく見えるように計算しつくされた庭。まるで、この庭がすべてを象徴しているようだった。

（あるのは本物そっくりの“まがい物”ばかり、か……）

伯父と自分の語らいも。両親、兄弟の愛情も。
自分自身ですらも……。

小次郎は見上げた夜空に向かって、息を吹く。どこかため息にも見えたが、すぐにその息は星に溶けて形を失った。

柔らかな風が、無造作に一つに結ばれた小次郎の髪を、そつとなでた。

庭の草花が、その調にあわせて、ざわめき歌いだす。

小次郎は、その歌声に包まれながら、ふわりと微笑んだ。

心の底から笑わなくなったのはいつからだっただろう。

風の匂い、空の声、星の誘惑が、自分へ届かなくなったのは……？
人の体温をぬくもりと感じなくなったのは……？

自分が自分であると感じる時間はいつから無くなったのだろう。

（俺が生き残るためにはこうするしかなかった。それがさだめ）

なんとそう自分で言い聞かせても、たりない。

自分の中の闇は増徴し、いつの間にか自分を食い尽くしてしまっ
た。

意にそぐわなくても、必要と在らば、頭を下げ、自分を落として、
許しを請う。

利用価値があれば、いくらでも友情を語り、愛を囁く。

そうだ。

いつだって、己の力で、己の意思で選び取ったものなどない。

いつでも、見えない力に操られるように、“さだめ”という名の
道を進んできた。

（ただ生き残るために）

月が照らし出した小次郎の顔は、いつの間にか、再び険しい物へ
と戻っていた。

と、その時。

かたん。

普段ならば、気にも留めない小さな物音。遠くの木戸が閉まる音だ。

自然の作り出す音の中に、紛れ込んだその不協和音に視線を向ける。小次郎の今いる場所から、庭を挟んで反対側の西の部屋に、人影が見えた。

徐々に月明かりに照らされて、浮き彫りになる輪郭。

こちらには気がついていないのだろう。夜空を見上げるその姿は、今まさに空から降り立った星のようだ。

(!)

考えるより先に体が動いていた。

まるで駆り立てられるように闇の中を進む足音は、秋風に消える。

この手につかみたい。

この星が再び、西の部屋に閉じこもる前に。
手に入りたい。

人の形をした星が静かに再び戸の中に姿を消そうとしている。まるで時がそこだけゆっくりと流れているかのように、小次郎には見ええた。

戸が完全に閉まる直前。

「っ！」

小次郎の手が戸をこじ開けたのだ。

姫の声にならない悲鳴が発せられたが、それも風が消した。

秋の風にまぎれて、飛び込んだ黒い影が姫の細い腕を掴む。そして、強い力で引き寄せ、背後から抱き込むように、その小さな口を手でふさぐ。

かたん。

再び木戸が音を立てる。二人の姿を飲み込んだ音を。

いや、それは後戻りできない二人の運命が回りだした 音。

星たちの宴（２）

月明かりで慣らされた目は、暗闇ではしばらく使い物にはならない。

誰かに口元を手で押さえつけられたかと思えば、あっという間に床に押し倒された。驚きと恐怖で声もでない。体は強張り、力が入らない。

自分の体は、何者かによって、今まさに、強い力で床に押し付けられているのだ。尚子がそう認識するまで、長く時間がかかったように思える。

「……っ！」

はなせっ！ と言ったつもりだった。力いっぱい体をよじり、自分の上にのしかかる不屈き者を蹴飛ばしたつもりだった。しかし、どれも実現しない。

「静かにしろ」

尚子のすぐ耳元に、息がかかる。ぞくりと、背筋に冷たいものが走った。

（ 小次郎！ ）

声の主の顔がすぐに脳裏に浮かんだのだ。そして同時に、思い出された父の言葉。

『やつを殺せ』

尚子は、体中に先ほどとは違う緊張が走るのが分かった。

小次郎も、急に抵抗をしなくなった姫の様子に、彼女を抑え込んでいた力を緩める。

「手を離しても、叫ぶなよ」

尚子は、こくりと首を縦に動かした。ゆっくりと、尚子の口元から、小次郎の手が離れていく。自由になった口で、尚子は一つだけ深く息を吸った。少しだけほっとした。

が、今度は、違うもので口をふさがれることとなった。

「……うっ」

唇に生暖かい感触と、夜着の中に忍び込む骨ばった手の感触に、言いようも無い恐怖と嫌悪感が尚子を襲った。

「ちょっと、何をするんだ！」

尚子は慌てて顔をそらし、小次郎の手を引っ掴んで夜着の中から追い出した。

「何って……相撲が始まるとでも思うのか？」

暗くて見えないが、その声から小次郎の意地悪くにやけた顔が簡単に想像できた。

「思えるわけがない」

「だろう？　じゃ、続けようか」

再び、小次郎の手が夜着の中へと動こうとしたので、尚子は慌てて「ま、待て！」と声を上げる。

「何だよ。なかなか、野暮な姫さんだな、あんた。こういう時はな、雰囲気と勢いに流されておくもんだぞ」

「わ、私が誰だか知っているのか？」

小次郎は、ふつと鼻で笑った。なんとなく、頭に良尚のすねた顔が浮かんだからだ。明かり一つ無い部屋の中では、お互いのシルエツトしか分からない。だが、声から、口調から、実に良尚にそっくりだった。

だが、良尚ではありえない。なぜなら、すでに女性であることは、先ほど確認済みだった。確かなふくらみが胸元にある。

この分だと、顔もそっくりに違いない。もしか、双子ではあるまいな。

小次郎は勝手に妄想を繰り広げながら、頬を緩ませた。

姫には申し訳ないが、小次郎には初対面を感じないのだ。だからなのか、妙に小次郎には余裕がある。その余裕が余計に尚子を焦らせているのだが。

「夜の恋人たちに名前が必要だとは知らなかったな」

小次郎は、わざとらしく、低い心地よい声で姫の耳元で囁いた。

尚子は息と一緒に、小次郎の体温を耳に感じた。尚子の心臓が跳ね返る。たとえ、相手がああ憎たらしい小次郎だと分かっているにも。勝手に胸が詰まる。鼓動が早くなって、呼吸がうまくできない。

（か、顔が近いっ）

尚子は、慌てて「だ、誰が恋人なのだ！」と言い返し、腕をいっぱいにつけ張り小次郎の体を引き離す。しかし、つれない態度とは裏腹に、すでに眼が回るほどの血が頭に集まってきてしまっているようで、顔が熱い。声も勝手に上ずってしまった。

「姫。貴方には縁談があるそうですね。いや、相手の男が羨ましいことだ」

「……知っていないながら、このようなことをするのか……って、わっ

！ ちょ、ちょっと、どこ触ってるんだ！」

「……足？ ……こっちのが好きなのかな、姫は？」

暗闇の中、小次郎がそう言うか言わないかで、尚子の予想もしないところを、小次郎の手が這う。だから。

「うひゃいつー!」

尚子自身驚くような、なんとも色気がない声が出てしまったのだ。

「ぶっ」

その尚子のひどい叫び声に、たまらず小次郎が噴出した。まるで、可笑しくてしょうがない。

「うひゃいつて……ぶくく」

体を震わせて、くくくと笑い続ける小次郎の姿に、さすがの尚子も眉間にしわを寄せる。そんなに笑われる覚えはない。

自分の上にのしかかったままの小次郎の胸を押すと、今度は簡単に自分から剥がれた。床の上にしりもちをつく形になっても、なお笑い転げる小次郎に、尚子は逆に自分が恥ずかしいことをしたような気持ちになる。女として、だ。よかったような、良くなかったような、そんな複雑な気分、つい口を尖がらせてしまう。

（いや、でも、あのままだったら……小次郎なんかに良いようにされてたまるか！ だからこれでいいんだ、いいんだけど。でもなんか面白くない！）

小次郎は小次郎で、笑いながらどうしてもこの姫が良尚に思えて

しかたない。なんだか、違う興味が沸いてきてしまっていた。

「いや、すまん。すっかりその気がうせた」

「あっそう!」

尚子がふてくされたような声を出したので、小次郎は意地悪く問う。

「あれ、不服そうですね。ご希望とあらば、仕切りなおして頑張りますか?」

「いい! 希望してない!!」

姫の慌てた返事に、小次郎は再び、くくつと、ちいさく笑う。

「あら、残念」

尚子は思わず舌打ちした。それを聞いた小次郎は、完全に毒気を抜かれた気分になった。

「まったく、おまえたち兄妹は……」

小次郎はそう言つて、ごろりと床に大の字になった。

「え? 兄妹……?」

「良尚とそなたのことだ」

暗闇の中では分らないが、おそらく自分の顔を覗き込んでいるのだろう姫に、小次郎は笑いかけた。勿論、その小次郎の表情も姫には見えていないのは分かっている。

それでいい。自分のことは知らないままで。

この娘は自分とは別の世界に生きているのだ。白く清らかな世界だ。正しいものを正しいと言える。好きなものを好きだと。嫌なもの嫌だと。そう言える世界に。

この娘を自分たちのいる世界に引きずり込んでやろうと思った。利用してやろうと。

なのに。

「……兄……を知っているのか？」

「知っているとも。無鉄砲で無謀で向こう見ずな、阿呆な男だろう？」

「全部似たような意味じゃないか！」

「でも」

小次郎は言葉を置いた。

「でも……？」

姫が当然食いついてくる。その素直な反応が心地よい。

「面白い男だ。見ていて飽きない」

思わず目で追ってしまふ。どこか危なっかしくて、放っておけない。

なぜ、あんなに村の者たちのために必死になれるのか。

なぜ、あんなに楽しそうに笑うのか。

なぜ、あんなに泣けるのか。他人のために。

そんな良尚のために、思わず周囲は手を貸したくなるのだろう。助けてといわれなくても、その前に手を差し伸べたくなるのだろう。もつと良尚の喜ぶ顔が見たいから。もう二度と、良尚の泣き顔を見たく無いから。

だから良尚の周りに人は集まる。良尚の周りで人は動く。良尚のために。

人は良尚に魅せられる　自分のように。

「それ、誉めているのか？」

つまらなさそうな姫の声に、小次郎はふっと笑った。

「誉めているさ。最高の誉め言葉だ、俺の」

「……そなたに誉められても嬉しくはない……と、思うぞ兄は」
「そうだろうな」

小次郎は気持ちよくからからと笑った。そして、寝転がりながら、ごろりと体の右半分を起こして、姫の方へ向き直った。姫のシルエツトに小次郎には良尚の表情が重なる。そして自分でも驚くべきことを口にした。

「そなた、俺のところに嫁にくるか？」

「へ？」

「……俺、今すごいこと言ったな。いやーうん、すごいこと言うてるぞ？」

「……じ、自分で言って自分で感心するやつがいるかつ！」

「たぶん、今まで生きてきた中で、一番、頭を使わずに言った言葉だな、今のは」

小次郎は、さも、ひとごとのように、けらけら笑いながら再び、体を転がして大の字になった。

そうかもしれない。

考えてない。

感じたのだ。感じるままに出た言葉なのだ。
自分の側にいて欲しい、と。

「あははははは」

小次郎は声を上げて笑った。

「なっ、なんなんだよ、さっきから！」

「いや、すまん。なんだか、可笑しくてな」

「可笑い？」

「ああ、そなたのことじゃないぞ。俺が、さ」

「何が、だ？」

姫のシルエットの頭が少し左に傾いた。首をかしげたのだろう。

「俺にもまだ、『俺』があっただってことさ」

「……………どういう意味だ。さっぱりわからない」

小次郎はもう何も言わなかった。尚子もそれ以上聞かなかった。

「ところで、そなたは、良尚に声がそっくりだな！」

「……………双子なんだ！ 見た目もよく似ていて間違えられる」

「なるほどな。しかし、男と女の双子でも、姿かたちが同じになるのか？」

「……………お、同じなのだから仕方が無い」

「それもそうだな」

小次郎が、あっさり納得したようなので、尚子はこっそり胸をなでおろした。暗闇でよかったと、初めて思った瞬間だった。

「おい」

小次郎は、天井を見上げながらしつかりとした声で言った。

「嫁に来い」

その返事がどうかなんてどうでもいい。

それが実現するかどうかなんて今は考えたくない。

欲しいものは欲しい。

それを言える自由が、今は何よりも。

そんな場所を見つけたことが、今は何よりも 嬉しい。

小次郎は小次郎であるために必要なものを見つけた。

「俺の妻になれ」

はたと気がつくと、あたりは薄ら明るくなってきた。
あれほどに愛を囁きあっていた虫たちの唄はなりを潜め、煌々と
きらめいていた星たちも早々に自宅へと引き返したようだ。

月すら、白く白く、朝焼けに溶け込もうとしていた。
もう夜があける。

夜の住人たちは、その香りすら残すことは許されない。
夢とははかなく。

日の光から逃れた世界を生きる。

明るく照らされてしまうと、見たくないものが見えるから。
魅せられたくないものを魅せるから。

白黒の世界だからこそ美しい。
はかないと知っているから、魅せられる。

小次郎は無言で立ち上がった。姫は何も言わなかった。目が慣れ
たとは言え、彼女のその表情までは分からない。
しかし、すでに小次郎は彼女の気持ちの空気が通して伝わって
くるようだった。

「そんなにがっかりするな」
「がっかりなどしていない。早く出て行け」
「そんなに、寂しそうな声をだされると、帰りづらいじゃないか」

小次郎はからかうように、からからと笑いながら言うと、慌てて

強がる声が返ってきた。

「だ、誰が寂しいものか！」

それにしても、驚いた。

ただ、話しをしていた。女と共に一晩明かしたというのに。
触れることもなく、何時間も。

ただ、ひたたすらに夢中で、話しをしていた。

他愛のない話ばかりを取りとめもなく。

自分の子供の頃の話や、父の話、虫や鳥を追いかけたころの話や、
初めて海を見た時の話。

姫はその話の一つ一つに、興味をもったようだった。

例えば、海一つとつても

海とは何だ。なぜしょっぱいの
だ。誰が塩をいれたのだ。波とはなんだ。と、次から次へと質問が
沸いてくる様子だった。

全身で『知りたい、見たい』と伝えてくる。

表情がわからなくとも、こんなにはつきりと気持ちを伝えられた
ことはない。

言葉ではない。口ではいくらでも嘘が言える。ごまかせる。隠
すことができる。

しかし、この暗闇の中、全身で心を伝えてくる姫のどこにその嘘
があるのか。

人はこんなにも、体中で気持ちを表現することができるのか。

小次郎は、いつのまにか、彼女の小さな反応すらも、一つも逃さ
ないようにしていた。小さな驚きの声も、かすかな喜びの吐息も。

（もつと……）

小次郎はそつと手を伸ばした。触れた姫の頬から伝わる体温。ビクリと彼女に緊張が走る。

（もつと話をしたい）

この鳥籠の中から連れ出して、外の世界を見せてやりたい。
空の青さを。

海の広さを。

山も声を。

自分のこの手で　　。

「……」

ゆつくりと二人の影は重なった。触れる姫の柔らかな唇から、暖かな気持ち小次郎の体の中へと流れてきたようなきがした。
そつと唇を離すと、小次郎は思わず問う。

「……今のは姫の唇か？」

「！？」

あまりの無粋な質問に姫は返す言葉を失っているようだった。

「いや、なんというか……女の唇はこんなに柔らかかった……かなと……俺は何を言ってるんだ？」

急に照れくさくなって、小次郎は頭の後ろをぼりぼりとかいた。

そして、逃げるように部屋を出ようと入り口へ大股で歩み寄った。

「帰れ！」

木戸を押し開けようとしていた小次郎の手が止まる。

「……もう帰ったほうがいい」

「だから今帰るところじゃないか」

小次郎は、一瞬姫が自分を引き止めてくれたのかと喜んでしまった自分を隠すように笑う。しかし、姫の声はかすれていた。何かに脅えるように震えているようにも聞こえる。

「もうここに居たらいけない」

「……」

小次郎はまっすぐにその気持ちを受け取った気がした。

姫の父親が自分を殺そうとしている。そう自分に言いたいのだろう。しかし、姫にとってそれは実父を裏切る行為。

“ここにいたら殺される。早く逃げて”

口からでなくても、伝わる声がある。

小次郎は自然に口元が緩み、声が優しくなってしまう。

「また、来る」

「来るな！」

「来るよ」

「……来ても無駄だ。会わない。だから来るな。帰れ」

「言っただろう？ 嫁に來いって」

「冗談を言ってる場合じゃない！」

姫は小次郎に背を向けた。絹ずれの音が部屋を裂くように響いた。

小次郎も姫に背を向け、木戸を開けた。

「俺がここから出してやる」

カタン。

木戸の音は夢の終わりを継げた。

すべてを見せる前に。

すべてを魅せた後に。

1 目覚め（1）

1 目覚め

その日の目覚めは、非日常的なものだった。

一瞬にして、期待が眠気を吹き飛ばす。騒がしさが、昨夜、客人にあてがった方角から運ばれてきているのが分かった、ますます良兼の頭に血がめぐる。

娘がヤツを殺したのだ。

間違いない。

それで屋敷が朝から騒然としているのだ。

「……ふふ……ふはははは」

良兼は、もはや笑みを抑えることができないでいた。勢いよく立ち上がり、夜着のまま寢室の木戸を押し開けた。

目を細めたのは、朝日のまぶしさからだけではなかったに違いない。

が。

良兼は庭の先に、無いはずの光景を見る。息をするのを忘れるほどに、意表をつかれ目を見張った。

まだ夢をみているのか。

一度、高揚した感情が一気に凍りつく音が聞こえた気がした。そ

う、何度自分はこの感情を味わえばよいのだ。

「伯父上、お早いですな」

少し離れたところから甥がこちらに挨拶をした。そして、再び馬屋番の男となにやら話はじめた。

若い娘が頼染めるようなさわやかな青年も、彼にとっては憎悪の対象でしかない。それもこれも、忌々しい実弟のせいであり、この青年には関係の無いことだと分かっている。

煮えたぎるような怒り。後から後から沸きあがるような、この憎しみを押さえることはできない。

良兼はそのまま、ものすごい形相で部屋を後にした。

数分後、屋敷の西側があただしくなる。

女官が悲鳴のように「殿！ お待ちください！」とわめくのが聞こえてきたかと思うと、すぐさま別の藤乃が尚子の部屋へと走りこんでくる。

「姫様、起きてください！ 殿が！！」

言い終わるが早いか、床にひれ伏し、顔をあげる。そして、藤乃は部屋の様子に啞然とすることとなった。

尚子はすでに、身なりを整え、鎮座していた。普段は考えられないことに、扇までもが彼女の手におさまっている。いつもなら藤乃が、取り繕うように持たせるものを。

何かがおかしい。

藤乃は尚子を訝しげに見上げた。お具合でも悪いのだろうか。このような尚子の様子は初めて見る。

凜とした表情からは、普段の無邪気でじゃじゃ馬で無鉄砲な姿は微塵にも感じない。どこから見ても、高貴な姫だった。はかなささえ感じられる。

「尚子」

見とれていた藤乃は、良兼の気配にすら気付かなかった。慌てて隣を通りすぎる屋敷の最高権力者にひれ伏す。その声から、ただならぬものを感じた。

間違いない、何かがあつたのだ。

尚子自身に。そして、これほどに良兼が感情を抑えられぬ相手将門に。

藤乃は一礼し、尚子の部屋の人払いを命じる。自らも退室するとき、尚子にちらりと視線を送るも、その姿はまるで……。

（姫様……）

まるで、尚子の実母、華姫のようではないか。

まだ幼い尚子のために、強くあろうとした。病弱な体で優しい心を鬼にして。たった一つの大切なものを守るために、多くのものを捨てた。そんな覚悟した女の姿のようではないか。

カタン。

藤乃の目の前で、木戸が閉ざされた。

木戸の無機質な音に藤乃の胸は張り裂けそうになった。同時に、言い様のない寂しさに襲われる。

（もう、私の姫様はどこにもいないのだわ……）

守るものを見つけた時、女は男よりも、はるかに強い。

（大人になってしまわれた……）

嫁ぐまでは、自分の手の中にあると思っていたのに。涙がいつぱいにあふれてきた。

それは寂しさからなのか、嬉しさからなのか。

藤乃は頭上を見上げ、ぐつと唇を噛み締めた。

そうだ。そんな自分の感傷に浸っている場合ではなかった。自分の命より大切な姫が、一人で戦おうとしているのだ。

何かを守るために。

（……何を？）

一瞬、藤乃の胸がざわめきたった。その不安が、杞憂であってほしい。

（それだけは……殿はお許しにはならない……）

藤乃は胸元を押さえて、もう一度だけ、木戸にそつと触れた。そして、祈るように、何度も足をとめながら、木戸の前から遠ざかって行った。

「どういうことか、つぶさに話せ」

尚子は扇で口元を隠しながら、父と対峙していた。

「どう、とは？」

「とぼけるな！」

尚子の冷静な声が、さらに父をいらだたせていたのだが、それも計算のうちだった。

「昨夜は、私の体調がすぐれませんでしたので、早々におやすみを頂いておりました」

「ほう、馬で駆けずり回っておったのに、夜になって急にか」

まるで吐き捨てるように父は言った。

しかし、尚子の返答はさらにさらっとしたものだった。

「はい。昨夜急に腹痛で……月のものが……」

尚子は言葉を濁して扇で顔を隠した。月のもの、つまり月経である。これを言われては、父もぐうの音がでない。たとえ、口からでまかせだと分かっているても。

聞こえてきたその舌打で、父がどれほど苦々しい顔なのか簡単に想像できた。

（勝った）

尚子は内心、胸を躍らせていたが、飄々とした表情を保ちながら、再び父の様子をうかがうように扇をわずかに下げると、父の夜叉のような目に心臓を射られたように感じた。背筋が一瞬で凍りつく。

怖い。

心を見透かされそうだ。

怖い。怖い。怖い。

こんなの父ではない。

ごくりと喉が小さく鳴る。

尚子は数秒目を閉じ、そして、しっかりと父を見据えた。目をそらしたほうが喰われる。そんな緊張感が、部屋を覆いつくした。

「何をたくらんでおる」

最初に口を開いたのは父の方だった。

「何をたくらむというのです？」

「分からないから聞いている。お前はいつも、突拍子のないことばかりする。手に負えん」

「私はいつも、この国のためにと」

「この屋敷に、得体の知れぬ“妖の子どもを”引き入れることが、

か？」

思わず尚子は言葉につまった。

（な、何で知ってるの？）

「わしが知らないとも思ってたか」

尚子の表情に一瞬の隙ができ、父の顔に意地悪さが増す。

「妖などではありませぬ。ただの孤児です。聡い子なゆえ、良き家臣になりましょう。私が育て、弟たちの役にたてばと思ったまでのことです」

「ただの孤児……のう」

父の目が鋭さを増したように感じた。
どこまで知っているというのだろう。

尚子は冷や汗が背中を伝っていく感覚にとらわれた。

「まあ、よい」

「……」

「そなたが手を下さぬとも、方法ならいくらでもあるのだ。ヤツがこの屋敷におる間はのう」

父はふつと口の端を上げた。それは、いつぞや見たはんにやの顔に間違いなかった。

「……そうじゃ尚子。今日はそなたの婿殿が参られる」
「……え？」

尚子は予想だになかった展開に、目を丸くすることしかできなかった。

誰か何をしに来るって？

媚殿って誰？

そもそも、誰と誰の縁談だって？

尚子が二の句を告げないでいるのを良いことに、父は揚々と続ける。

「そなたを迎えに見えるそうじゃ。よほど待ち遠しいと見えるのう。そうじゃ、今日はこの部屋にお泊りしていただくがよい。とっとと済ませてしまえ」

（　　な……何を！？）

呆然とする尚子を尻目に、父は上機嫌で部屋から出て行こうとしていた。

（何か、い、言わなくては！）

このままでは、了承したことになってしまふ。
何か。

（言葉が出てこない……）

カタン。

一人になった部屋の中を、木戸が閉まる音が響いた。まるで、尚子の心を粉々に砕き割るように。

青い空をゆつくりと旋回する比翼の鳥が見える。
つがいだろうか。

小次郎は、何とか言いくるめて拝借した屋敷の馬にまたがったまま、その鳥たちの軌跡を目で追った。

すると、にわかには背後がにぎやかになる。振り向けば、土煙を上げこちらへ向かってくる馬が二つ。だんだんと近づくにつれ、騎乗しているのは、良尚と鷹雄だとわかる。

小次郎は、待つてましたとばかりに手を上げて合図した。

「よゝ。どこ行くんのだ？」

その声はむなしく土煙と、蹄の音にかき消された。

良尚たちは、まったく一切さっぱり全然小次郎に視線を送ることなく、通り過ぎていったのだ。小次郎も、一瞬呆気にとられ、見送ってしまった。

「……………って、無視かよっ！おい、待てっ！」

こんな扱いを受けたのは初めてだ。慌てて、後を追う。

良尚の馬が大きく嘶き、ようやく足を止めるまで、一行は一列に長く連なり走り続けた。

小次郎が、鷹雄に遅れて、良尚に追いついたのは川原近くの大きな木の下だった。良尚は幹を背に、キラキラときらめく川面を見つめていた。その傍らに、彼の馬と自分の馬を携えた鷹雄の姿がある。

小次郎は、すこし離れた高台から良尚に目をやる。そして、その横顔の美しさに、小次郎は息をのんだ。少し肩で息をし、頬はうつすらと赤らんでいる。

その姿が、ふと、昨夜この腕の中に抱いたぬくもりを呼び起こさせた。知らず知らず、胸の中がほんわりと暖かくなる。

何だ、この感覚は。

胸が　　苦しい。

彼女は双子と言っていた。

良尚と瓜二つだと言っていた。

彼女も、あのような表情で、この川面を眺めるのだろうか。どのような表情で、この青い空を見上げるのだろうか。

あの屋敷の外の世界を見ることが出来たら　　。

「良尚様……」

鷹雄の声に、はっと我に返る。

どうかしている。

（敵陣の真っ只中だというのに、ぼけっとしている場合ではない。まったく俺としたことがどうなってるんだか）

自問しても答えは出ない。代わりに出たのは嘲笑だけだった。

「良尚様……屋敷に戻りましょう」

「……」

「何かありましたか」

「何も無い」

「……殿と何かあったのですね」

「一人にしてくれ」

「……それは出来ません」

苦しそうに鷹雄が返事を返した途端に、「放っておいて！」と甲高い怒鳴り声が響いた。重たい空気とは対照的に、軽やかな水音が二人を包む。

「……お願い。すぐに戻るから」

良尚の聲がかすかに震えていたのは、離れたところで様子を窺う小次郎にも分かった。ただでさえ、か細い体で少女のように愛らしい顔つきの良尚だ。泣きそうに肩を震わせている様子を遠目でみていると、まるで。

「姫……」

小次郎は目の前の状況を理解するのに、かなり時間が必要した。

（ なっ！？ ）

鷹雄が、自分の胸に良尚を抱き寄せたのだ。そればかりか、鷹雄の口からでた言葉も聞き捨てならない。

(……今、姫つて……っ!!)

小次郎の喉がごくりと音を立てた。いつのまにか手がじとっとなつて湿っている。

なんと言うことだ。

すっかりだまされた。

ああ、だから。そうか。そう言うことか。

小次郎の中で、良尚の謎がすべて一本の線で繋がった。そして、同時にそれは小次郎の心をも、一つの決意へと導いた。

目の前が一気に開けたような感覚だった。

そうだ、怖いものなど何もない。

己自身のほかに、今、自分は失うものなど何も無い。

欲しいものを手に入れる。そう、神が言っているのだ。

自分が自分であるために。

俺には他に何も無い。お前と己の他に、失うものなど何も無いのだ。

「何をする!!」

再び、良尚の大きな声で小次郎は引き戻された。しかし、我に返ったのは小次郎だけではなかったようだ。鷹雄は珍しく慌てて、その場にひれ伏し、非礼をわびた。

「申し訳ありません！お許してください！」

「下がれ！」

「……しかし！」

「下がれ！！！」

良尚は自分の両肩を抱くようにして、鷹雄に背を向けたまま頑なに拒絶してる。鷹雄はしぶしぶという顔で、一礼し、馬にまたがった。小次郎は慌てて馬と共に木陰に隠れて、鷹雄が通り過ぎるのをやり過ごした。

「あゝあゝ。大事な姫さん、放って帰るなんて危ないじゃないか」

そんな小さな呟きも、鷹雄の耳に入るわけもなく。鷹雄の姿が小さく消えるより早く、ケモノの二つの目が、エモノをしつかりと捉えていた。

目覚め(2)

(何か手はないのか…?)

良尚は桜の木に体重を預けて、深いため息をついた。

このままでは、もうすぐ“夫”が姿を現すことになる。しかも、父のことだ、無理やりにも既成事実を作り政略結婚を成立させるつもりだろう。

父は自分の娘をよく知っている。だからこそ、逃げ場の無い袋小路に追い詰めるつもりなのだ。

女狐の弟と結婚なんて冗談ではない。

第一、まだ嫁に行く気なんてさらさらない。

(だって)

嫁いでしまったら、今のように馬にまたがり、風を感じることもできないだろう。

青空を眺め、川の唄を聴き、桜の華の舞を見ることがも。

本当に、狭い暗い部屋の中に閉じ込められてしまう。

(……考えただけでぞっとする)

なぜ自分は男に生まれてこなかったんだろう。

男であつたらならば、学問に身を投じ、武芸に励むというのに。

弟たちのように文句ばかりを言って逃げ回ったりしない。ああ…な

ぜ自分は、女で生まれてしまったのだろう。

自分は、ただ父の野心の道具として、好きでもない男に陵辱されるために生まれてきたというのか。そして、次は世継ぎを生み出す道具として扱われるのだ。

そんなことのために、自分は生きてきたというのだろうか。

再び良尚の形のよい唇から、深いため息がこぼれた。

「……海がみたいな」

ぽつりと、涙と共にこぼれ落ちた言葉は、秋風に乗って空を舞う。脳裏に浮かぶのは、昨夜の小次郎の笑い声。

『俺がここから出してやる』

急に、体が記憶をたどるように、小次郎に抱きしめられた感覚を取り戻した。今もあの力強い腕の中にいるような錯覚。

（あんな無骨な男のくせに　　）

まるで真綿で包まれるように優しく抱きしめるのだ、あの男は。いったいどれが本当の小次郎なのだろう。

「案外、幼い頃の泣き虫のままなのかもしれないな……」

良尚は、思わず笑みをこぼした。

（まったく……勝手なんだからなあ。私を嫁にするなんて言っし……酔っ払いの戯れ言にしてもタチのわるい……）

そんなことが叶うわけがない 絶対に。

「阿呆だ、アイツは」

くすりと笑う良尚の顔は、本人の無自覚に穏やかなものだった。
すると。

「何を一人でニヤけてるんだ？」

頭上から降ってきた声に、ぎょっとして振り返る。口の端を上げて、こちらを覗き込む小次郎の姿がそこにあった。良尚は一瞬にして、顔が赤くなるのが分かった。心が弾むように軽やかになり、自分が喜んでいることが否応なしに自覚させられる。

嬉しい？

何が？

小次郎にあえたことが？ そんなまさか。

自問自答の中、取り繕う声はうわずってしまった。

「な、なんでここに居る」

「……散歩？」

「こんなところまでか！？」

「まあな。これは桜か？」

小次郎は頭上の木を見上げた。良尚もつられて見上げる。

「そつだ」

川原には、この桜の木が1本だけ青い空に向かって、まっすぐ立っている。

「この桜は、母上の木なんだ」

良尚はそつと目を細めた。

「京からここへ来た時に、父上が母上に差し上げたそうだ」
「ほう……」

京を離れて寂しくないように。

父は、母の京の実家にあつた桜の木をここへ一本植え替えたのだ。父は暇をみては母をここまで連れてきていたらしい。

「屋敷の庭にも桜があるんだ。あれはこの木の枝を……」

良尚はそこで一度言葉を切る。小次郎は静かにその良尚の寂しげな横顔を見つめた。

「……母上が亡くなった時に、父が手折って植えてくれたんだ」

良尚が寂しくないようにと。

それから、庭の桜を母と思い何度眺めたことか。

川原まで来て、この桜の木に何度悩みを打ち明けたことか。

父は変わってしまった。母が愛した父はもういない。母を心から愛した父は、あの義母が現れた時に死んだのだ。

あの女が二人の仲に割り込んだ時に。

あの女が父に野心を植え込んだのだ。間違いない。

「そうか……」

それまで黙って耳を傾けていた小次郎が、不意に優しげな表情をみせた。

「この木はお前のすべてを知っているのだな。良き相談相手だったのだろう？」

笑いかける小次郎の言葉に、心臓がどくと脈打った。

「この木はお前を誇りに思っていると思うぞ」

小次郎は再び頭上の桜を見上げた。

「見てみたい。傲慢の息子を思っ咲く桜の木を。どんなに見事に咲き誇るのだろうな」

きっとその目には、鮮やかな薄紅色の花びらが舞い散るのが見えているに違いない。気がつく、良尚はその暖かな表情から目が離せなくなっていた。

再びこちらに笑いかける小次郎の瞳に吸い込まれそうだった。

胸のあたりがほんわり暖かい。

なんだろう。この感覚。

とても 心地がよい……。

「さあ、そろそろ屋敷にもどったほうがいい。また野党がでるかもしれない」

「……わかった」

「いい子だ」

小次郎は破願し、良尚の頭をなでた。

「や、やめろ。子ども扱いするな！」

「はいはい。泣きべそかいてたくせに、どの口がそんなことを言うんだか」

「……………帰る！」

良尚はぶいっと小次郎に背をむけ、軽やかに馬にまたがった。

「なあ、良尚」

「なんだ」

「俺は国へ帰る」

良尚ははっとして小次郎を見つめた。小次郎は、ふっと笑う。

「そんな寂しそうな顔をするな。帰れと言ったのはお前だろう？」

「……………そうだ。早く帰れ」

「帰るさ。一度、屋敷に戻り、叔父上に挨拶をしてから、帰るさ」

「それがいい。……………もう少ししたら、別の客人がくる。それまでに姿を消したほうがいいだろう」

「客？」

眉間にしわをよせて、小次郎は聞き返した。普段見せないようにしている小次郎の本心が、一瞬垣間見ることができたのだが、そのまたとない機会を良尚は逃す。

「常陸の……………源の嫡子、源扶殿だ」
ひたち みなものたすく

吐き捨てるように良尚が言う。

「源殿の嫡子殿がなぜ？」

「……嫁を迎えに来るのだそうだ」

瞬時に、小次郎の顔に緊張が走る。しかし、良尚は自分の負の感情を押さえ込むことで手一杯だったため、小次郎の表情まで目を配る余裕がなかった。

「……………確かに、早く退散したほうが良さそうだな」

そう言った、小次郎の口調は変わらない。表情も穏やかだ。だが、その聡明な頭の中で様々な知略が今まさに練られていた。

屋敷まで戻る間も、いくつか言葉をかわしたのだが、良尚がそれに気付くことは、ついになかった。

屋敷近くまでくると、心配そうに入り口付近をうろろろする鷹雄の姿が目に入った。

一瞬、川原での出来事が思い出され、良尚は赤面する。

「良尚さま！」

こちらに気付いた鷹雄が駆け寄ってきた。

「ご無事ですか！？ 何事ありませんでしたか！？」

明らかに、不信の目を良尚の背後にいる小次郎へとむける鷹雄。

「人聞きの悪いことを言うな。俺は何もしてない、俺はな」

皮肉を込めた笑いを浮かべた小次郎だが、すたすたと先に屋敷へと向かっていく。

良尚はその背中をおもわず目で追った。

「上等な馬を用意しといてくれ」

振り返ることなく、小次郎は鷹雄に命ずる。

そうだった、小次郎の乗ってきた馬は、村で焼け死んでしまったのだった、と良尚は一人納得した。

（本当に帰るんだ……）

良尚は、だんだんと小さくなっていく背中をじっと目で追った。

（帰っちゃうんだ……）

もう二度と会うことはないだろう。

自分はもう、常陸へ嫁ぐのだから。

望んでいたことじゃないか。

これでいいんだ。

なのにどうして　　胸がこんなに苦しいの……？

「ま、待て！」

いつの間にか、良尚は声をかけていた。

ゆつくりと足を止め、小次郎が振り返る。

「私の馬をやる」

良尚は馬を鷹雄に預けると、慌てて小次郎の後ろへ続いた。

「小柄だが、いい馬だ。餞別だ」

良尚は精一杯、笑って見せた。
これが最後。

もう 会えない……。

「そうか、ありがたく頂こう」

小次郎はふつと柔らかく笑った。

（あれ？）

良尚は目を奪われていた。

こんな笑い方は始めて見る。こんなに暖かな表情ができる男だったのか。

いつも、どこか余裕のある顔ばかり見ていたからだろうか。

（これが、本当の小次郎……？）

ぼけつと見とれている良尚の様子に、小次郎はいつもの意地の悪い表情を作った。

「なんだ、結局引き止めるのか？」

小次郎はニヤニヤと笑いながら、すつと手を伸ばしてきた。あつという間に肩を抱かれる。

そして、反射的にぞくりと鳥肌が立つような低い心地良い声が、耳元で囁かれた。

「今宵、必ず迎えに行く」

（ え？ ）

良尚の体を離し、小次郎は再び館の方へ歩き出した。何かなんだかわからないまま、良尚は立ち尽くした。いや、立っているのがやっとだった。

「そうか、帰るのか」

いかにも残念そうに伯父はそう言った。

「国の方も、父が亡くなったことで色々と混乱していることですよ

うし、長くお世話になつては申し訳ない。今回は挨拶に参つただけですので、改めてまた」

上座にいる伯父を、あくまで“伯父”として話すことは、なかなか難しい。

小次郎はしれつとした顔ではいるものの、この伯父の小さな表情の変化も逃すまいと神経を尖らせていた。

「そうだな、今度はこちらから参ろうじゃないか」

上機嫌な様子で笑う伯父。

（タヌキが。お前が俺の国へ来る時は、俺を殺す時だろうが）

「それがいい。是非にとも」

「しかし、何もお相手できなかったせめてものお詫びに、途中まで家臣に送らせよう」

小次郎は笑顔の伯父を静かに見つめた。

（送る……ねえ……まあ、そうくるだろうよ）

「盗賊がまだうろついているかもしれんぞ。断らんでくれよ。伯父として甥を心配するのは当然のことだ」

たたみ掛けるように伯父はそう言った。拒否することは許されない、と。

「かたじけない。では、その護衛の中に、鷹雄という馬番を貸していただけますかな」

「鷹雄……そんな男いたかのう」

「なにかと屋敷で世話になったもので、別れ惜しく」

二人の視線が重なった。お互いにお互いの思惑を探る。

数秒の沈黙が、まるで何時間にも感じる。

その沈黙は、伯父が崩した。

「良いだろう。ただし、家臣は誰もやらんぞ。みな、大事なわしの家臣だからのう。わははは」

陽気に笑ってみせる伯父に、小次郎は愛想よく微笑み返した。

2 覚悟（1）

2 覚悟

小次郎が、“護衛”と共に屋敷を出た直後だった。行く手から仰々しい一行が姿を現した。小次郎一行が馬一頭と7人に対し、相手は馬も人も5倍はゆうにある。すぐに、小次郎にはこれが良尚の言っていた“客”だと分かった。

小次郎の顔に緊張が走る。

だんだんと近づいてくると、その顔がはっきりと識別できた。

（源……扶……）

小次郎は無言で馬を止め、馬から下りて道を譲る。小次郎と一緒にいた男たちもそれにならって道を譲る。

多勢に無勢ではかなうまい。

父は最期まで源氏と手を取り合うことは無かった。

父が“不要”とした男の息子。

（さぞや、嫌われていることだろうよ、こいつら親子には）

小次郎は静かに頭を下げ、すぐ目の前まで来た男を懸命にたてた今日のところは、だが。

通り過ぎようとした扶の馬が止まる。

「そなた、確か。佐貫さぬきと申したか」

馬上から澄んだ声がした。

「いかにも。上総介平良兼が家臣、佐貫五郎高重さぬきごろうたかしげにございます。遠路はるばる、ようお越しになりました。殿がお待ちでございます」

小次郎についてきた伯父の家臣の一人が扶に近づき言葉を返す。

小次郎の全身の神経に、ぴりつと電気が走る。
筋肉が緊張する。

佐貫と名乗った男が、小次郎には聞こえないように扶と数語、言葉を交わす。

扶が小次郎に視線を再び戻した。

小次郎は、右足を静かに後ずさりさせた。じやりの音が大きく響いたように感じる。

ちらりと、後方へ視線を送ると、二人分はなれたところにいる鷹雄と目があった。

（敵か、それとも　　）

数秒、二人は見つめあう。

こんなことだろうとは思っていた。だから、鷹雄という男を同行させたのだ。

が、まさかこんなに多勢を相手にすることになるとは予想してなかった。

この男は、どうするだろう。

自分に味方すれば、死ぬだろうこの状況で！

しかし、鷹雄の表情からは何も読み取れない。
まったく、こんな時まで有能な男だ。

この男がいくら自分を気に入らないとしても。
この男の世界の中心は 。

（ 姫さん、信じるぞ！！ ）

小次郎は、目にも留まらぬ速さで踵を返し、道から木の生い茂る林へと走り出した。

感づかれると思っていた“護衛”たちは、一瞬呆気にと取られた後、慌てて腰の刀を抜いて後を追った。5人目の“護衛”である鷹雄も。

「お前たち、手を貸してやれ」

扶の護衛をしてきた半数以上の男たちが、命令に従い、小次郎の消えた林の中へ身を投じた。

「では、参ろうか」

扶は、佐貫に微笑みかけた。

「殿が首を長くしてお待ちですぞ」

佐貫は小次郎の乗ってきた馬に、ひらりとまたがると、屋敷へと引き返していった。

鷺太は膝の上の白猫を撫でながら、そつと視線を投げかけた。
ぱちん。

尚姫の手元の扇が閉じてはまた開き、また音を立てて閉じる。
先ほどから、ずつとあの様子だ。
ぼんやりと床の一点を見つめたまま、心が遠くにある。

（どうしたんだろう）

鷺太は小さくため息をついて、膝の上の猫に視線を落とした。

（お前、慰めにいってこいよ）

鷺太の視線を感じたのか、白猫は顔を上げた。二つの小さな瞳が
鷺太を見つめ返す。

『無理よ、私たちにはどうにもならない』

直接鷺太の心に響くように聞こえる声。

（でも、ずつとあの様子だよ。なんか心配なことがあるんだよ）

猫はあくびをしてから、ふわりとしつぽを動かした。

『あの子はあの男が心配なのよ』

（あの男？）

『あの男』

（……相馬様？）

『知らないわ、名前なんて』

（でも、相馬様はさっき帰ってしまったよ。まだその辺にいるかもしれない！）

『無駄よ』

白猫は、ずっと鷺太を見上げた。

（あの男は殺される）

『え！？』

鷺太の手がびくつとなつて、動きを止めた。

（殺されるって、誰に？）

『自分自身に』

（……全然意味が分からないよ）

鷺太は肩をすくめて見せた。そして、猫の首根つこを捕まえ自分の目の前に宙ぶらりんにする。

『ちょっと、おろしなさいよ！』

（分かるように説明しないからだ。僕を馬鹿にすると、池に放り投げるぞ）

一匹と一人は、無言でにらみ合った。

数秒の後、ふいつと白猫がそっぽを向く。

『わたしにも分からないのよ』

鷺太はきょとんとした顔をした。

（全部の未来が分かるわけじゃないの？）

『先のことは、決まっていけない。決まっているのは今やるべきことだけ』

（はぐらかさないでよ）

『あの子は、このままあの男と離れた方がいいのよ』

（どうして？ だってあんなに苦しそうな顔をしている姫様を僕は見たことがないよ）

鷺太は再び尚姫に視線を移した。

彼女から笑顔が消える日が来るなんて。

少なくとも、自分の前では、いつもお日様みたいな笑顔を曇らせることは無かったのに。

（どうしたらいい？）

鷺太は尚姫を見つめたまま心の中で呟いた。

白猫は、鷺太の手を離れ、鷺太の小さな肩に音も無く飛び乗る。

『このまま。あの子が早くあの男を忘れるように祈るだけよ……』

（雪白、きみだって姫に拾われたんだろぅ！？ 姫のために何かすべきとは思わないのかい！？）

鷺太は、肩の上の猫を乱暴に手で振り払った。すっと猫は優雅に着地する。

『感情を抑えなきゃだめって言ったでしょ』

白猫の声が厳しく強いものになった。しかし、叱り付けたのは、自分に対する乱暴な扱いについてではないようだった。

『ほら、焦げ臭い』

確かに、部屋に鷺太が座っていたあたりの床の色が変わってしまっていた。

『大事な姫を焼き殺すつもりなの？ わたしにだって限界はあるのよ。いつも側で君の力を抑えることだって出来ない』

(……わかってるよ、ごめん……それにしても、姫様全然気付いてないね、この匂いにも)

そういわれて、猫が尚姫を振り返る。

『これでいいのよ』

(……………)

『わざわざ、あの男のために命を縮めることは無いわ』

白猫は鷺太に背を向けたまま、尚姫の方へゆっくり歩き出した。そして、すんと姫の膝の上へ腰を下ろす。

さすがに気がついた姫は、弱い弱い笑顔を白猫へ向けた。その表情が鷺太の胸に突き刺さる。

このまま、時間がたてば、尚姫はまた笑ってくれるの？

(……結局、慰めてるじゃないか)

鷺太は肩をすくめて、ため息をついた。

覚悟（2）

にわかに、屋敷が騒がしくなった。

屋敷の主は、すぐさまそれが来客を告げるものと悟る。顔をほころばせ、自室を後にしようとした。

部屋を一步、踏み出したところで、ますます皮肉めいた笑顔が彼を覆い尽くすことになった。

「尚子。そなたの夫となるお人が、わざわざおこし下された」
「父上」

尚子の華やかな声が、良兼を鋭く貫いた。

「お話がございます」

父の眉がぴくりと動く。しかし、穏やかな顔のまま愛娘をなだめるように言った。

どうせまた、小難しいを言い出すのだろうと思ったのだ。

「今、客人がきたのだぞ。お出迎えすべきであろう。話はその後だ。そなたは、自室でお待ちしていなさい」
「父上」

何故だろう。父は、娘の顔を再び覗き込んだ。大きな瞳の奥から、かつて愛した人の面影と共に、また別の、華やかさをまとっている。これは、本当に自分の知っている娘なのだろうか。こんな大人びた

表情をしたことがあっただろうか。

物腰は柔らかく、しかし、強さをもつ。

そんな、あの人のような女性に育って欲しいと、思っていた。思っていたのだが。

(……いつのまにか娘は女になるのだな)

良兼は嬉しいような寂しいような複雑な気持ちを隠すように、小さくため息をついた。

「手短にいたせ」

娘に背をむけ、自室へ引き返した。しゅしゅ、娘の申し出に承知した、という形を取ったのだ。見かけ上だけだが。

良兼が上座に座ると、尚子はその後を追うようにして彼の前へ。そしてしなやかにひれ伏した。一瞬にして、部屋に甘い香りがただよう。尚子の絹づれの音すら、雅な香りを引き立てた。良兼は、知らず知らず目を奪われていた。

これが、あの尚子なのか？

ついこの間まで、泥まみれになり、走り回っていた尚子なのか？
そう自問してしまわずにはいられない。

間違いなく、一流の貴族の姫だ。親のひいき目を差し引いたとしても。そのなめらかな動きに芸術的なものすら感じてしまう。

都にいるどんな貴族に嫁がせたとして、恥じることは何もない。それほどに、品のある物腰と振る舞い。何より、自分が幼き頃からたたき込んできた教養がある。そのへんの男にも負けぬほどの、頭脳と洞察力。武芸にも秀でてしまったことは隠すとしても、こんな都

から離れた田舎に、京の都を思わせる女性を育て上げたことが奇跡だ。

（……うむ。こんな田舎の無骨な男に嫁がせるより、尚子は都の良家の貴族に嫁がせたほうが良いかもしれぬ）

もったいない。

そう思わずにはいられない。

いつの間にか考え込むように腕を組んだ父を、見上げたまま尚子はじつと言葉を待っていた。

「話とはなんだ」

「父上。単刀直入に申し上げます」

「うむ」

良兼の喉がごくりと鳴った。相手は娘だと言つのに、氣迫に負けている。それを隠すことがやっとだ。

「相馬殿のお命、しっかりお守りするように、同行した者にご命令を」

「……なに？」

「どこで“賊”がでるかわかりません。命にかえてもお守りせよ、とお達しください」

「……そなたが何を心配しているのかわからぬ。もとよりそのつもりだから供をつけたのだ」

「父上」

尚子の視線が真っ直ぐ良兼を射抜く。背筋がぞくりとした。同行させた家臣に、賊に襲われた事にして

小次郎を殺せと命じたのは、確かに良兼だ。しかし、娘には何も話していない。それなのに、すべてを見透かされている。たった一五の小娘に！

自分の娘だというのに、恐ろしい。
いや、自分の娘だから、恐ろしい。

良兼は、出方を窺うように愛娘を凝視する。その心中は、当然穏やかでないが、一切表には出さない。
尚子も、表情を変えずに努めて淡々と続けた。

「この度は、父上に挨拶に参っただけなのでしょう？ それを屋敷を出た後、亡き者とするなど卑怯者のすることです。父はそのような器の小さな男ではないと存じてはおります。しかし、重臣の中には、父上とこの国のためと思い、そのような愚行に走る輩もおるかもしれません」

「……………」

「そのような事が、国の民の耳に入ったらどうでしょう。民ばかりではありません。京の都とて同じ。父を失い、心許ない不安な気持ちから伯父を頼って来た相馬殿を、心なく暗殺したとあれば、いい笑いものとなりましょう」

「……………」

「父上、急ぎ伝令を」

「その心配はない」

「今、一度。父上のためです。そうでなければ」

いかにも、憂いた顔をしてみせた尚子に、良兼はどきりとさせられた。泣くのかと思ったのだ。

あの気丈な娘が、男のために泣くのか！

まさか 尚子は！！

「尚子」

「はい」

「そなた……まさか……」

あの男と情を通じたのではあるまいな

！？

わき上がるようなこの感情は怒りだろうか。憎しみだろうか。頭の中で、愛娘があのかぶてぶてしい甥にとらえられ、良いようにされている姿がありありと浮かぶのだ。

考えたくもないと言っのに。

あの男の無骨な手が娘の紅色の絹に触れ！

白い肌に　唇を！

「小次郎っ、きさまーっ！……！」

良兼は勢いよく立ち上がった。そして、鬼の形相で尚子の前を通り過ぎる。壊れてしまうのではと思うほど激しい音とともに、部屋の戸が開かれた。

「小次郎を殺せー！！　今すぐ殺せっ！！」

「ち、父上！」

突然の父の変貌ぶりに尚子は慌てて、押さえ込むように父にすがりついた。

「違います！　相馬殿とは何もございません！」

悲鳴のように叫ぶも、父の耳には届かない。父は尚子を簡単にふ

りほどくと、刀に手をかけ今にも小次郎を殺しに追いかけようとしているように見えた。尋常ではない！

「父上！！」

尚子が、声を張り上げた。

「お静まり下さい！ 相馬殿と私は何も無い！」

太く大きな声が、あたりに響く。屋敷に出迎えられた、客人一行が遠く離れた所から呆然とその様子を見ていたが、そんなこともお構いなしだ。

「私は源殿の所へ嫁ぐ」

そこでやっと良兼の耳はその機能を回復した。ぴたりと動きが止まり、今なんと言った、と良兼はしがみつく娘を振り返った。

「私は嫁ぐ」

「……………いいのか？」

「嫁ぐ」

「……………あれほど嫌がっておったではないか」

「嫁ぐと言っている」

「……………本当にあの男とは……………」

「違う。何もない」

「……………本当にいいのだな」

「くどい！ 私が承知しなくても嫁がせたくせに、よく言う！」

「そうか……………」

良兼は急に体から力が抜けた気がした。良兼も尚子も、深々と息

をつく。

そして、はつとした。

先ほどの親子の激闘を、離れたところから固唾をのんで見守る観客が大勢いることにやっと気がついたのだ。あれが、嫁になる姫様か。なんと恐ろしい。嫁ぐのが嫌だと言っていたぞ。あのような恐ろしい姫で殿は良いのか。そんな視線を痛いほど感じる。

父と娘は、思わず顔を見合わせた。小さく咳払いをした父に、娘は優雅にお辞儀をしてみせた。そして、何事もなかったかのような顔で、しれっと言つてのけた。

「父上、先ほどの願い、お聞き届けください。それが条件にございます」

「……な、なんだと!？」

もう激闘は終わったのかと思つた観客たちは、ぎょつとした。再び父が声を荒げたからだ。

しかし、娘の方はそのまま後ずさりし、応戦するつもりはなさそうだった。

「いいですね、父上。では、夫殿に、今宵お待ち申し上げますと、お伝え下さい」

そう良兼に向かつて言つたものの、その夫となる本人にもしつかりその場に居合わせている。聞いていた本人は急に自分が話題にあり、どきりとした。

尚子が父に背を向けるときに、その夫となる男　　たすく　扶　と目が合った。

1秒も無いが、お互いにその人物だと認識した。男の胸が高鳴る。

この男の好みが、じゃじゃ馬であつたことは誰も知らないことだ。それはこの場合、幸か不幸か。

しなやかに去っていく姫の後ろ姿を目で追わずにはいられない。それはその場にいた男、全員に共通して言えることだった。

「……………つ佐貫！佐貫はいるか。兵を引け」

一瞬で、呆けていた一同が現実に取り戻された。良兼が苦々しい表情で、家臣を呼んだのだ。

名指しされた佐貫は大慌てで良兼の元へ走り寄る。

それは小次郎に向けた兵の撤退命令だった。

覚悟（3）

数人の男たちと小次郎を隔てるものは、太い木の幹だけ。林の中の日常に同化するのも楽ではない。

否応なしに、体がこわばる。いくら息を潜めても激しく脈打つ自分の鼓動が、周囲に聞こえてしまいそうだ。背筋を冷たい汗が流れた。

（たく……いくら俺が戦の天才だからと言っても、限界があるってもんだ）

多勢に無勢すぎる。いったい何人の追っ手がいるのか。検討もつかない。こういう時は、人も獣と同じ世界で生きていると実感する。やるか、やられるか。隙を見せたら殺される。

パキン。

不意に張りつめた空気が、一点に集中する。

小次郎のいる場所とは反対の方向で、木の葉を踏みしめるような乾いた音がしたのだ。

「あっちだ」

すぐさま、兵たちはその音へと誘われていった。

遠ざかる人の気配に小さく息を吐き、小次郎は天を仰いだ。

「……」

とりあえず、今は命が繋がったようだ。だが、このまま林の中を逃げ回っているだけでは、拉致があかない。どうしたものかと、思案をめぐらす暇も無く、すぐにまた人の気配がする。

（……っち。考える余裕もねえ！）

しかし、目で確認したわけではないが、相手は一人のようだ。かさ、かさつと一歩一歩、小次郎の方へ近付いてくる。

（一人なら……やれるか）

小次郎は腰の短剣に手をやった。全神経を耳に集中させ、相手との距離をはかる。

かさ……かさ……。

好機は一度だけ。しかも一瞬で絶命させなければならない。タイミングが全て。

（すまんな　　）

敵が一人で小次郎の前に現れたのが運のつき。小次郎は目にも留まらぬ速さで敵の背後にまわる。口元と首を捉えられた不憫なエモノは、ゴキつという鈍い音と共に絶命した。その間、30秒。再びあたりに静寂が訪れた。まるで何もなかったかのように。

小次郎はふう、と短く息を吐く。これで何人の敵を減らすことが

できたろうか。途中から数えられなくなった。
体力も限界だ。

（まったく何人を使つて俺さま一人を追いかけてるってんだ。ええ？
ずいぶんと伯父上に見込まれてるってものだ）

皮肉めいた顔を浮かべながらも、全身で周囲の様子を伺う。まるでその姿は獣そのものだった。

パキン。

再び、枝の折れた音が空気を貫いた。

またか。音はまだ離れたところから聞こえたようだった。しかし、瞬時に小次郎の筋肉に、ぴりつと緊張が駆け抜ける。

すると聞き覚えのある声が小次郎の耳に飛び込んできた。

「俺はこっちをさがす、お前はあっちを」

用心しながら、大きな幹の影から音のした方を覗き込むと、人影が二つ。

（……あれは……）

人影は一つになって、真っ直ぐに小次郎のいる木へと近付いてくる。

小次郎は息を潜めた。

ざく、ざく、と徐々に大きくなる足音。

（どっちに付くつもりだ）

姫か。それとも屋敷の主か。

あつという間に感じた。考えあぐねていたからかもしれないが。

鷹雄は、今まさに小次郎のいる木の目の前へとたどり着いたのだ。もし、殺すなら今しかない。

無いのだが。

（お前の主はどっちだ　鷹雄！）

ごくりと生唾を飲む音が、大きく感じた。

「返事はするな。そのまま聞け」

それは小さな声だったが、しっかりとしていた。

「馬がある」

（　　！　　）

鷹雄は、くるりと小次郎に背を向け、幹に背をもたれさせた。まさに、二人をへだてる物は、一本の木しかない。

「村へ行け。ツネ婆が手配してくれる」

やはり、姫から何か言われていたのだ。間違いない。

「夜まで村に隠れている。そして闇に乗じて国へ帰れ」

もう大丈夫だと、小次郎は確信した。

無事に国へ帰ることができるだろう。

自分一人ならば。

「良尚様からのお言葉だ『世話になった。これはその礼だ。恩に思うことは何もない。それに生きていれば、いずれ会えよう』」

一言一言、姫の顔が、声が浮かぶのはなぜだろう。鷹雄の口から出ているというのに。

あの笑顔が自分の胸を熱くさせるのだ。

あの声が自分の心に命を吹き込むのだ。

「それから『私は海を夢みる鳥になる。命は大事になされよ』と言っておられた」

（鳥になる……？）

小次郎の脳裏に、あの夜の姫が思い出される。

泥まみれで村を走り回っていた姫を。馬に跨り、田畑を耕し、村人と大笑いし。日を浴びて、その光をすべて自身の輝きへと変えてしまうような女性を。

『私は海を夢見る、鳥になる。』

海を夢み、飛びたくて。でも飛べない鳥に。

羽をもぎ取られ、籠に押し込められた、鳥になる』

この言葉の真意。そして先ほどの扶の姿。

（ それでは今宵、源扶のものになる、そういつことか！ ）

瞬時に、小次郎の脳で一本に繋がる。

風が木の葉を揺らし、林がざわめいた。

『逃げる 私にかまわず』

彼女が風の声を借りて、そうささやいた気がした。

小次郎の瞳に光が灯る。その意志と同様に激しく強く。

「姫に伝えよ」

鷹雄のかわりに、木々が答える。はらはらと舞う落葉が蝶のように小次郎の目の前を過ぎた。

「約束は必ず守る」

小次郎はそれだけ言うと、村の方へと姿を消した。まるで風のよう
うに。

良兼からの撤退命令が届くのは、この数分後のことだった。

3 心の声を(1)

3 心の声を

屋敷の最西にある部屋で、姫君はじつとその時を待っていた。

普段この時分なら、明るい笑い声が聞こえてくるというのに、今は見る影もない。部屋には、あたかも罪人を匿うような、言いようのない重苦しさと緊張感が漂う。

すでに太陽がその役目を終えたため、地上からは色彩が半分以上奪われている。

いつの間に女官が部屋へ訪れたのだろうか。尚子のすぐ目の前にある油差しに、気づかないうちに火がともっていて、今はそれが唯一の光源となっていた。

床に映し出されたの尚子のシルエットは、ゆらゆらと揺らめいて、実に心もとなく見える。まるで尚子の心のように。

そんな静寂と闇の牢獄で、どのくらい静かに座り続けて居ただろう。尚子は一人、一点を見つめたまま、息までも止まったかのように動かない。その顔から表情はとうに消え失せていた。

こんなに時が長く感じたのははじめてだ。
何も感じない。

いつも体中で感じる自然のかけらを一つも感じない。

草と土のまざった、庭のにおい。

虫や葉、星達の声。

秋のそよ風は、まるで、母がそうするよつに頬を撫でる。

そんな自然のかけらに全身をゆだねる時間が、尚子は好きだった。

それなのに、今は何も感じない。

婚礼用に身につけたこの紅の着物は、死に装束だったのか。そう思うと、くすりと笑みがこぼれた。

（もう、どうでもいい……）

自分の運命は、父の娘として生まれ落ちた時に決まっていたのだ。そもそも、本来なら、ずっとこの部屋に閉じこめられていたはずなのだ。

この部屋の外の空を知らずに、いや、外の風を知らないことすら知らずに。

この部屋から見えるもだけが、自分の世界であると信じて疑わずに。

どんなにそれが“幸せ”なことか。

あのまま何も知らずにいられたなら……。

（そうだ……“尚子”に戻るだけなんだ）

今宵、“良尚”が死ぬ。それだけのこと。

自分は尚子として、一人の女性として、生きていくだけ。

夢から覚めるだけなのかもしれない。

「これでいいんだ……」

かすれた小さな声が部屋に広がる。

後悔してる？

そう自分の中で“良尚”が問いかけた気がした。

知らないほうがよかったか？

花のため息。

鳥の舞い。

風の唄。

月のぬくもり。

みんな知らないほうがよかったのか？

わからない……。そんな自分が想像できない。

松吉やツネ婆、鷺太にも会えなかったぞ。もちろん……鷹雄にも。

嫌だ！ それは絶対に嫌だ！

小次郎にだって相手にされなかったかもしれない。

……小……次郎？

ぼたりと何かが、膝の上に落ちた。それは円を描くように広がり、絹地にしみこんでいく。

そつと自分の頬に振れると確かに濡れていた。自分は……泣いているのか。その事実がどこか人事に感じた。

（何も知らない私は、“私”じゃない）

あんな幸せだった日々を、無かったことになんてしたくない。毎日を、確かに自分は“生きていた”のだから。

あの日々を無かったことにするくらいなら。自分は自分の運命を受け入れてやる。

……でも。

「楽しかったな……」

震えた声の最後は、形にならなかった。

あとからあとから溢れる涙。体は正直だ。

納得しているのに。

もう決意したのに……。
心が悲鳴をあげている。

嫁になどいきたくない。あんな男のものになど、なりたくない！！

心がそう叫んでる。

「姫様……」

背後から声がした。尚子の瞳に、わずかながら生気が戻る。
いつからそこにいたのだろう。鷺太が、膝を抱えて部屋の隅に座っていた。その横には白い猫。赤い瞳をキラリとさせ、こちらをじっと見つめている。

「鷺太……」

慌てて尚子は涙を拭う。

「こちらへおいで」

足音を立てずに、鷺太は尚子のすぐ目の前へ歩み寄る。そして、小さな手で尚子の頬に触れた。

彼の手の平から伝わる優しさが、尚子の胸を熱くする。
一度溢れた感情は、せき止めるには難しい。

尚子は自分の手を、頬にある鷺太の手に重ねた。

泣かない。心配かけたくない。
笑え……笑うんだ。

やっとの思いで絞り出した声は、震えてしまう。

「頼みがある」

「はい……」

「その猫をつれて、今日は鷹雄の部屋で寝てほしい」

「……………」

「さあ、行って」

「……明日になったらまた姫様と一緒に寝れるのですか？」

尚子は静かに目を伏せた。

明日には、自分はこの屋敷から追い出されるに違いない。

本来、この時代の婚姻は3日間、男が女の元へ通うことで成立する。

しかし、それは都の中でのこと。離れた家間では同居を望むのが道理。尚子も、この住み慣れた上総を出て常陸へと移住することになる。

尚子は、そつと鷺太を抱きしめた。

「また会える」

「いやだ！ 姫様と離れて、生きていてもしょうがないよ！」

鷺太がしがみつく。尚子はそれに答えるように、しっかりと抱きしめてやる。

「……鷺太」

尚子は名残惜しそうに、鷺太を引きはがし、まっすぐ見つめた。

「鷺太。しゃんとしろ。お前は私がいなくても生きていける。生きていけないような男など私はいらん」

「……姫様」

「また会える」

「……」

「……さあ、行きなさい」

尚子は、そつと猫を抱き上げ、鷺太に差し出す。

鷺太はしぶしぶ、その猫を受け取った。そして、押し出されるように尚子の部屋を後にする。何度も何度も、窓辺の尚子の姿を振り返りながら。

尚子はそんな鷺太の小さな背中をいつまでも眺めていたかった。だが、ほどなく尚子の心を引き裂くような、木戸の音が部屋に響く。

ガタン。

ついにその時がきたのだ。

心の声を（2）

頭でそう認識するより先に、尚子の体がびくりと反応する。

つつ……つつ……。

絹連れの音が近付いてくる。

尚子の体中がこわばる。

緊張のあまり後ろを振り返ることもできない。

……つつ……つつ……。

自分の鼓動が大きく早く聞こえる。まともに息ができない。窓の縁を握る手が、かってに震えた。

そんな尚子の背中に、ねっとりとした視線が絡みつく。頭の前から、絹裾まで、じっくりなめ回すような、そんな視線だ。

……つつ。

ついに絹連れの音がピタリと止まった。

真後ろに人の気配。

ごくろ。生唾を飲み込む尚子の喉が鳴った。

その瞬間。

「尚姫、お待たせしたかな」

聞きなれぬ男の声。

最後の音が発せられるより早く、尚子は強い力で引き倒された。

「　　っ！」

叫びそうになった声をかろうじて飲み込む。

その拍子に、尚子の打ち掛けの裾が、まるで舞うように弧を描いて床に落ちる。

尚子のまとう香りが、部屋いっぱいに広がった。
油差しの明かりで、赤黒く映し出される男の顔。口端がにたりと歪むのがはつきり見て取れる。

「……………」

一瞬にして沸き上がる恐怖に吐き気すら覚える。全身の肌がざわめく。

尚子は今すぐにこの男を蹴り倒して、逃げ出したい気持ちを何とか押さえる。必死で。そして大きな目で扶を睨みつけた。

簡単におまえの好きなようにはさせない。例え体を征服できたとしても、心は誰にも奪えやしない。私は私のものだ！

しかし相手が悪かった。少しでも触れれば噛みつきそうな尚子の気迫も、この男には逆効果となる。

「いい目だ」

さも嬉しそうに男が笑う。

「尚姫は笛をたしなめますかな？」

尚子は返事をするかわりに、睨みつづけた。

「従順な笛はもう飽きてね。こんどは私の手で作って見ることにしたのだよ。この笛はなかなか難しくてね」

ゆっくり男の手が、尚子の腰元へ移動していく。腰紐がほどかれる音が、尚子の恐怖を煽る。それでも目を逸らすものかと思った。

「不思議なことに、手が掛かる笛の方が愛着がわくのです……いい声で鳴くまで、優しく丁寧にも愛でてやらねばな、笛も女もっ！」

そついい終えると同時に、扶は一気に夜着を左右に引き開ける。露わになった尚子の白い肌に、男は舌なめずりをした。

尚子はなおも無言で睨み付ける。が、床を握り締める手の震えは止まらない。

男の顔が近づいてくる。

首筋に息がかかる。

まるで味見でもするかのように、男の舌が首筋をたどっていく。ナメクジが這うような、その感触に、ぞくりと背筋が寒くなる。勝手に体が強ばって、小刻みに震え出した。

(ひっ……気色悪いっ)

その小さな震えに気づかない扶ではない。悲鳴をあげない尚子の

気の強さに、泣き叫ぶ様を見てみたい衝動が湧き上がってくる。もはや扶の口元から笑みが消えるはずもない。徐々に胸元の方へ移動していく男の舌。

（いやあああっ！）

悔しい。

悔しい！ 悔しい！

気持ち悪い！

強い感情が溢れ、尚子の細い体には収まりきれない。勝手にまぶたから涙が溢れてくる。

（助けて！ 助けて！！）

しかし突如として、鎖骨のあたりで男の舌がぴたりと止まった。恐る恐る尚子が目を開けると、鎖骨あたりを凝視する男の顔に怒りが浮かんでいる。

「これはどういうことだ」

（……これ？）

訳が分からず、自分の胸元を見た尚子は 息を飲んだ。

（……何だこれは ！）

胸元にうつすらと、でも確かに、赤い花びらが咲いていた。 小次郎の唇の証

（い、いつの間に！……あの時！？）

あの夜。小次郎と唇を重ねた、あの時。

あの男は、全く口で齒の浮くような事ばかり言って、ほんとに手が早い。こんなところに跡を残していくなんて。

期待してしまうではないか。迎えになど来るはずないのに。

「何がおかしい」

尚子のはつとした。

しまった、と思ったが、もう遅いことも同時に悟る。先ほどまであんなに強張っていた尚子の顔が自然に緩んでいたのだ。

明らかにプライドを傷つけられ、嫉妬と屈辱に支配された男が、鬼の形相で自分を見下ろしている。

「そなた、他に男がおるのか！ そうなのか！？」

男は乱暴に尚子の胸のふくらみを掴んだ。

「いたっ！」

思わずあげた悲鳴は、ますます男をエスカレートさせた。

「いつもこのようにどこぞの男に弄ばれていたのだろう？」

「やめっ……っっ」

乱暴に足を捕まれ、口を手でふさがれる。息ができない！

苦しさにもがいてもがいて。抵抗するもむなしく、男はびくともしない。

やっとのおもいで口から手がはなれたと思えば、男の口で塞がれる。

小次郎のとは違う。

同じ行為だというのに、全然ちがう。これはただ征服するための行為でしかない。

こんな……こんな扱いを受けるために……。

生きてきたというのか。生きていかなばならぬのか。

女に生まれたがために！

「いやあああ！ 小次郎ーっ！」

無意識のうちに悲鳴をあげた。もう口にすることもないと思った、その名が飛び出した。

無我夢中だった。もがいてもがいて。
力の限りもがいて。

「うっ」

突如、男がと小さく呻いた。そして尚子の上に倒れ込む。

その結果、ただの重石と化した男の体。

本能的に恐怖から逃げられると感じとった尚子は、男の下で一層じたばた手足を動かした。

しかし、次にはふわりと重石が宙を浮く。尚子の体が、反射的に、さらなる恐怖に身構えるように小さくなった。

（ ！？ ）

そうか。何者かが、自分の上に覆い被さっていた男を、どけてくれたんだ。そうとわかるのに少し時間がかかった。

（夢かな……）

だって。

目の前に現れたのは　。

「遅くなつたな」

尚子が心から望んだ笑顔の小次郎　ではなく般若のように怒り狂った小次郎だった。

心の声を（3）

小次郎は、拳を大きくふりかぶったかと思うと、勢いよく振り下ろした。聞いているだけで痛くなってくるような、ごん、という鈍い音が部屋に響きわたる。間髪いれずに再び小次郎がふりかぶる。

「俺の許可無く」

ごん。

「俺の嫁に触るな」

ごん。

「俺もまだ、全部見てないんだぞっ！許せん！」

ばき。

おそらく、最後の渾身の一発。それでも、殴り足りない。再び拳に力を入れた時。

「小次郎！」

尚子が小次郎の胸に飛び込んできた。

「うおっと」

小次郎が怒りに我を忘れていたために、不意をつかれた形になる。

少しよろけながらも、しっかりと抱きとめた。

尚子の香りが小次郎の怒りをなだめる。小次郎のたくましい腕が、尚子の恐怖で凍り付いた心を溶かす。

まるで、溶け合っていくようだった。二人の、心も、それを留める器も、同じ温度になっていくように。
からだ

小次郎は尚子の頭をあやすように撫でてやる。

「よく頑張ったな」

「……来るのが遅い」

強がるもの尚子の声は、かすれて今にも消えそうだ。

「すまん。色々、手間取った」

「……帰れって言ったのに……」

小次郎はきよととなった。さっきは来るのが遅いと言ったかと思えば、今度は帰れという。まったく、どうしたいんだ。いや、両方とも本心なのか。思わず口元がほころぶ。

尚子は尚子で、もはや何が言いたいのか尚子自身もわからない。目頭が熱くて。胸がいっぱいで。小次郎の腕が暖かくて。

「帰るさ」

小次郎はふわりと笑った。その表示の柔らかさとは逆に、尚子を抱きしめる腕に力がこもる。

「姫さんを連れて、な」

「……だからっ」

尚子は、とつさに顔を上げる。帰れと言おうとした。今すぐ帰れ、と。

なのに……。

小次郎の優しい眼差しに、紡ぎかけた言葉が形を失った。

（そんな顔しないで　　）

尚子の瞳から、はらりと一筋の滴が落ちる。

また一滴、また一滴。キラキラと輝きながら、尚子の心を裸にしていこうように。

言わなくては。

今なら間に合う。早くこのまま立ち去れ、と。

父が気がつく前に。でない　　殺されてしまう。だから言わなくては。

尚子の小さな口が、ぱくぱくと形のない言葉を紡ぐ。

（どうして……言葉が出てこないの……？）

逃げて。

死なないで。

お願い、死なないで。

「　　」

後から後から溢れる涙。嗚咽を我慢して、唇がふるえる。

どう伝えたらいいの？

あなたに生きていて欲しい。

そしたら……きつとまた会えるから。
だから、逃げて。

たまらず泣き崩れる尚子を抱きとめ、小次郎は腕の中でふるえる尚子に笑いかけた。

わかってるから。全部言わなくていい。わかってて、それでも来たのだから。

その柔らかな瞳がそう言っていた。

「泣くな」

暖かな声に包まれれば、ますます尚子の感情は涙となって溢れ出る。ついには、口元を押さえても嗚咽がこぼれた。息ができないほどに。

「ほら、泣くな」

そんな尚子の顔を再び胸に抱きしめながら、小次郎は小さくため息をついた。一人で抱え込むからだ。まったく。しょうがない姫さんだ。

そんな小次郎の気持ちが尚子に流れ込むようだった。

しかし、実際に小次郎の口からでた言葉は全く別のもの。

「泣くなって。いつまでも泣いてると。押し倒したくなるだろ」
「!？」

小次郎の言葉に尚子は思わず体をひきはがす。突然、何を言い出すのだ、この男は。

「だってさ。ただでさえ、姫さん何も着てないわけ。俺、今、すごい耐えてるの。わかるー？」

言われて初めて我が身を振り返る。慌て小次郎から離れると、尚子は真っ赤になって、自分の着物を探した。そして小次郎に背を向け、慌てて着込む。

「あ、着ちやうの？」

「あたりまえだっ！」

そんな緊張感のないやりとりも、どこか優しさがにじんでいて、いつのまにか尚子に笑顔が戻っていた。

いそいで尚子が身なりを整え終えた頃、そこにいたのは小次郎ではなく“もののふ”の顔をした男だった。

（まったくなんて顔なんだろう）

生き生きとしたその表示に、高揚感が伝染してくるようだ。

「さてさて、尚子殿」

小次郎はいつになく真顔だ。ずっと尚子の正面に立つと、手を差し出した。その大きな手のひらに、確かな自信が見えた。

「……だ、だめだ！」

「何を今更。行っただろう？ 今宵必ず迎えに行くって」

尚子の周りから音という音が消え、自分の鼓動だけが響いている錯覚に陥る。

二人は薄明かりの中、見つめ合った。

目の奥がキラキラしてる。尚子はそう思った。

「これからはおまえの好きなように生きろ。でもそれは俺の隣で、だ」

「好きなように……？」

いいのだろうか。

自由に生きても。許されるのだろうか。

そんなものが、自分に与えられるのだろうか。

「俺が、おまえにその自由をくれてやろう。俺の妻になれ」

小次郎が笑いかけた。その眩しさに目を細める。磁石に引かれるように、ゆっくりと尚子の手が小次郎の差し出した手の方へ伸びていく。

（待って、でも……）

この手を取るということは。

（父上を捨て、この国を捨て 小次郎を選ぶということ）

心の声を（４）

走馬燈のように浮かぶ幼き頃の記憶。

父の笑顔。母の声。弟たち、藤乃　桜の木。

（違う。捨てるだけじゃない、敵に回すことになるんだ）

父や弟と、剣を交えることも！

小次郎へと伸びていた尚子の手が、ぴたりと止まる。それを見て小次郎はふっと笑った。

「良尚……じゃなかった尚子。いやもうどっちでもいいか」

尚子はぎよつとして小次郎を見上げた。なぜ、それを？　いつから？

問う暇もなく小次郎がたたみかける。

「しっかり生きる。人の心配ばかりしてないで。まずは、おまえが自分の生き方を貫け」

「……分かってている。だから私は私の意志で……」
「分かってない」

小次郎が尚子の言葉を遮った。

「こんな男の妻になりたいと本気で言ってるのか！？」

さきほどの恐怖が瞬時によみがえり、尚子は小次郎の真っ直ぐな目から逃れるように目をそらす。
返す言葉が見つからない。

「もう言い訳はよせ。自分の不運を人のせいにするな」
「してない……誰のせいにもしてない」

ただ、我が身を呪うだけで。

どんなに泣こうが、自分が女に生まれ、平良兼という男の娘であることは、一生かわらないのだから。

「してるだろう？ 人のせいにして、周りのせいにして、我が身の不運を嘆いてばかりの人生を、これから先ずっとおくる気か？ 仕方ないから、だとか、良兼殿の命令だから、いや、俺の命を救うためだ、などと自分に言い訳して」

つらい、苦しい、悲しいと言いながら。尚子は逃げているのだ。本当は扶になど嫁ぎたくない。尚子はそう思っているくせに、それを貫くことから逃げている。父に逆らって生きていくことが、父を説得することが、どんなに険しい道だとわかっていているから。

そんな尚子がやつとの思いで閉じこめた心の声を、小次郎は引っ張ったり出そうとしていた。

たしかに、尚子が心のままに行動することは、この板東（現在の関東地方）の地に大きな火種をばらまくこととなるかもしれない。小次郎自身も大いに巻き込まれ、争乱の中に身を置くことになるだろう。

骨肉の争いが始まる。敗者には死が待つ、そんな激しい戦いの足

音が聞こえるようだ。

どう考えても、あまり賢い選択ではない。いや、避けるべきだ。

だが、それでも。

尚子には、笑っていて欲しい。
自分の人生を楽しんで欲しい。

小次郎はそう思うからこそ、厳しい言葉をかけ続けていた。

そんな小次郎の気持ちを尚子が知る由もない。

尚子は、小次郎から顔を背けたまま、頑なな姿勢を崩さない。小次郎のあの眼が怖い。すべてを見透かされそうで。

自分はまた、裸で立っているのではないかと錯覚してしまう。
そんな無防備な尚子の心の急所をめがけ、小次郎の言葉の一つ一つが鋭い矢となり、次々に飛んでくる。

「自分の人生は自分で責任をもて。自分の心に従え！ 自分の意志を貫け！」

もう、やめて。聞きたくない！
これ以上、私の心に入ってこないで！

背を向け、耳をふさごうとする尚子に小次郎は容赦ない。

「どうしたいのか、自分で決める」

「……どうしたいか……？」

「そうだ。おまえ自身が、どうしたいか、だ。それを見失えば、自分自身ではなくなる」

どうしたいか。

どう生きていきたいか。

小次郎の一言一言が尚子の中で広がっていく。

「おまえは、おまえとして生きる。俺の知ってるおまえなら、それができるはずだ」

そうだ同じことを自分も思ったじゃないか。尚子はそう思った。

『しっかり生きる』

そう鷺太に告げたのは自分だ。

鷺太に笑っていて欲しいから。

幸せだと感じて欲しいから。

「まあ、だけどそれだけじゃ俺が困るんだ。俺はおまえにそばにいて欲しい。だから、俺の意志でここへ来た」

尚子は小次郎の瞳に映る自分を見つめた。

「無理やりにおまえを連れてつても意味がない。俺は“尚子”という女が欲しい。だからおまえが決める。俺と来るか、ここに残るか」

分かった気がした。このキラキラとした強い輝きの正体が。なぜこの瞳に惹かれるのか、が。

この人はしつかり今を“生きてる”！

（私は、この人の隣なら“生きて”いられ？）

自問したが答えは分かつてる。しかし。

尚子は小次郎から顔をそらした。

「でも……父上がお許しには……」

「許しがなんだ！ “生きる”のに誰の許可がいる！」

「だって！」

「だってじゃない」

「今ここを出て逃げても！ すぐに追つてがつく」

小次郎を殺す大義名分を与えることにはならないか。父たちが、小次郎の国を攻め入る隙とは、ならないか。

戦となれば、多くの民が命を落とす。それも、自分のこの決断のせいで！

そんなことが許されるのか。民に。天に！

「逃げきる。心配ない」

「でも捕まれば、小次郎が……」

「逃げきる。俺は死なない」

尚子の瞳からいつの間にか、はらはらと涙がこぼれていた。

「でも……」

「おまえは、どうしたい。言ってみろ」

尚子はぐっと息を飲んだ。

（私がどうしたいか）

小次郎のためでも。父のためでも。誰のためでもない。
自分の心の声は。

自分は。

「……連れ……てって……」

小さな小さな声の、強い意志。
やっとの思いで吐き出した、ずっとしまい込んでた心の声。

ぼろぼろと涙がこぼれる。

悲しいわけじゃない。
泣きたいわけじゃない。

勝手に溢れる涙は、キラキラと光りながら落ちていく。そのたびに、尚子の心の壁が崩れ落ちていく気がした。

小次郎は、ふつと顔をほころばせて、再び手を差し出す。大きな力強い手を。恐る恐る伸ばした尚子の手が小次郎に触れると、そのまま、強い力で引き寄せられた。

力の限り乱暴に、抱き締められてるはずなのに、真綿で包み込ま

れる安心感。ますます涙が溢れた。

おまえの居場所はここだ、と言われている気がした。

「世話の焼ける姫さんだ」

尚子の頭を撫でながら小次郎は微笑んだ。自身も気づかぬほど、柔らかに。

「小次郎様、早く！」

二人を厳しい現実へと引き戻す声が部屋に響いた。
外からの小声に、二人が同時に振り向くと、藤乃、それに鷺太の姿もある。

どういうことかわからずに、尚子は小次郎の顔を見上げた。

「姫さんの人徳をやつだな。いや實際助かったぞ。俺一人じゃ、どうにもならなかった。さあ、行こう」

小次郎は、尚子の頬に口づけをすると、尚子を横抱きにした。

「なっ……わっ！」

小次郎は意味不明な悲鳴をあげる尚子の頬にもう一度だけ口づけする。

「静かにしてる。続きは国に戻ったら、ゆっくり、たっぷり、何度でもしてやるから安心しろ。寝かすつもりはないから覚悟しておけよ」

にやりと笑う小次郎。尚子は真っ赤になって口をぱくぱくさせた。

もちろん、尚子のその反応を見たくて、わざとやってるのだが。
そんなやり取りの余韻を楽しむ間もなく、小次郎は軽やかに部屋
を出る。

尚子がそつと小次郎の顔を見上げると、もう先ほどまでの笑顔は
どこにもない。

それが、これからの苦難を否応なしに予見させる。尚子の胸に小
さな不安がよぎった。

だがすぐに、別のことに気を取られ、その不安はうやむやになる。
入れ違いに藤乃が部屋へ入っていくのが見えたのだ。

「待って、藤乃！」

「姫、ご無事で……」

「だめだ藤乃！ 一緒に行こう」

屋敷に残れば、尚子の世話を任されていた藤乃の身が危うい。誰
にでも分かることだ。

それに、今夜は客人も来ている。客人に恥をかかせた、父の対面
もあろう。藤乃は十中八九……殺されてしまう。

「……後から参ります。ご案じなさいますな」

すれ違い様に、尚子に微笑む藤乃は、何とも満足げだった。

「だめ！ 小次郎、藤乃も……んぐっ！」

小次郎は、腕の中で暴れる尚子の口を自分のそれで塞ぎ、すぐに
尚子の耳もとで囁く。

「静かについて言ってるだろう」

「だからって！」

人前で口づけすることないじゃないかっ！ と真っ赤になりながら抗議する尚子に、再び小次郎の顔が近づく。

耳元で、ぞくぞくするような、いい声が、「また口で塞ぐぞ。両手ふさがってるんだからな」と、尚子を黙らせる。一瞬、そんな尚子の様子を愛おしそうに見つめた小次郎だったが、すぐに顔を引き締めた。そう今は生死の瀬戸際。

「頼むぞ」

小次郎は、一言だけ藤乃に声をかけ、尚子を抱き抱えたまま足早にその場を去った。

尚子は小さくなる藤乃を不安げに見つめていた。

驚太も遅れないように、小次郎たちの後をついて行こうとして、ふと足を止める。なぜか気になったのだ。

驚太は、ゆっくり藤乃を振り返った。藤乃は深々と頭を下げたまま、見送っている。

姫をよろしくお願いします。

驚太はそんな声にならない声を確かに聞いた。胸がじんわりと熱

くなる。こんな気持ちは初めてだった。

きつとこれは、藤乃の強い強い、覚悟。藤乃の気持ちが自分に流れ込んでるんだ。

尚子の幸せだけを願って。

命をかけて。

（あなたも、どうかご無事で……）

鷺太は、深く一礼すると、小次郎の後を追いかけて行った。

どうか、どうか、姫をよろしく願いします。

いつまでも藤乃は見送り続けていた。

(1)

「それでは、相馬の小せがれは死んだのだな」

良兼の目が怪しく光る。暗がりの庭に静かに立つその背中を見た者は、まるで良兼の独り言のように聞こえただろう。

「あの高台から川に落ちたのを、しかと見ました」

月夜だというのに、光の届かぬ場所に身を潜めた男が淡々と答えた。

このあたりの川は流れも速く、水量も多い。しかも、高台から川面までゆうに5mはある。川に落ちたのなら、海もそう遠くないから、助かることはそうそう無いだろう。

「そうか」

今度こそ。これでもう二度とあの甥の顔を見なくてすむ。憎んでも憎みきれない実弟と生き写しの、あの顔を！

秋風が良兼の頬を撫でていった。

ずいぶんと心地良い風だ。いや、実にすがすがしい。

「そなた、名は何と言ったか」

「鷹雄にございます」

「それでは、そなたが尚子の」

尚子が実に聡明で武芸にも秀でた優秀な家臣だと言っていた。尚子が嫁ぐ今となつては、良兼の直々の家臣として取り立てるべき逸

材かもしれない。

「そなた」

「はっ」

「褒美を取らそう。わしの家臣として取り立ててやる」

「ありがたき幸せにございます」

色よき返事に、良兼の顔が満足げにゆがむ。

「ですが、殿。殿の命をまだ果たしておりませぬ。その命を果たしてからでなければ、そのような名誉をお受けすることはできません」
「命……だと？」

はて、このような男に命など直々に下した覚えはない。懸命に細くなつてしまった記憶の糸をたどつてみる。

「はい。私が姫に拾われ、初めて殿にお声をお掛けいただきました
おり、『己の命をかけて、姫の命を守れ』そうおっしゃいました。
姫がご無事に常陸へと嫁がれるその時まで、この命を果たすのが自
分の使命と心得ます」

「ふん。もつて回つた言い方はよせ。はつきり言うがよい」

「私めも、姫の常陸行きの護衛にお加えいただきたく」

「……まったく、尚子の躰がずいぶんと行き届いているようだな」

ため息まじりに、良兼は許可を出した。

本当に。

あの子は生まれてくる性別を間違えたな。
息子だったなら……何度そう思ったことが。

「殿。今宵の風は冷えます。どうぞお戻りください」
「うむ。もう寝るとしよう」

良兼が身を反転させ、自室へと戻ろうとしたその時、屋敷の西の方からガタンという大きな音が聞こえた。すぐさま険しい顔で良兼が庭を振り返る。

遠くに見える部屋はすでに灯りが消えていて中の様子を探ることはできない。

「……何事か」

まさか、婿が尚子に手荒なまねをしているのではないか。いくら婿でもそれは許さぬ。

政略結婚とはいえ、娘の幸せを願わぬ父はいない。

良兼の足が西へ向かうとした。が、すぐさま背後から声がかかる。

「殿」

「しかし」

「殿が見込んだお方です。ご心配はないと存じます。それに、無粋な真似は控えた方がよいかと」

「だが……」

「恐れながら申し上げます。ここで殿のお力を発揮されたところで、万が一、婿様が言いがかりをつけてきては面倒なことになります。無理な条件を押しつけられるような事あらば、両国の関係に暗雲がたちましよう」

まったくその通りだった。

しかし、それをよくも堂々と言ったのけたものだ。普段ならば、言葉はおろか視線すら交わすことができぬ身分の差だというのに。

だが、欲しいのはそんな家臣。物怖じせずに、主人をいさめることのできる度量と知力が無くてはならない。

「そなた、尚子を送り届けたら、必ず上総に帰ってくるのだぞ。お前まで常陸にくれてやる気はないからな」

「はっ」

「それにしても……娘の父になど……なるものではないな」

静かに月を見上げる良兼の顔は、どこから見ても娘を愛しむ父親のそれだった。

「走り回るあの子の顔が見れなくなるのは寂しいのう……」

ぼつりと呟くように独りごとすると、自室へと向かっていった。そのうなだれた背中を見送ると、鷹雄はすぐさま踵を返し、暗闇の中へと消えていった。

(2)

鷹雄が良兼の前から姿を消した少し前のこと。

独り最西の部屋の前に残った藤乃は、静かに顔を上げた。

どのくらいそうしていたのだろう。見据えた先には、すでに尚子の残り香すら感じられない。冷たい夜風が、連れ去ってしまったようだ。

祈っても、祈り足りない。

尚子だけが、藤乃の生きている意味であり、幸せそのものだった。

姫の笑顔が守れるならば、こんな命　安いもの。

(さあ、ぐずぐずしてはいられない)

そこからの藤乃の行動は、さすが筆頭女官と言うべきものだった。部屋に横たわる、アザだらけの男　扶たすく　の手足を縛り上げ、柱にくくりつけた。さらに、猿ぐつわをし、完璧を期す。そして、その惨めな姿を隠すために、部屋に几帳を並び立てる。

藤乃が、油差しの灯りを吹き消せば、部屋は光の届かぬ世界と化した。

これで、しばらく時間が稼げるだろう。

暗闇の中、扶に向かって座る。

静かだ。

このまま、時が過ぎてくれれば。

日が昇るまで。

（見えるかしら……）

藤乃はい帳の向こうにあるだろう、窓の向こうへ思いをはせる。

目が自然と細くなる。

柔らかに微笑むその藤乃の脳裏には、見えるはずのない、キラキラと輝く日の光が映し出されているのだろう。

閉ざされた薄暗い最西の部屋から、おそらく、藤乃にとって最後となるだろう、日の光が。

そして、それを同じくらい眩しい、尚子の笑顔が　。

ああ、なんと自分は幸せだったのだろう。

これまで、尚姫^{たかひめ}、そしてその母君、華姫^{はなひめ}と二人にお仕えし。毎日が夢のようだった。

もう、これ以上何も望まない。

華姫様、私ももうすぐそちらへ参ります。

ただ一つ。

心残りは、尚姫のこと。

尚姫が小次郎のことを思っているのは気づいていた。相手は、主である良兼が目の敵にする良将の息子。信じたくなかったが、止められないのもわかっていた。

お家のために、姫の笑顔を奪うことは自分にはできない。そんな姫の姿を目の当たりにするくらいなら……。

「姫様……お幸せに……」

祈るように藤乃が胸の前で手組んだその時、部屋の外で大きく風がざわめいた。

藤乃の顔がぴりつと凍る。

「まさか、筆頭女官が裏切っているとはな」

そんなまさか……。

藤乃のどがごとりと鳴った。

聞こえるはずのない男の声。

藤乃の大きく見開かれた目が、動揺に揺れる。

もう目を覚ましたというのか。しかし、しっかりと両手を縛り上げて、柱に固定したはず！

おそろおそろ振り返ると、暗がりでも分かるほどすぐ目の前に、扶の怒りに満ちた顔が浮かび上がっていた。

「あんな縛りかたでは、すぐにほどけるぞ。筆頭女官たるもの、捕縛の仕方くらい学んでおくんだな」

次の瞬間、藤乃の顔に激痛がはしる。強い力で殴り飛ばされたのだ。

老いた藤乃の小さな体は、簡単に吹き飛んだ。藤乃と一緒に倒れた几帳が、ガタンと大きな音を立てる。口の中が切れたのか、血の味がする。足も痛めたらしい。少し力を入れただけで激痛がはしる。

（今この男に騒がれては、殿に気付かれてしまう……できるだけ姫様が遠くへ逃げるまで……何とかしなくては……）

しかし老体は、今の一撃で十分すぎる衝撃をうけていた。体を起こすこともままならない。

なおも男の蹴りが腹部を攻撃してくる。

「……っ」

闇の中、たまらず漏れる声は、苦痛に満ちた藤乃の顔を容易に想像させた。

必死で声を出すまいと耐える老婆のそのけなげさもまた、ますます男の狂気を煽ることになる。

「まあ、それももう必要なかろう」

頬に冷たい金属の感触。一瞬で背筋がぞくりと凍る。

視線だけを右頬へとずらすと、鋭い刀が怪しく光っているのが見えた。

だが、藤乃の悪寒はその刀に対してでも、間近に迫る自分の死に對してでもない。

（なんて男！）

男の変貌ぶりはどうだろう。

確かに好青年であった。殿の前では！

（こんな男に大事な姫様を渡すわけにはいかない！）

殿はこの男の何を見ていたのか！

あれほどに尚姫をかわいがっていたというのに、それもこんな男の慰みものとするためだったというのか。

男のこの本性を見たとしても、平然と尚姫を嫁がせるというのか！？

野心の前では、父性も無力だということなのか！

（なんと、お可哀想な姫様……）

確かにお家も大事。

殿にも忠義はある。恩もある。

だが。

たとえ、この上総の国と殿が、扶の実家である常陸の源氏と対立したとしても、自分は。

自分だけは尚姫の幸せを選ぶ！

そりそり藤乃の右手が、自分の懐の短剣へと伸びる。その

右手は、扶から死角となって気付かれることはない。

「姫は私が、“大切”に慈しもう。安心して逝け」

背後から、狂喜に満ちた男の声が降りかかる。

チャンスは一度。藤乃は短刀を握る右手に力を込めた。

（この男は、私が一緒につれて逝きます）

すべては一瞬にかかっていた。

扶が刀を振り上げたのと、藤乃が勢いよく振り返り、力の限り短剣を突き出したのが同時。

まさかこんなに機敏に反撃される力が残っているとは予想もしていなかった扶は、完全に不意をつかれた。

だが、老いた藤乃の最後の思いは、寸前のところでかわされる。

扶は反射的に身をひねり、回避していた。

みるみるうちに、扶の表情が驚きから怒りへと変っていく。

そこからは、まるで時間が止まっているかのように、扶の一つ一つの動きがはつきりと藤乃には見えた。

再び、扶の刀が振り上げられる。冷たく光る切っ先が藤乃めがけて落ちてくる。

だが。

藤乃のどこにも恐怖は感じられない。

（尚姫様……役に立たぬ私をお許してください）

藤乃の顔が柔らかにほころぶ。

『藤乃ー！』

幼い頃の尚姫の笑顔が見える。その横で藤乃を呼ぶ、華姫の姿が見える。

（ああ……私は幸せにございました。姫様にお仕えして、本当に幸せ

にございました)

容赦なく振り下ろされる刀。

赤く染まる闇。

崩れ落ちる藤乃の……祈り。

願わくば、私の死が、姫に優しく伝わりますように……。

夢い夢が、ここに一つ、その役目を終えた。

(3)

部屋の外に控える女官の悲鳴で良兼の安眠は妨げられた。反射的に半身を起こす。

それとほぼ同時に何者かが無遠慮に寝室へと侵入し、目の前に仁王立ちした。

(刺客か!?)

恨みを買うには、身に覚えがありすぎた。寝込みを襲われるのはこれが初めてではない。とっさに、枕元に置いてある刀に手を伸ばす。

が、やっと頭に血がめぐってきた良兼は、眉間にしわを寄せる。本当に刺客なのか？ 刺客なら、こっそり来るものだ。わざわざ、標的を起こす暗殺者などいない。

わけが分からず、自分を見下ろす影を睨み返した。

「良兼殿。どうやら、女官の躰がなっていないようですよ」

「……扶殿か？」

「夜分に申し訳ない。だが、お知らせした方が良いかと思ってね」

闇の中に、扶の白い歯だけが薄気味悪く浮かび上がる。異様な空気をまとう扶の姿に、自然と良兼の眉間のしわが深くなる。

こんな男だったか？

戦場において、血の匂いにやられておかしくなる者を何人も目に

してきた。

だが、それとも何かが違う。肌を感じる危険。

「私が処分しておきましたよ。ほら」

扶が紐が何かで吊るされた、大きな石のような“何か”を、良兼のすぐ横に放った。

ゴト。

かなり重量を感じる音がした。

「……………」

良兼は言葉を失う。薄明かりの中、やっと慣れてきた目は、それが何か十分に判断可能になっていた。

紐だと思ったものは、ヒトの髪の毛だ。それも長い。そして……白髪まじり。

（まさか……藤乃か！）

扶は、まだぼたりぼたりと血の滴る老女官の頭部をぶら下げて、良兼の部屋に現れたということか。それは、悲鳴があるわけだ。

長い付き合いの女官だけに、さすがの良兼も胸が痛んだ。一方で、首だけになった忠臣を哀れむ心はまだ残っていたのか、と冷静にそんなことを思った。

それに、尚子を思うと……。

幼くして母を亡くした娘の母親代わりを勤めていたのは、この藤乃。

その藤乃のこんな姿を尚子が見たらどれほど胸を痛めるだろう。今、尚子は泣いているのだろうか。

「このものは、良兼殿を裏切っていたのですよ」

「……なんだと？」

「この者は、夜盗を姫の部屋へ引き込み、私を殴りつけ、縛り付けたのです」

「まさか、藤乃がそのようなことを……いや、待て。今なんと言った！？」

夜盗が尚子の部屋に押し入った！？

良兼は思わず、立ち上がり扶の胸ぐらを掴む。

「夜盗は尚姫を連れ去ったようです」

「何だと！？」

「そして、その夜盗に手を貸していたのがこの女官。まさか、良兼殿の指示ではありませんまい？ 夜盗に見せかけて、娘を保護し、私を殺そうと企んだ……とか」

扶はにたりと笑う。

隙あらば、この国は自分がのつとるぞと言わんばかりのその挑発に、良兼は口元をゆがめた。

見くびられたものだ。こんな若造に。田舎の豪族風情に。

「冗談にしては、できがわるいな。だが、女官のした非礼はわびる」

良兼は、扶の胸ぐらを掴んでいた手をはなすと、吐き捨てるようにそう言った。そして、部屋の外へと歩き出す。

その背中を目で追いながら、扶はくつくくつと笑った。

「冗談かどうか、楽しみにしていますよ、義父上殿」

良兼は、背後の扶にちらりと視線を向けたが、すぐに「誰かおらぬか っ！」と大声を発し、尚子の部屋へと足を向けた。

(……まさか……あの男の仕業ではないだろうな……)

死んだと聞かされた。川に落ちたと。

生きていたのか。

いや、しかし。生きていたとしても、なぜ戻ってくる。

わざわざ、この私の怒りをあおるためだけに、戻ってきたのか？
娘を奪い、宣戦布告のつもりか？

良兼は、大股で屋敷の西へと一步一步近づくとつれ、大きく膨らむ夜盗に対する怒りの中に、確かに、小さな喜びが忍び込んでいるのはつきりと自覚していた。

屋敷が異変に気づき騒ぎだしたところ、2頭の馬が、小さな村へと到着した。多くの働き手を惨殺されたその村は、それでも生き残った者たちによってゆつくりと息を吹き返しつつあった。

「ツネ婆！」

尚子は村の入り口で、落ち着きなくうろろする老婆の姿を見つ
け、わけもなく泣き出しそうになる。

馬から飛び降りツネ婆へ駆け寄ると、ツネ婆がその小さく折り曲
がった体をいっぱいに伸ばし、抱き止めてくれた。尚子の頭をなで
る、老婆のママだらけの手はどんな言葉よりもほっとした。

「けがはないかい？　どれ顔を見せてごらん」

微笑みながらツネ婆は尚子をのぞき込む。まるで別人のような優
しい声も、尚子の心に染みこんで目頭を熱くさせる。

「手首にアザができちまったね。怖い思いをしたんだね」

「……ツネ婆……」

「泣きたい時はお泣きなさい」

しかし、その優しさに甘えてはいけない気がした。だって……自
分はずっと村人を欺いてきたのだから。

「ツネ婆……私……ずっとみんなを騙していたの……。本当は屋敷の嫡男なんかじゃない。なんの力も持たない、ただの女なんだ」

父の権威をかさに、次期当主であると思わせ、期待させた。尚子の意図せぬところで、その見えない権威は村人たちから選択権を奪い、おそれさせていたはずだ。嫡子だからこそ、従ってくれた者だ。つていたはずだ。

「本当にすまない」

尚子が頭を下げた時、ついに一滴の涙がこぼれ落ちた。だがツネ婆はすぐに、尚子の頭をあげさせる。

「そういえば、姫様のようなかつこをしているねえ！」
わざとらしく、ツネ婆は声を張り上げた。

「ツネ婆……」
「ばかだね。そんなこと気にしてたのかい？ わしらは、わしらの命を救おうと、煤だらけになったり、わしらの食い物が少しでも増えるようにと、畑で泥だらけになる“良尚”というお人が好きなんじゃよ。だからこうして、お役にたてるのが嬉しくて仕方ないのさ」

老婆は尚子の細い肩を、ぽんぽんと叩き笑いかけた。尚子はつられて泣き笑いになる。

そこへ、それまで二人のやりとりを静かに見守っていた小次郎が、尚子の隣に歩み寄ってきた。

「準備はできているか？」

小次郎は強ばった表情をツネ婆に向ける。

しつかりしろ、泣いている場合ではないぞ。小次郎の横顔が尚子にそう言っている。

「もちろんじゃ」

「そうゆつくりもしてられない。見ろ」

小次郎は屋敷の方を顎で指す。

促されるままに、尚子は屋敷の方向を見やり、はつとなった。再び小次郎と視線を交わす。小次郎は小さく頷いた。

遠くにぼんやりと明るくうつしだされる屋敷。かがり火があちこちで炊かれている証拠だ。普段、寝静まったこの時分にはありえないこと。

「予定よりずっと早いな」

小次郎の頭に老女官の顔がよぎる。

屋敷の客人を縛り付けていたとあらば、無事では済まないだろう。尚子の為に、と本人からの申し出ではあった。だが、屋敷の女官を束ねる者として、何より、尚子をこのような見事な女性に育てあげた者として、自国に招き入りたい優れた人材だった。

正式な嫁取りならば、間違いなく尚子に同行させたものを……このような形で命を落とさせるとは……。

「真に惜しいことをした……」

小次郎は、屋敷の方を見つめながら何気なく呟いた。

尚子は訝しげにその顔を見上げる。必死にその横顔から、小次郎の思惑を引きだそうとした。

だが、それを察した小次郎は、心配するな、と笑った。気を反らすために、そつと尚子の肩を抱き、頬に口づける。

「……なっ！」

尚子は真っ赤になって口づけされた頬を手で押さえる。

ツネ婆のぼかんとした顔がまともに見れない。うつむきながら、小声で小次郎に抗議する。

「ひ、人前ではやめろっ！」

「何、恥ずかしがっているんだ？ 誰の目も気にすることないぞ？ 俺らが愛し合っているのを皆に教えてやればいい」

「あ、愛し合ってなどいないぞ、まだ！」

「……ああ、そっちの“愛し合う”をお望みなら、下総の国に帰ったらたっぷりと……」

にたりと笑った小次郎の顔が、再び近いてきたので、慌て両手で拒否しながら尚子は叫んだ。

「望んでないっ……！」

「またまた……」

「黙れっ……！ その前にそれ以上近寄るな」

今にも小次郎の唇が尚子の耳たぶに触れそうな距離に、尚子は気がでない。心臓が、飛び出そうなほど、高鳴って目が回りそうだ。もしかしたら自分は選択を間違えたかもしれない。いや絶対、は

やまつた！

これからずっと、毎日、毎晩、四六時中、小次郎にこうやってからかわれて生きていくなんて！

(……ま、毎晩！？)

思考の袋小路で、あの夜のことを思い出し、ますます赤面する尚子。残念なことに、自ら“袋のねずみ”に志願してしまったことに気が付いてない。

「おお？　なんか色つばい顔してる。これは許可がでた！」

「なっ……ばっ……やんっ……」

と、まともに抗議にならない尚子と、いよいよ調子にのりはじめ、もともと効きの悪い自制心ブレーキをあっという間に破壊した小次郎の脳天に、突如、鉄拳が振り下ろされた。

「ええ加減にせえっ！」

そういえば、ツネ婆は口より先に手がでるということを、すっかり忘れていた。尚子も小次郎も子供のように小さくなって反省するしかなかった。

「着替えたか？」

尚子のいる薄暗い小屋に小次郎が姿を見せた。普段の彼ならば「手伝おう！　むしろ俺がやる」と言いそうなものだが、流石に表情が強ばっている。緊張してるのだ。危機が迫っていることが見て取れた。

「これで村の若造に見えるか？」

小次郎の緊張を少しでもほぐそうと、着替えたぼろぼろの着物を見せるために腕を左右に広げた。小次郎の指示で、屋敷から着てきた紅色の着物と、村の若者の着物を交換したのだ。

「ああ。それで髪も縛ればどこから見ても“良尚”だ」

小次郎がかすかに頬をゆるませながら、尚子に一本のワラ紐を差し出した。それを受け取ると、後頭部の高い位置で髪を一つに結う。この髪型をすると自然に気持ちも引きしまるのだ。間違えても女言葉は出てこない。身も心も“良尚”という男になれる。

再び小次郎に全身を見せるように、くるとその場で一回転した。

「よし。今夜が最後の“良尚”だ」

「……最後？」

「俺の国では、ずっと尚子でいるんだから、“良尚”になる必要はないだろうが」

そうか。己の姿を偽って、生きる必要はなくなるのだ。

（好きなものを好きと言えるんだ）

そんな自由が、この上総の国の向こうにある。

「いくぞ」

尚子に小次郎の大きな手が差し出される。今度は尚子にも迷いがなかった。しっかりとその手を取る。

「ああ、いこう」

そして薄暗い小屋から、二人同時に、大きく一本を踏み出した。

小屋の外では、すでにツネ婆や十数名の村の男たちが集まっていた。

「良尚様！」

尚子の姿をいち早く見つけた鷲太が駆け寄ってくる。どうやら、尚子たちが出てくるのを今か今かと待ちわびていたようだ。

「来てください、良尚様!!」

まだ幼さの残るその笑顔は、誰もがつられて微笑んでしまう。驚太は尚子の腕を引っ張ってどこかへ連れて行こうとする。

「ちょ、どうしたんだ!　まて、驚太!　どこへつれて……」

転ばないようにしながら、引かれるままに一人の男の前へたどり着く。その男は、村人の和の中にあり、なにやら難しい顔で相談している最中のようなだった。

(……え……まさか!)

その男は尚子と驚太の気配に気がついて、こちらを振り返る。

「若!」

「松吉っ!」

二人は同時にお互いを認識した。尚子 は松吉に駆け寄り、思わず抱きついた。

「うおっ」

「無事だったのかっ!」

「……わ、若!　ちょっと勘弁してください!」

嬉しいような、おそれおおいような、そんな複雑な顔をして松吉は尚子を引きはがそうとするが、尚子はお構いなしだ。

「よかった、生きてて!!　もっと心配したぞっ!」

「わ、わかったから、若！ は、離れてくだせえ〜！！」

じたばたと暴れる松吉に、助け船を出したのは驚太だった。尚子の服を、背後から、つんつん、と引っ張る。尚子は松吉にへばりつきながら、驚太を振り返った。

「良尚様」

驚太が無言で指さした方向に目をやると、遠方に小さく、でもはつきりと小次郎の姿が見えた。今にも飛びかからんとする猛獣のような目つきでこちらを（松吉だけなのだが）睨み付けている。

反射的に、尚子は「うわっ……」と言いながら松吉の体から手を離れた。バランスを崩した松吉はそのまま、良い音を立てて地面に崩れ落ちることとなる。

一瞬で縮みあがるような身の危険を感じた上に、尻を強打することになった松吉からしたら、良い迷惑以外の何ものでもない。

「ひ、ひでえな〜若……」

松吉は尻餅をつきながら笑顔で、頭をぼりぼりとかいた。

「あ……すまん」

尚子は、松吉を助け起こそうとして、そこで初めて、異変に気付いた。

「松吉……その足……」

松吉の右足に、膝から下が見あたらない。尚子は、一瞬にして顔を曇らせた。

「ああ、あの騒動で、右足をもっていかれたのさ」
「そうだったのか……」

尚子はしゃがみこんで、松吉の右膝に、そつと手を添えた。

尚子の脳裏にあの日の出来事が鮮やかによみがえる。鮮血に染まった村、赤く燃え上がる炎。同時にあの時の感情までもが引きずり出され、尚子は胸をナイフでえぐられた感覚に襲われた。

尚子ですら、まだこんなに辛いのに。

松吉や鷺太、他の村人たちは、どれほどの痛みをかかえていたのだろうか。身体的にも、精神的にも。

(……守れなかった)

尚子の顔が、胸の痛みにゆがむ。だが、松吉はからからと笑って見せた。

「そんな顔なさるな。足が一本なくなつて、こうして生きていられる。それもこれも、若のおかげですぜ」

「……松吉……」

「さあ、さあ、笑った笑った。あんたがそんな顔してちゃあゝ、鷺太まで暗くなっちまう」

松吉は鷺太の手を借りて、立ち上がる。鷺太も彼に加勢した。

「良尚様は、いつも笑っていてください。そのためなら、何だってします」

「おつ。よく言った！ それでこそ、俺の息子だ！」

がはははつと松吉は笑い、小次郎の方へと器用に杖を使いながら

歩み寄った。

「さあ、話は尽きないが、時間がないんだろう?」

「そうだ。実は一刻を争う。追われている当事者が無自覚で困る」

したり顔で小次郎は腕を組んだ。

「よぉ〜言っわっ!　ところ構わずあの子にちよっかいを出しているのは誰だ」

隣から、蹴りと一緒にツネ婆のイヤミが飛んだ。

「はっはっは。さて、良尚。行くぞ」

逃げるように、小次郎は尚子の傍へと歩み寄ると、ひょいと担いで馬に乗せた。そして、軽やかに自分もまたがる。

「あとは任せる」

小次郎はそれだけ、松吉と鷲太たちに言うと、今にも馬を走らせようとした。

村人たちに、何をどのように任せてどう逃げるつもりか聞かされていない尚子は、慌てた。

「まって鷲太はどうするんだ!　それに鷹雄と藤乃は!？」

「……心配するな。後で追いつく。あいつらにも鷲太にも、別にやつてもらったことがあるんだ」

「嫌だ!　一緒にないと行かない!」

「よせ」

尚子は小次郎の静止を振り切って馬から降りようとするのを、力で制す。

「皆の気持ちを無駄にするな」

その声は、尚子の腰を抱き込む腕と同じように、力強く反論を許さない。

現実を見る。

何が皆にとって最良か、判断できないそなたではあるまい？
そう言われている気がした。

尚子は無言のまま、馬上の二人を見守る村人達を見回す。

『逃げてください。無事に』

『後は我らに任せて、幸せにおなりなさい』

『今度は、わしらが若を助ける番だ』

いくつもの瞳が尚子を見守っていた。一人一人の思いが流れこんできて、胸があつくなる。

「しっかり、皆の気持ちを受け取ってやるのも、優しさというものだ」

小次郎の声がふわりと尚子を包んだ。だから安心して、尚子は頷くことができた。

「みんな、ありがとう」

尚子に柔らかな笑顔が戻る。

「でも、約束してくれ。絶対に私のために死んだりしないと。父上に逆らったりしないと」

村人たちは、そろって首を縦にふる。

「若もですぜ。無事に逃げ切ってくださいよ。そして、また会いに来てください。お忍びは得意でしょう？」

松吉が答えれば、どっと笑いがおこる。

「言ったな、松吉！……わかった、また会いにくるから。だから、死んだら許さない。誰一人として、だ」

いつのまにか尚子にあの、暖かな眩しい笑顔が戻っていた。

ああ、太陽のようだ。

村人たちの誰もが、そう思った。この笑顔を守るためならば、何だつてしてみせようじゃないか。

「さあ、行くぞ」

小次郎の声に、今度は尚子も同じ方向を見た。暗闇の向こうにそれが尚子の思い描く自由の国が、浮かび上がって見えた気がした。

（大丈夫……行ける……私は一人じゃないから）

馬が秋風にのって走り出す。

尚子は村人が手を振る姿が見えなくなるまで、何度も振り返った。最後に、後ろを振り返った時、それまで木々で隠れて見えなかった“それ”が見えた。今まで、気にとめていなかったただけかもしれない。

「小次郎……見て……」

尚子がふるえる声で指をさした先に、小次郎が見たのは、大きな満月。ただの満月ではない。

「……なんて色だ」

「こわい……あんなに赤い月は初めて見た……」

低い位置に、まるで嘲り笑うように、妖しく赤色に光る満月があった。

小次郎は不敵に笑う。

何が言いたいのだ、天よ。やれるものならやってみろ、そう言いたいのか。

いいだろう。

受けて立とうじゃないか。

今の俺には出来ないことはなにもない。そう断言してやる。

「見てるがいい」

小次郎の低い呟きは、尚子の耳には届かず、馬の作る風に乗って後方へ消えた。まるで赤い月が飲み込むように。

「恐ろしいことの前兆でなければいいけど……」

対照的に尚子の顔は晴れない。

「なあに、恐ろしいことと言ったって、不運な父親が、才気溢れる将来有望な男に、器量よしな深窓の愛娘を強奪された、くらいさ。

おお、そうか、これが噂の駆け落ちだな。愛の逃避行ってやつだ！」
「ば、ばか！」「冗談を言っている場合か」

尚子に笑顔が戻ったところで、小次郎は真顔に戻った。

「そう、冗談を言っている場合ではない。馬を飛ばすぞ。舌を噛まないように黙っている」

馬の速度が上がる。尚子の好きな秋風も、尚子の心に立ちこめた暗雲を吹き飛ばすことはできそうもなかった。

しかし、すぐにその尚子の悪い予感、現実のものとなる。彼らにとつて一生忘れられない悪夢の夜が、静かに幕を開けようとしていた。

(6)

鷹雄が、滅びそこねたその村へたどりつたのは、尚子たちがその村を発った数分の後だった。

馬の嘶きを聞きつけたのだろう、数十名がわらわらと姿を現した。皆、手には農具を持ち、なにやら物騒ないでたちである。

「なんだ、あんたか」

ため息と同時に吐き捨てられた声には、聞き覚えがあった。この村のリーダー的人物 松吉である。彼を中心に、村は主従関係ではない、しかし、実に統制のとれた生活を営んできたのだ。これもひとえに松吉の人柄であると言えよう。ちなみに、影の実力者はツネ婆であるのは、いうまでもない。

「良尚様はすでに発たれたか？」

「ああ、まさに今さっきさ」

「そうか。すでに、屋敷では異変に気がついている。一刻の猶予もない」

淡々と語る鷹雄の言葉は、村人の肝を一瞬にして凍りつかせた。いよいよだ。日ごろのご恩を、命を助けられたご恩を、返す時がきたのだ。

松吉の喉がごくりと音をたてた。

「聞いたか、みんな！ 手はず通り頼むぞ！」

「おうよ」

「まかせろ！」

待つてました、といわんばかりに、村人たちは松吉にならって声を張上げた。みるみるうちに村全体の士気が最高潮に達する。

その中であつても、鷹雄は一人体温を低く保つ。村人の中に、小さな人影をみつけると音もなく歩み寄つた。

「準備はいいか」

大きなドングリまなこが、じつと鷹雄を見つめ返す。

その瞳の中には、先日までには感じられなかった、何かがあるように感じる。この小さな子供なりに、覚悟があるのかもしれない。

自分が何をすべきなのか。

今から何が起ころうとしているのか。

そして、命をかけて己の思いを貫けるかどうか。

とても、あの時、真つ赤な火の中に身を投じようとしていた、生気のない顔からは想像ができない良い顔をしている。

「いつでもいいよ」

「尚子様の着物はどうした」

「さつき、ちゃんといただいております」

「よし。ではいくぞ」

「はい」

いつの間にか、村人たちの視線は二人に集中していた。そのほとんどが驚太の身を案じるものであり、痛いほど村人たちの思いは彼に突き刺さる。

彼にとって、村人たちは初めてできた家族。生みの親のぬくもりを覚えていない驚太にとって、肉親と同じ存在。松吉もツネも、かけがえのない父であり祖母だった。

「大丈夫だよ」

鷲太は村人一人一人を、そして、最後に松吉をまっすぐと見た。

「良尚様のご命令だからね。僕は、死なないよ。死んだりなんかしたら、良尚様に蹴り飛ばされるもの」

ふわりと彼が笑えば、村人たちも自然とほほを緩ませる。

松吉だけが、こみ上げてくる熱いものを必死にこらえていた。

ああ、なんてやわらかい表情で笑うようになったんだろう。

じわりと、視界がにじんで、最後かもしれない自慢の息子の表情がゆがんでしまう。

「健闘をいのる」

鷹雄の声が親子の別れの時を告げる。

松吉は、必死に我が子の姿を目で追った。すでに、鷹雄と馬上にあり、尚子の紅色の打ちかけを頭からかぶっている。

鷲太と目が合ったとたん、松吉の顔がくしゃくしゃにゆがんだ。

これが最後になるかもしれない。

そう、鷹雄と鷲太の役目は　陽動。

先に逃げた小次郎と尚子の身代わりとなって、追っ手から“うまく”逃げなくてはならない大役だ。

行ってしまう。

まだ、あんなに幼いというのに、一番死に近い場所へ行ってしまう。

俺の息子が！

また、俺の息子が死んでしまう！

胸の奥から湧き上がる感情を言葉にしようと、松吉の口が動こうとした時。

『ありがとう、松吉さん』

再び鷺太が笑った。そう言ったように聞こえた。

「……………」

だめだ。行くんじゃない。

死んではだめだ！

喉まで出かかった言葉を。

今すぐ馬から引きずりおろしてしまいたい気持ちを。…………どうやって飲み込めばいいというのだ。

松吉は目の前の光景から逃げるように、天を仰ぐ。

気持ちを落ち着かせようと目を閉じれば、松吉のすぐとなりには鷺太がいるような感覚に襲われる。

鷹雄が、馬を蹴る音が聞こえた。

立ち込める土ぼこりの匂い。

馬が嘶き、だんだんと遠ざかる二人の気配。

風が、蹄の音を消し去る頃、松吉はそっと目をあけた。雲ひとつ無い夜空が、きれい過ぎてなんだが恐い。

村人たちが、解散していく中、松吉だけは、しばらく静かに夜空を見上げていた。

目にいっぱい涙をうかべながら。

「なあ、お多恵……」

松吉のつぶやきが空へとけていく。

まだだ。

まだ、鷺太を連れて行ってくれなよ。

さみしいかもしれないが。鷺太はまだダメだ。

「なあゝに、すぐに俺がそっちへ行くからよ……」

「

鷹雄と鷺太が村を出てからほどなく、屋敷でも準備を整えた兵士たちが尚子の搜索を開始したところだった。

屋敷の最高権力者、平良兼たいらのよしかねの命を受けた、腕自慢の男たちが我先にと屋敷から走りでていく。その追手の中には、良尚が日ごろから見回っていた近隣の村々の住人も多く含まれていた。むろん、松吉の村の住人の姿は一つもない。

手柄を立てて、良兼に取り立ててもらいたい。褒美を手にしたいた。小さな差はあっても、大方そのような思惑が村人を動かしているのだ。それも、恩義のある良尚と尚子が同一人物であることを知らないということが大きい。

彼らは、屋敷の姫が夜襲に会い誘拐された、としか認識がない。この姫が彼らの良く知る、あの笑顔の可愛らしい若者であると知れば、命に代えても取りかえそうと意気込んで搜索に参加したに違いなかった。

そんな搜索隊の姿を、険しい顔で見つめる人物こそ、この屋敷の主、良兼である。

「義父上殿」

屋敷の中から姿を現した客人に、良兼の顔が自然とこわばった。

「ああ、扶殿たすくか……」

「私も捜索に加わりましょう。未来の妻の大事ですからね」
「……それは心強い」

笑顔の扶にならい、良兼も微笑む。

（何をたくらんでる？）

表情には出さずに、良兼がそう思案をめぐらせていた時だった。

「申し上げます」

中年の男が良兼の前へと駆け込んできた。重臣の一人、市原次郎和兼であつた。

「姫様らしき人物を見かけたとの報告を受けました」

「なに！」

「隣村の男たちが、姫を乗せた馬が森のほうへ逃げていくのを目撃したとのことですよ」

「……森？」

良兼の眉間にしわが刻まれる。

森があるのは、将門の所領、下総の国とは逆の方向。

（どうということだ……？）

尚子をさらつたのは夜盗だったのか？

本当に将門は死んだのか？

しかし、それには解せないことがある。

あの藤乃が夜盗を尚子の部屋へ引き入れたという。そのようなこ

と、藤乃がするだろうか。

尚子を自分の孫娘のように、大切に慈しんできた藤乃だ。尚子のためなら、命を投げ打つても惜しくは無いというほどに。

その藤乃が、尚子の身を危険にさらすなんて考えられない。

すると、どれが真実なのか。

藤乃の手引きした夜盗が、尚子を拉致した。その後、藤乃が扶に無礼打ちにあった。

（果たして……）

良兼は、隣で立ち静かにことの成り行きを見つめる客人を、ちらりと盗み見る。

どっちにしても、この男の吐いた言葉の中をすべて信じる気には到底なれそうも無い。良兼から深いため息がこぼれた。

「それは本当に尚子なのだろうな？」

「村人の話によりますと、高価な紅の着物が見えたとのことですよ」

「……紅か。確かに尚子のに違いはない」

「何かご懸念でも？」

「……いや、よい。して、夜盗の数は？」

「それほど多くは無いようです。しかし、女官が手引きしたのならば、数名で事足りますゆえ、うまくいけば朝まで気づかれずに、海の上まで逃げられると踏んだものと思われます」

「うむ」

たしかに、つじつまは合う。だが、それは本当に夜盗なら、の話だ。

（いかな。どうしても、あの男が死んだとは思えん。殺しても死なんようなあの良将の息子だ）

いつの間にか良兼の顔に不適な笑みが浮かんでいた。

良兼は不思議と気分が高揚していたのだ。が、すぐさま隣の扶から水をさされることとなった。

「では、私とその隣村の近辺を搜索することにしましょう」

「いや……もう、その村の近辺にはいないだろうよ」

「その村人たちがかくまっているなんてことも、あるかもしれませんよ　尚姫と私の婚姻を快く思わない人物の命で、ね」

今度は扶が良兼に向かって、にやりと笑ってみせた。それを見た市原和兼が、反射的に声を荒げた。主を馬鹿にされて黙ってはられない。

「無礼であろう！　いくら源殿でも、言っていないことと悪いことが

ありましよう！」

「和兼、かすかね控えよ」

「しかし！」

「控えよ」

家臣を静止ながらも、良兼の胸の中で一気に湧き上がった怒りは収まらない。だが、良兼がそれを表に出すことは決してしない。するつもりもなかった。

良兼は、冷ややかに告げた。

「何を疑っておるのかは知らぬが、こちらはまったく身に覚えのないこと。しかし、確かめたいことがあるというならば、好きにするがよい」

「お許しいただき、かたじけない。では」
「……」

良兼はほどなく、さっさと自分の兵を連れて屋敷を後にする扶の姿を目にすることとなった。

ついに、搜索隊があたり一帯に放たれた頃、屋敷からそう遠くない森の中で、青年は馬を止めた。そして、自分の胸の中に包むようにして、ここまで連れてきた少年に視線を落とした。

少年は金糸の刺繍が施された紅の絹の着物を頭からかぶっていて、その表情を伺うことはできない。

「よし、このあたりで時が来るまで待機だ」

青年が声をかけると、少年は体をひねるようにして、こちらを向き、絹布の間から大きな目をのぞかせた。

「鷹雄様……この子をどこかで逃がしてやりたいのだけど」

少年はふたたび身じろぎ、胸元から白い猫を少しだけ青年に向ける。青年の顔がわずかに曇った。

「つれてきたのか……」

「置いていけなくて」

賢く、聞き分けの良い子だから忘れていたが、まだまだ元服（男の子の成人式。ただし当時は十五歳前後で行う）前の子供。まさか、

自分たちの命の保障もないというのに、猫の身を案じて一緒に連れてくるとは、さすがの鷹雄も想像しなかったらしい。

「森に置いていっても、野犬に食われるだけだ」

「え……！」

猫を抱く鷺太の腕に、思わず力がこもった。

「……では、一緒に逃げます」

許可を求めるように、少年は上目づかいで鷹雄を見た。

鷹雄きつと、邪魔だから置いていけ、と言うに違いない。

（どうしよう……こんなことなら見せなきゃよかった……）

今がどんな状況なのか、十分わかっている。こんなところに猫を連れてくるなんて、浅はかだったのも自覚している。

でも、置いて行けない。それだけはできない。

「……」

その強い思いを鷹雄が汲み取ったのかどうかはわからない。だが、鷹雄は小さく息を吐くと、無表情のまま言った。

「姫様の猫だ。おまえが、姫様にちゃんとお返ししろ」

鷺太の顔がぱあつと明るくなる。彼には珍しく鷹雄の声が明るかったように聞こえたのだ。何だがうれしかった。だから、鷺太は力づよくうなずき、心に誓う。

（絶対に、姫様の所へ帰るんだ。ゆきしろと一緒に、僕は帰るんだ）

心の中で言い聞かせた。

すると、頭の中に直接聞こえるように、若い女性の声が響いてきた。

『来たわ！』

鷺太は、はっとして腕の中の白猫を見た。白猫は斜め後方をじっと見つめていた。

目を凝らして、その視線を追っても、鷺太には何も見えない。聞こえない。

鷹雄も何も感じていないようだ。

獣の聴覚は人の何十倍も敏感だと、松吉が言っていたことがあった。きつと、この白猫には、人には聞こえない、遠くから近づく追っ手の足音が聞こえているのだろう。鷺太はそう納得した。

（協力してくれるの？）

鷺太は、心の中で猫に話しかけた。猫にはそれが聞こえたらしく、首をひねり、鷺太を見上げた。

『あんたたちと心中するのはごめんよ。置いていかれて、犬に食われるのはもつとごめんだわ』

（ありがとう。どっちに逃げたらいい？）

『あっちからは気配を感じない』

猫は斜め前方の木々の中に、顔を向けた。

「鷹雄さま、物音がします。あちらへ逃げましょう」

「！」

鷲太が背後へ逃げるように指さしたので、鷹雄はすぐさま馬を反転させた。あたりの気配を探るも、やはり何も感じなかったらしい。鷹雄がいつもよりもわずかに険しい表情で鷲太を振り返ったため、鷲太は彼のその鋭い瞳に説明を求められた。だが、猫がそう言っている、などと説明するわけにもいかない。

「信じてください。あちらへ、さあ早く！」

一瞬、考えるように鷹雄の視線がゆれたが、すぐさま鷲太の言葉に従うことにしたらしい。すでに鷲太の不思議な力を目の当たりにした鷹雄には、鷲太の言葉を信じるに足る何かがあったようだ。鷹雄は馬を鷲太が指さす方向へ進めた。

時折、猫の指示により方向転換が行われたが、しばらく二人と一匹は無言であたりをさまよった。

虫の声が大きく聞こえた。かさかさと、草木が揺れる音が、なんとも不気味だ。すでに暗闇に目が順応したとは言え、突然、獣が出てくる危険は多分にある。

もちろん、出てくるのは獣だけではないというのは、追われる立場ではしかたのないこと。そんな緊張感が鷲太の喉をからからにさせた。

鷲太は、恐怖を紛らわすために、今まで気になっていたことを問うことにした。心の中で、猫に声をかける。

（ねえ、聞こえてる？）

『邪魔しないで。気が散るわ』

間髪いれずに、苛立ちのこもった女性の声が返ってきた。胸元を覗けば、白猫の小さな三角の両耳が、右に左にと小刻みに動いていた。どうやら、猫は周囲の音を逃さないように、気を張っているようだ。

（君は、ただの猫じゃないよね）

『……猫だったわ』

（……どういう意味？ 今は猫じゃないの？）

『何に見えるというの？』

猫の返事は冷たい。しかもよくわからない。
驚太はあきらめなかった。はつきりさせておきたいことがあったからだ。

（君は、いつからその不思議な力を持っているんだい？ だって、人と話せる猫なんて、僕は初めて見たよ）

『人と話せるですって？』

嘲笑を含んだ声が、返ってきた。

ちらりと猫に視線を落とすと、二つの瞳がこちらをしっかりとらえていた。暗闇の中にあつて、はつきりとその存在がわかるほど、怪しく光る猫の目。

『私は、おまえよりもはるかに長く、この地で生きてきた。あの娘の父親がこの地に居つくそのはるか前からずっとだ。けれども、こうして私の声を聞き取った者は一人もいない』

突然、猫の声が低く太いものになったので、鷺太は一瞬驚いた。しかも、心なしか語尾に含みのあるような言い方だった。

（じゃあ、なんで僕は聞こえるの？）

『それは、あんたが一番よくしってるでしょう？』

再び、猫の声が若い女性の声に戻った。

最近わかったことは、この猫は、かなり喜怒哀楽が激しいということ。

そして、その感情によって、鷺太の頭に送ってくる声がまるで違うということ。

若い女性の声の時もあれば、今みたいにまるで良兼のような中年の男の声の時もある。初めて猫の声を聞いたの時は、子供のような声だった。

いったい何種類の声を持っているのだろうか。まるで、この猫の体の中に何人もの人が住み着いていて、交代で出てきているみたいだと、鷺太は思った。

それにしても、少しは聞き手のことも考えてほしい。鷺太はこっそり顔を引きつらせた。

（わからないから聞いているんじゃないか……つまり、君の声は僕にしか聞こえないんだね。じゃあ、なんで聞こえるんだろう。僕はてっきり、君の不思議な力で声を出しているのかと思っていたよ……）

ふう、と思わずため息がこぼれた。すると、さもおかしそくに娘の声で猫が言う。

『あんたに比べたら、私の力なんてちっぽけなものよ。私に“あんな”力はないわ』

（えっ！？）

『な〜に、あれも私がやってると思ったわけ？』

猫の口がわずかに横に開いた気がした。見ようによっては、にやりと笑っているようにも見えなくない。鷺太の全身を鳥肌が駆け上がる。

『確かに、見た目はその男と同じように見えるけど、あんたはその男とはぜんぜん違うよ』

猫が鷹雄のことを言っているのは、すぐにわかった。だから、思わず体ごとひねり、鷹雄を見上げてしまった。何も知らない鷹雄は、眉をひそめて鷺太を覗き込んだ。

「また何か聞こえたか？」

鷺太はあわてて、首を横に振ると、ふたたび前を向いた。猫と再び視線が合う。しかし、すぐに猫は鷺太から視線をはずし、また前方を向いてしまった。

（……僕は……君と同じなの？　つまり……普通じゃない……？）
『普通？　何をもって普通というのかわからないけど、今、目に見えているこの姿が器にすぎないという意味では、普通ではないわね。でも、私とあんたとは、大きく違うわ』

鷺太の喉がごくりとなった。

（何が違うの？）

『あなたは……　しまったっ！　囲まれたわ！』

猫は、落ち着きなく耳を動かしはじめた。鷺太もはつとして、背後の鷹雄に声をかける。

「鷹雄様！ 囲まれたようです！」
「何！？」

鷹雄は手綱を引き、馬を止めて、あたりを見回す。やはり何の気配も感じないのだろう。何度も首を回転させ、必死に周囲の様子を探ろうとしていた。

『どの方角からも足音が聞こえるけど、あっちが一番、数が少ない』

猫が示したのは、屋敷の方角だった。屋敷からの追ってだというのに、なぜ屋敷の方角が手薄なのだろう。鷺太は首を傾げなくなつたが、とにかく、これを鷹雄に告げた。鷹雄は今度は迷うことなく、鷺太の導く方角へ馬を走らせた。

『こつちへ向かってくる。もうすぐ鉢合わせするわ』
「この先にいるようです」

片手で胸の猫を抱きしめ、もう一方の手で馬から振り落とされないうちに必死に馬にしがみつきながら、鷺太は猫の言葉を鷹雄へ通訳した。

猫は鷹雄の発する言葉が聞こえているらしかつたので、多少まどろっこしさが半減されていた。

「どのくらいわかるか？」
『十人はい。いえ、もつと多いわ』
「えっ、そんなに！？」

思わず、鷺太は声に出してしまい、鷹雄が眉をひそめた。だから慌てて言い足す。

「あ、えっと、十人以上だそうです。じゃなかった、いるようです」
「……人数までわかるのか？」

距離を聞かれていたのか、と猫と鷺太は同時に心の中で舌を出した。

その時だった。

「いたぞーっ!!」

前方から男たちが駆け寄ってくるのが見えた。猫の言うとおり、その数は十四名。手にしていたのは、刀ではなく農具であることから、このあたりの村人のようだ。これは鷺太たちにとって、大きな救いの手となった。

なぜなら、村人たちは姫を見たこともなければ、会ったこともない……ことになっている。

屋敷の近隣の村々によく出没した、泥だらけになって走り回る自称当主の息子は、良尚という少年として認識されている。だから村人たちは、姫の背丈も、顔も、声も、何一つ知らないのである。

これは、うまくいけば、一人も殺さずにすむかもしれない。鷹雄は瞬時に、そう思案をめぐらせていた。

「うまくやれよ」

背後から、鷺太にしか聞こえないで、鷹雄がささやく。鷺太が小さくうなづくと、鷹雄は懷から短刀を取り出し、鷺太に向けた。

「それ以上寄るんじゃない。姫を殺すぞ」

その声だけで、喉元を引き裂かれるのではないかと思うほど、鋭い声が鷹雄から繰り出された。村人たちは、いつせいにビクツとなつて怯み、その足を止めた。

うす暗くてよく顔が見えないとは言え、鷹雄の演技は完璧だった。誰も演技だと気づいていない。正直、鷺太は彼の演技力と、そのなりきりぶりに腰を抜かすほど驚いていた。

普段、冷静沈着で、感情表現といえば眉を動かすぐらいの鷹雄が……鷺太にだって、別人にしか思えない。

村人たちだって、良尚に扮した尚子の従者である鷹雄の顔は何度か目にしているはずだ。印象に残らない影の薄さは尚子がまぶしすぎるだけで、鷹雄のせいではない。

しかし、この変わり様では鷹雄だと気づく者はいないだろう。

(……尚姫様が、おなか抱えて笑いそう……)

そんな不謹慎なことを考えながら、鷺太は紅の絹の隙間から村人たちの様子を伺っていた。

「武器を置け。早くしろっ!」

鷹雄が怒鳴る。村人たちはお互いの顔を見合わせて、様子を伺っているが、誰も武器を手放そうとはしない。

『あまり、もたもたしていると周りからどんどん追っ手が集まってくるわ』

猫の声を受け、鷺太は少し高めの声を張上げた。

「武器を置きなさい! 私のために死んではならない」

静かに鷹雄は驚いた。声は尚子には似ていないが、確かに、尚子が言いそうな言葉だ。

しかし、驚太の機転を利かせた助け舟を受け、鷹雄はさらに声を荒げる。あまり時間がないのは、鷹雄も状況からして察していたのだ。

「勝手にしゃべるんじゃないっ！ そのお綺麗な鼻を削がれたくなかったら黙っているっ！」

鷹雄の短剣が驚太の鼻の下の皮膚、すれすれのところで止まった。

（ほ、ほんとに殺されそう……）

そう思ったのは驚太だけではなかったようで、尚子に扮した驚太を心配した村人たちは、しぶしぶ武器を鷹雄の方へ放り投げはじめた。

こっそりと、驚太は胸をなでおろした。このままやり過ごせる。そう思った。

しかし、すべては遅すぎた。

『だめ、間に合わない！』

猫の悲痛な叫びが驚太の頭に飛び込んでくると、別の男たちが走りこんでくるのが同時だった。

「そこまでだ！」

鎧を身にまとった中年の男と、その従者二十名近くが、驚太たち

の側面から現れたのだ。

さっと、従者たちは鷺太たちを取り囲むように並び、一斉に矢を向けた。なんとか上手くやり過ごせるだろうと思っていた二人は、一瞬にして死の淵に追い込まれたのだ。

「姫を渡せ」

鎧の男が、戦況の優位からか、それとも元々からなのか、えらそうに言った。

この男には、鷹雄は残念ながら見覚えがあった。良兼の重臣の一人、佐貫五郎高重である。鷹雄が静かに佐貫高重をにらんでいると、徐々に高重の眉がためられていく。

「お前……たしか……」

小次郎を“見送る”際に、鷹雄は彼に従行したばかりだったから、佐貫高重も鷹雄の顔にかすかに覚えがあったようだ。

（……鷹雄様のお知り合い？）

鷺太のどがごとりと音をたてた。鷺太にむけられた、短刀を握る鷹雄の手に小さいながら動揺が感じられたからだ。

「絶対にしゃべるなよ」

鷹雄の低いささやきが、ますます鷺太の緊張を煽った。

「おまえ、これはどういうことだ。姫の格別なお取り成しで、お側に仕えていたのではないのか！」

男の顔がみるみるうちに怒りに染まっていく。

「恩をあだで返すとはっ！！ やつを射殺せっ！ 矢を放てっ！！」
「なりません、姫が……」

完全に頭に血がのぼった中年男に、従者のほうがあわててそれを制した。

「そうじゃった、打つな打つな！ 姫に怪我をさせたら打ち首じゃぞ！」

なんて勝手なんだ、という従者のぼやきが聞こえてきそうだな、と鷲太は内心苦笑した。が、かすかにあった、その余裕もすぐに吹き飛ぶこととなった。

鷲太の視線と佐貫高重の視線が、静かに交差した。

(9)

「ん、待て」

鷲太はさつと顔を下に向け、絹の中に隠した。

(ばれた……！？)

かしゃかしゃと鎧の音を立て、男が近づいてくる。

「近づくな！ それ以上近づけば、姫がどうなっても知らぬぞっ！」

鷹雄の威嚇も、まるで意味をなさなかった。物ともせず男は近づいてくる。

「姫……私でございます。もう心配いりませぬぞ」
「聞こえないのかっ！ 佐貫殿っ」

鷹雄には、この男の狙いがわかっていた。

姫に声をださせようというのだろう。自分の名前がわかるか、答えてみる、と挑発しているのだ。尚子ならば父の重臣の名を知らぬはずはない。

そう、佐貫は明らかに、紅布の下に隠れる人物の正体を探ろうとしていた！

だから、鷹雄はわざと男の名を口にした。鷲太に、男の名前がわかるように。

しかし……。

鷹雄は悔しそうに唇を噛んだ。

鷺太に声をださせるわけにはいかない。いくら、鷺太が女性のよ
うな高い声が出せたとしても、重臣まではごまかせないだろう。本
人でないことがばれたら、終わりだ。

どうする。

どうしたらいい。

鷹雄の迷いが、佐貫の鎧を軽くさせているのだろうか。彼の歩み
は勝者の優越感に満ち溢れていた。

一步一步近づいてくる佐貫。

鷹雄の視線が、鷺太と佐貫との間をさまよう。

どうしたらいい。

何か。何か策は！

考えろっ！

そう考えれば考えるほど鷹雄の行動にブレーキがかかる。鷹雄が
何度目かの口火を切ろうとした瞬間、彼より早く幼子が思い切った
行動に出た。

「従え、佐貫！」

鷺太はできる限り、短く答えた。しかも、尚子のように威勢よく、
ドスをきかせて。

鷹雄は内心、よしっ、と叫んでいた。やはり賢い子供だと。ひょ
っとすると、ひょっとするかもしれない。

なぜなら、鷺太が一瞬しか声を発しなかったため、女性の声とし
かわからなかった佐貫は、「はっ」と反射的にその場でひれ伏し

たのだ。それを見た従者たちも、佐貫に習い、あわててひれ伏した。ひれ伏しながらも、佐貫はわずかに首をかしげた。そんな声だっただろうか？

「どけっ！」

鷹雄は間髪入れずに、声を張上げた。考える隙を与えるわけにはいかない。

すると今度は、従者たちは一斉に左右に分かれ、鷺太たちのために道をあけた。

鷹雄は、逸る心を抑えながら、堂々としても手早く馬を進ませる。走り出した馬が、佐貫の前を通りすぎた、ちょうどその瞬間。佐貫は目の前にはためく紅色の着物の袖をつかんだ。

「あっ」

鷺太の声とともに、破けた着物の袖。その反動で、頭から絹布が滑り落ち、月下にさらされたその幼い素顔。

思わず振り返った鷺太は、佐貫の鋭い視線にとらえられた。

かなりの速度で馬が佐貫の前を通過したというのに、まるでそこだけ時が止まっているかのように見えた。

鷺太を見つめたままの佐貫の口端が、だんだんとつり上がっていき、微笑に変わった。

見ツケタゾ……。

そう佐貫の口元が動いたような気がした。

鷲太は全身があわ立つような寒気に襲われた。あわてて前に顔を戻す。

「鷹雄様！」

「このまま逃げ切る！ 飛ばすぞ」

だが、さして馬を進めることができないうちに、白猫が悲鳴を上げた。

『前からくる！』

「えっ」

小さく鷲太は声を上げた。

「どうした！」

鷹雄がちらりと鷲太に視線を落とした時、前方から大群が現れた。あわてて鷹雄が手綱を引くと、馬は甲高く嘶き、前足を空中でばたかせた。

鷲太は振り落とされないように、馬のたてがみに必死にしがみついた。

そのわずかな間に、追っ手は二人の側面にも回りこみ、とり囲んでしまった。

先ほどとは比べものにならない追っ手の数に、鷲太は息を呑んだ。さすがの鷹雄も、死に絶える自分の姿が頭をよぎる。

『どんどん集まってきた。後ろからも、さっきの追っ手がもつすぐここへたどり着くわ』

（ええっ！？ どうしたらいいんだ！）

鷺太はすぐるような思いで、胸元の白猫を見た。

『知らないわよっ！』

（そんなあつ）

鷺太が情けない顔し、猫は牙をむいて、そんな彼をにらみつけた。その直後、何かを感じとった白猫が勢い良く首をひねって、再び前を向いた。鷺太の視線も自ずと前方へ導かれた。

「見つけたか」

低い声が聞こえたかと思うと、鷺太の視線の先にいた男たちが、さつと道をつくり、馬にまたがった一人の男が姿を現した。

男は見るからに上等な着物を身にまとっていた。物腰も優雅で、長年の間に染み付いたものであることがわかる。

鷺太には、薄暗い森の中だというのに、それが誰だかすぐにわかった。このような田舎で、都人のような振る舞いができる人は一人しかない。

「参ったな。総大将がおでましとは……」

鷹雄のつぶやきが、鷺太の頭上から零れ落ちてきた。

「お前、鷹雄とか申したな」

「……」

良兼の刺すような視線が鷹雄を突き抜けた。これが彼でなければ、恐怖で息が止まっていたかもしれない。

「尚子を奪還した、というようには見えないが。お前が尚子を拉致したのか？」

静かに、しかし、全身から湧き出る怒りを帯びた良兼の聲が、ますます驚太を震え上がらせた。

「なぜ答えぬ」

表情を変えずに、良兼に対峙する鷹雄だった。

その堂々たる姿は、内心、良兼を喜ばせていた。

このような状況下にあっても、臆することなく自分と対等に渡り合おうとする、その度胸は見上げたものだ。

それは、やはり命を張っているからこそ。そして、命をかけても成し遂げようとする、内なる思いがあつてこそ。

やはり、目の前にいるのは尚子ではない。尚子の着物をかぶっている偽物にすぎないのだ。

当然、盗賊も虚言。

この男が、尚子を連れ出し、盗賊の仕業とみせかけ、さらに、追っ手の目を欺くために陽動していたことは明白。

ならば、何のために。

誰のために。

目的は何だ。

良兼は、そこまで考え、ふっと笑った。

「……あの男か」

最初から、良兼の本能がそう言っていたではないか。

あの男が、そう簡単にくたばってくれるものか。

そして、大人しく帰っていくものか、と。

「答えよ。尚子は、将門が連れ去ったのだな」

良兼の目に、隠しきれない怒りが灯った。怒りだけではない。この手で甥の首をはねるまで、くたばるわけにはいかない。そんな、生気があふれてくるようだった。

だが、鷹雄は、眉一つ動かさない。それが、何よりの肯定だと、良兼は受け取った。

そんな無言の激戦が繰り広げられる中、にわかに不屈き者たちの背後が騒がしくなり、良兼の重臣が馬で駆け込んできた。

「殿！ こやつは姫ではありませんぞっ！」

息を弾ませながら叫ぶが、良兼はそちらには目もくれず、ずっと鷹雄から目をはなさない。

サワワ……。

秋風が歌う。良兼の頭上に茂る葉が揺れ、良兼の瞳が不気味に光る。

殺すには惜しい。

その良兼の目が鷹雄に問う。

さあ、どうする。わしに仕える気があるか？ ならば命だけは助けてやってもよいぞ。

鷹雄は何も言わない。主人を変えるつもりは毛頭ない。

しかし、ここで死んでやるには、不安が残る。

あの将門が、本当に姫をまかせるに値する男なのか。まだ、見極めきれていない。

どこか危うさが見え隠れしている気がして、いつか姫の命を危険にさらすのではないか。そもそも、良兼の人質として姫を連れ去っただけなのではないか。そんな懸念が断ち切れない。

だが、完全に、鷲太たちは包囲されていた。逃げる場所も、またその方法も思い浮かばない。

鷹雄は視線を動かさずに、腕の中にいる少年に意識を移した。

この少年が死んだことがわかれば、姫は胸を痛める。ただでさえ、老女官、藤乃の死が姫の心を切り刻むのは必至だというのに。

どうか、この少年だけでも彼女の元へ届けたい。藤乃と自分の思いを、彼女に伝えてほしい。

いつしか、完全に思考回路の袋小路で立ち尽くす鷹雄の心中など知るはずもない少年は、小さく震えながら、ことの成り行きを見守ることしかできないでいた。

鷲太がどこを振り返っても、従者たちが構える矢や槍、刀の切っ先が、冷たく光っている。

幼い頭では、さすがに動揺を押さえ込むことはできそうもない。

どうしよう。
どうしたら！

そればかりが頭の中を往復している。

それぞれの思惑を覆い尽くす、重い沈黙が流れた。

鷲太はごくりと生唾を飲み込んだ。心臓の鼓動が、徐々に大きくなり、緊張が最高潮に達する。

この場の支配者は、表情を変えずに、終結の訪れを告げた。時間切れだ、と。

「やれ」

一切の抑揚もなく、わずかな期待と共にはき捨てられた良兼の言葉が、鷲太の心を貫いた。

死を目前にした恐怖で、馬を反転させ立ちさるうとしている良兼の姿を、目で追うことしかできない。

すべてをまかされた佐貫が片手を挙げ、その指示を見た従者たちは一斉に矢を構えなおした。

一呼吸おいた後、佐貫の声が響きわたる。

「放てっ！」

鷲太は反射的にぎゅっと目をつぶるのと同時に、鷹雄が鷲太を庇うように覆いかぶさる。

（姫様——っ！！）

次の瞬間、矢の雨が美しい放物線を描き、二人に降り注いでいった。

それを最後に、鷲太の記憶は途切れた。

扶は、馬にまたがったまま、僅かに首をひねり、あたりを見回した。彼の従者たちが手にしているたいまつで照らし出された村は、不自然なまでに静かに感じられた。

何かあるな。扶は腕をくんで、顎をさすった。

「つれてまいりました！」

声に導かれるように、家臣が連れてきた片足の男に扶の視線が移っていった。

その男はなんともみすばらしい姿をしている。髪も鳥の巣のようにボサボサであったし、着物もあちこちが破れ、近くに寄れば不快な匂いが漂ってきた。

扶は、汚いものを見るように顔をしかめ、再び視線を男からはずした。

「お前か、尚姫が連れ去られたのを見たというのは」

「へえ。確かに見ましたぜ」

男は、地面にはいつくばって、大きすぎる声で答えた。

「盗賊はどこへ向かったのだ」

「あっちです」

扶の質問に、男は額を地面にくっつけたまま、森の方を指差した。

「ほう」

扶は、男の指差す方へ首を動かすと、薄気味悪い笑みを浮かべた。

（まるで、口裏を合わせたかのような物言いだ）

不意に沈黙が訪れたため、片足の男、松吉は顔を少しだけ上げるようにして、恐る恐る扶をうかがった。その松吉の視線が扶の顔に到達する前に、身が縮み上がるほど不気味な扶の笑顔は、ずっと消えていた。

二人の目が合い、松吉は慌て額を地面にこすりつけた。

「時に、この村は盗賊に襲われたそうだな。生き残ったのはお前だけか？」

松吉には、話が変わると同時に、扶の声が優しくなったような気がした。松吉は、思わず顔を上げた。

「いえ、何人かありますが。ほとんどはやられました」

「そうか。盗賊も、むごいことをする。女たちは無事か？」

扶は、心から胸を痛めているような顔を見せた。いつの間にか、松吉の肩から力が抜けていることに、本人は気が付いていない。松吉はすつと多恵のやさしい笑顔を思い出し、顔をしかめた。

「ほとんど殺されたか、連れていかれました。おらの妻も……」

「そうか。私の国でも、盗賊は後を絶たない。国を統治するものと

してふがない思いだ。そなたたちだけでも、無事でよかった」

扶はふわりと微笑んだ。それを見た松吉は、あれ？ と思った。
このお人は、なかなか良い人なのかもしれない。隣の国のエライ人で、良尚を連れて行ってしまう悪い奴だと、息子は言っていた。
鷲太の言葉を疑っているわけではないのだが……。

「もつたいないお言葉です」

内心、首をひねりながらも、松吉は再び、自分のひたいが地面に付くまでひれ伏し、敬意を表した。

「ところで、この村だけ、なぜ全焼を免れているのだ？ 近隣の村々では、盗賊の被害にあえば、村ごと焼き払って全滅だという。誰か、村に腕の立つものがおったのか？」

「へえ。それが、村に偶然訪ねてきた男が、盗賊を追い払ってくれたわけであります」

「訪ねてきた男？」

扶の眉がぴくりと動いた。

「どんな男だ」

扶のまとう、空気の色が変わった。

松吉は、それを肌で敏感に感じ、一瞬で悟った。

（しまった、この話をしてはいけなかった！）

地面を見つめたままの松吉の目が泳ぐ。

「いや、すぐにおらは氣を失っちまったので、わからんですわ」

「では、なぜ、その男が追い払ったことをしている」

「……」

松吉は言葉に詰まった。話はまずい方へまずい方へと進んでる。

あの日のことは、すべてを見ていたツネ婆に聞いたのだが、それをこの男に話せば、追求の矛先がツネ婆に移ってしまう。老婆をそんな危険な目にあわせるわけにはいかない。

「なぜ、答えぬ」

松吉は、体を起こし、とぼけ顔で頭をかいた。

「どうだったかなあ。思い出せんのですわ。いや、すまねえ、おらも年だで、堪忍して下せえ」

だが、扶は実に頭のキレる男だった。松吉の口さきだけの演技でごまかされるような男ではない。扶には、それだけで十分、だったのだ。

「……あの男がここに来たということか」

扶の顔が、にやりとゆがむのが松吉には見えた。松吉の胸が嫌悪感にざわめいた。

これは同じ人なのだろうか。先ほどの柔らかな笑みはどこへ消えたというのだろう。やはり、息子の見立ては間違っていなかったのだ。

「おい」

扶はそばに控えた家臣に声をかけた。家臣は、小さく返事をし、扶の前に進み出た。

「村人を一人残らず、引きずり出せ」

松吉ははつと息を飲んだ。

（な、なんだと！？）

従者たち二十余名ほどが、一斉に主人の元を離れ、村の小屋という小屋を搜索し始めた。

隠れていた村人たちが、次々と扶の足元へと引つ張りだされていく。わめき散らす者、抵抗する者。その中に、二人がかりで担ぎ上げられているツネ婆の姿もあつた。ぎゃあぎゃあと、なにやら叫んでいる。

村はあつという間に、騒然とした。

「これで全部か」

冷やかな扶の視線が、無理やり地面に押し付けられた十数名の村人たちへと、投げ下ろされた。

扶は流れるような動きで馬からおり、近くでたいまつを掲げていた男の手からそれを奪うと、村人たちの背後へ足を進めていった。

村人たちは皆、胸騒ぎを覚え、体を低くしたまま、体をひねり、

食い入るように扶の一挙一動を目で追っていた。それだけ扶の笑みは、彼らに強大な不安と恐怖を植え付ける力を持っていたのだろう。先ほどまで、この笑みは扶の優しさを反映しているものだとばかり思っていた松吉も、もう騙されない。

どこをどう見ても、この男が従えているどす黒い空気は、松吉に危険を訴えている。

松吉がこれほど全身で恐怖を感じたのは、生まれて初めてだった。肌がぴりぴりとして、産毛が逆立つようにさえ感じ、背中を冷たい汗がすつと落ちていく。

じゃり。

じゃり。

まるで、扶の足音だけが、その場で唯一の音源であるかのようにだった。

扶は、その場から最短距離にあった小屋の前に立つと、一度村人たちを振り返った。

松吉と扶の視線が交わる。

(まさか……)

扶の顔に、にたりとしか表現できない笑みが浮かびあがった。扶の腕がじわじわと伸ばされていく。

松吉は扶の顔と、右手に握りしめられたたいまつを交互に見た。たいまつたいまつの火が小屋の屋根の藁へと近づき、ついに、ぼつと音がした。

発火した家の持ち主、孫一まじいちが、たまらずに立ち上がり、悲鳴を上げ、駆け寄ろうとした。だが、すぐさま扶の従者がそれを殴り飛ばし、力づくで地面へと彼の体を押し付けた。

そのわずかな間にも、火は小さな小屋を取り囲み、大きく、赤く、強く燃え上がっていった。

さらに扶は右手のたいまつを放り投げた。

また一つ、小さな家が炎に包まれ、あっという間に、ごうごうと音を立てる。

それは、鮎太郎あゆたろうの家だった。

鮎太郎は自分の家が形をなくしていく様を呆然と見ていたが、数十秒後、その場で泣き崩れ、妻と息子の名を叫び始めた。彼の悲鳴のような泣き声をともに聞くには辛すぎた。松吉はそっと目を伏せた。彼の胸の痛みを思うと、口の中に苦味が広がってくる気がした。

先の盗賊の一件で鮎太郎の妻も息子も行方知れずになっていた。

鮎太郎と妻のかよは、最近結婚したばかりの若夫婦だった。鮎太郎が口説きに口説いて、やっとなおもいで、かよの首を縦に振らせたのが1年ほど前。

その後の二人の仲むつまじさといったら、村人がうんざりするほどであった。だから、あつという間に子供ができたあとは、鮎太郎の妻自慢に親ばかが加わったと、誰も苦笑いしたものだ。

そんな若夫婦の幸せな日々は、あの凄惨な出来事により、一瞬にして奪われた。

鮎太郎の肩には今も消えない矢傷痕が残り、その傷よりもずっと深い心の傷は癒えることなく、今日まで彼に笑顔は戻らないでいた。

松吉は、燃え上がる炎をしっかりと見つめた。

きつと鮎太郎は、家族と一緒にすごした、家族だけの大切な空間で、思い出に浸る日々を送ってきたのだらう。

松吉は、彼の気持ちに痛みほど流れ込んでくるようで、顔をゆがめた。

「さて、もう一度聞こうか」

村人たちはその声で恐怖へと引き戻された。

「あの男はどこへいった」

扶の言うあの男とは将門のことだ。だが、村人たち全員の脳裏に、元氣な若様の顔が浮かんでいた。

「森へ逃げたのを見た」

松吉は、堂々と答えた。

松吉だけではない。村人の誰もが口を割るもんかと、扶をにらみつけていた。

沈黙が村を覆う。

時折、パチンと何かがはじける音が、炎の中から響いてきたが、誰も気に止めることは無い。

皆、ただひたすらに扶から目をそらすまいと、していた。

先に、行動に移したのは、扶の方だった。

扶の口元が、ふつと緩む。それは、危機が去ったことを告げるものではなく、最悪を招く合図であつたのだが、さすがにそこまで気づくものはいない。

ただ一人、松吉だけは、今まで以上に肌がぴりぴりとし、野生の獣が己の身の危険を察知するような類の、第六感を働かせていた。

いいだろう。口を割らぬというなら、割りたくなるようにさせてやろう。

そんな幻聴が聞こえてくる。

松吉は、このまま、扶が諦めて帰ることを、心の底から願った。
いや、祈った。

生まれて初めて、神に。

全知全能の天に！

もうなんでもいい。

どうか、このまま立ち去ってくれ！

（他国の小さな村の盗賊など、どうでもいいことだろう、あんたには！）

松吉は喉まで出かかった言葉をどうにか飲み込んだ。

しかし、扶は涼しげな顔で、従者に視線を送ると、命を下す。

「おい、矢五郎やごろうを連れて来い」

すぐに、その従者は一人の男をつれて、村人たちの前に現れた。
村人たちの視線が、その男へ集中する。

「この男に見覚えはないか？」

最高に面白い芝居が始まる、そんな期待に膨らんだ表情で扶は村人、一人一人の顔を見比べていった。

「お……お……おまえは！！」

松吉の背後から悲鳴にも似た声があがる。ツネ婆だ。松吉は首をひねって、ツネ婆を見た。

ツネ婆は、がくがくとふるえながら、その男を食い入るように見

つめていた。その顔には、明らかな強い恐怖が浮かんでいる。
そして、ツネ婆の口から、驚くべき言葉が零れ落ちた。

「あの時の……………盗賊!!」

ぱっと、松吉はその男を振り返った。

（ばかなっ!）

あの襲撃があつた日、松吉はあつという間に気を失った。だから、相手の顔を見る余裕も無かった。だから、何度その男を見ても、どれだけ食い入るように見ても、その日の記憶と結びつきそうなものは発見できない。

だが、ツネ婆の衝撃的な言葉に、記憶の破片をつなぎ合わせた数名の村人が、やはり同じように、悲鳴を上げた。

（まさか…………盗賊を仕向けていたのは、この男だったというのか?）

松吉は扶を見上げる。恍惚の表情を浮かべるその非道な男の姿に、足元から何かが壊れていく感覚にとらわれた。

（こいつは、隣の常陸の国の若様だろう? なぜ、こいつがうちの村を襲う必要がある!?）

この国の最高権力者、平良兼は常陸の国とは同盟を結んでいたのではないのか?

どうなっているんだ?

まさか…………!

松吉はめまいを覚え、額を手で押さえた。

（まさか良尚様！！ あんたもそれを知っていったっていつのかい！？）

知っていたから？

だから、助けたのか！？

村を襲わせておいて、良い人ぶって、助けたというのか！？

扶は、松吉の顔に青筋が立ったのを見つけると、今までにないほど喜びの顔を見せた。その顔が、まだまだ面白いことはこれからだと語っていた。

「この村が滅びなかったのは、小さな誤算であつたが。今一度、滅ぼせばよいだけのこと。のう、矢五郎」

「はっ。お任せあれ」

矢五郎と呼ばれた男は、ぴゅうと指笛を吹いた。たちまち、わらわらと男たちが集まってきて、村のあちこちに火をつけて回りはじめた。

村人たちに動揺が走る。

悲鳴があがる。

松吉は動けない。

どうすることもできない。心と体がばらばらになりそうだ。

「さあ、知っていることをすべて申せ。言わなければ、一人ずつ殺していく」

呆然とする松吉を見て、扶は高らかに笑った。

その時だった。

どーんつと突き上げるような大地の揺れを感じた直後、目を細める程の真つ赤な閃光が、それほど遠くないところで、空高くかけ上

が
つ
た
の
を
松
吉
は
見
た

。

(11)

その瞬間、尚子は確かに何かを感じた。

(胸がざわざわする)

後ろを振り返りたいが、小次郎がつむじ風のようなスピードで馬を飛ばすので、振り落とされないように、小次郎の背中にしがみついていたなくてはならない。

尚子は激しく上下にゆすられながら、声を出した。

「こじつ……っ……」

少しでもいいから馬の速度を落としてほしい、と広くたくましい背中に訴えかけようとしたのだが、舌をかみそうになった。

二人を隔てているものは、お互いの着ている衣服だけだというのに、尚子の声はまったく届いていないようだ。馬の足音がうるさすぎる。

尚子は小次郎の腹に巻きつけていた自分の腕を、片方だけなんとか動かし、小次郎の胸元の衣服を強く引っ張った。

やっと気がついた小次郎は、ちらりと尚子を振り返った。だが、小次郎とて、このスピードで馬を走らせながら、油断すれば振り落とされてしまうのは必定。

しかたなく、小次郎は手綱を引くこととしたようだ。

馬は嘶き、顔を横に向け、数秒後、足を止めた。

「どうどう……」

馬に向けて、小次郎があやすようにかけた言葉が、尚子にも落ち着きをもたらす。深く息をつく。

それでも、胸のざわめきが消えない。

小次郎は、ゆっくりと馬を歩かせるようにして、尚子を振り返った。その顔色の悪さに、小次郎は驚いた表情を見せた。

「……どうした？」

尚子は胸を押さえながら、もう一度深呼吸する。そして震える声で小次郎に訴えた。

「何か聞こえた」

「何が……？」

「わからない……」

と、そのとき。

『姫様ーっ！！』

どくと尚子の心臓が跳ね上がった。

（！？）

尚子は反射的に、背後を振り返る。

心臓がどくん、どくと強くなっていく。

右に、左にと首をひねり、尚子はあたりを見回した。必死に、そ

の声の主を探す。

小次郎は尚子の豹変ぶりに、ぎょっとして馬の足を止めさせる。

「なんだ、どうした!？」

「聞こえなかったのか!？ 驚太だっ!！」

「……………なに？」

小次郎は険しい表情を作った。

普段の尚子ならば、そんな小次郎に敏感に反応しただろうが、今の尚子はそれに気づく余裕がなかった。

小次郎は小さく首をひねった。

驚太の声が聞こえた？ それはおかしい。

驚太たちは、自分たちよりも遅くに村をでたはず。しかもこことは真逆の、森の方向へ走っていったはずだ。

その二人が、どんな駿馬にのったとて、こんなに早くに追いつくわけがない。

小次郎はそう思ったが、あえて口にはださなかった。

尚子はその間も必死に、少年の姿を探していた。そして、すぐに二人は尚子の胸騒ぎの理由を知ることになる。

突然、大地が揺れた。

ズドーンと、腹に響くような音がそれを追いかけるように、尚子たちを襲う。

驚いた馬が、暴走しようとしたのを察した小次郎は、あわてて手

綱を引き締める。

尚子は、間一髪、小次郎にしがみつき、落馬を免れた。しかし、衝撃で唇をかんてしまったようだ。尚子の口の中に鉄の味が広がった。

小次郎が、まるで女性を口説き落とすときのように、心地よい低い声で馬をなだめれば、すぐに馬は落ち着きを取り戻した。

「今のは、何!？」

今度は、背中に張り付くじゃじゃ馬をなだめる番か、とこっそり小次郎は思った。

小次郎が妙に落ち着いていたのは、それが地震だろうと思ったからだ。尚子がパニックを起こすのも無理は無い。揺れは相当、大きいものだった。

しかし、辺り一帯の木々が倒れてくる様子もないし、海も遠いので津波の恐れも無い。このあたりには、押しつぶされるような家屋も一つもないのだから、頭上から屋根や柱がおちてくる心配もない。つまり、これ以上案ずる必要はないと踏んだのだ。

だが、尚子を落ち着かせようと、体をひねって振り返った時、目に飛び込んできた空の色に息をのんだ。

「……赤い……」

小次郎は、目を見開いて、しっかりとそれを見た。

遠くに、まるで空高く駆け上る龍のような、真っ赤な火柱を！

「空が……怒ってる……」

尚子がぼつりとつぶやいた。

はっと我に返った小次郎は、尚子の顔に目をやった。

尚子は呆然と空を東の空を見上げていた。
無理も無い。

その火柱から放たれた赤い閃光を中心にして、東の空が血の色に染まっていたのだから。

なんとも不気味な光景だった。

夜だというのに、東側半分の空から、星は一瞬にして姿を隠し、月だけが不自然に浮かび上がって見える。

「森が燃えてるの？」

背中から小さな振動が伝わってくる。小次郎は体をひねり、そつと尚子の肩を抱いてやった。尚子は、わずかに表情を緩めたが、体の震えはとまらないようだった。

それにしても、森といえば、あの二人が逃げ回っているはず。何かあったのだろうか。

小次郎の脳裏に、あの日の少年の姿がよぎった。

炎に包まれ、宙に浮き、そして眠り続ける少年。あどけない、その寝顔が、小次郎にはなおさら脅威に思えた。

あの子供が、ヒトでないと言われても小次郎は驚かない。ヒトでなければ何なのかといわれても、答えられない。それは、尚子だと同じだろう。いや、尚子ならば、あの子はヒトだ、と言い張るだろうが。

つまり、こうだ。

不可解な子供が森にいる。そして、森で何かおかしいことが起きているようだ。

ということは、この不可解な現象とあの子供がなんら関わりがある、と考えるのが自然だろう。

いや、この火柱の中心にいるのはあの子供なのではなからうか。

「見て、あれっ！ 煙が！」

突如、先ほどまで力なくふるえていた尚子とは思えない、機敏な動きを見せた。

尚子は身を乗り出すようにして、勢いよく、火柱よりも少し北の空を指差した。

落ちるのではないかと、尚子を支えつつ、小次郎もその指の先に目をやる。黒煙が立ち昇っていた。

「村が燃えてる！」

がばつと、体全体をひねり、尚子が小次郎を振り返った。鼻がこすれそうな位置に、整った尚子の顔がある。

小次郎は、はつと息を呑んだ。尚子の瞳の奥に、強い意志がきらめいていた。

助けたい！ 村のみんなを！

尚子の目が、全身がそう小次郎に訴えている。

小次郎はすつと、尚子から目をそらした。

「だめだ……」

「いやだ！ このまま私だけ行くななんてできないっ！」

「だめだ」

「みんなは私のために、殺されるかもしれない。今だって、危険な目にあってるに違いないんだ！」

「しかし、それが彼らの意志だ。それを望んで、彼らはそうしている……その気持ちを大事に……」

「そうだとっても！」

尚子は小次郎の言葉をさえぎった。

「誰かの犠牲の上にある幸せなんぞ私は望んでいない！ 誰かがくれた自由なんぞ、いらない！ ……当主の娘として生れたから、誰かの命を利用していいのか？ そんなわけない。身分と権威が、誰かの血と涙で出来ているというのなら、そんなもの私はいらない！」

小次郎は胸を矢で射抜かれたような衝撃を受けた。

いつから、自分は人の犠牲を“しかたない”と思うようになったのだろう。

小次郎がはつと我に返った時には、もう遅かった。小次郎の視界がぐらりと揺れ、天地が逆転した。

（なっ！？）

ドサツ、という音と共に、体中に激痛が駆け巡っていった。一瞬息が詰まって、意識が遠のく。が、そこは頑丈な体を誇る、坂東武者。すぐさま、体制を整えたが、その痛みあまり、尚子に突き飛ばされ馬から落とされた、と理解するまで少し時間がかかってしまった。

「この先のサクラの木で待つてろ！ 月が真上に昇るまでにはもどる！ それまでに戻らなかつたら、先に行け！」

尚子は、そう言い終える前に、馬の腹を蹴り、走り出していた。

（いって……）

小さくなる尚子の後ろ姿を眺めながら、小次郎は胡坐をかき、頭をさすった。

完全に油断していたため、受身が取れなかったのが悪かった。

下手したら、骨折していたぞ、と文句を言ってやりたいが、すでに尚子の姿は親指より小さくなっていた。

「助けだした姫に、蹴落とされたあげく、大人しく待っているだとい？ しかも、なんて言った！？ 先に行けー？ たくつ。俺を誰だと思っでやがる、あのじゃじゃ馬めっ！！」

不意をつかれたのも悔しい。

油断していた自分も情けない。

置いていかれたのは、なお悔しいし、情けない。

何より、そんな女に惚れた自分が悔しい。

「ちきしょーっ！！ 国に帰ったら、覚えてやがれっ！！ 文句は言わせん！！ 一晩中、いや、一日中ああして、こうして……」

その後も小次郎は、見えなくなりつつある尚子の背中に向かって、何かを懸命に叫んでいたが、清らかな秋の風に浄化され、尚子にはとどかなかったようだ。

東の空には、なおも煌々と火柱が立ち上り続けて、その横にある月は、まだまだ低い位置にある。あの月が真上に上がるまで待てと、尚子は言った。

小次郎は月を睨んだ。

まるで、小次郎をあざ笑うように 赤い月は、小次郎を見下ろしていた。

突然のことで、何がおこったのかわからなかった。

気がつけば、良兼は猛烈な衝撃波に吹き飛ばされ、馬の上から地面にたたきつけられていた。

あまりの衝撃波に、空気は大地を揺らしたのだが、自分が落馬した時に受けた衝撃に、全身の感覚神経が占拠され、良兼にはその揺れはまったく認識されなかったようだ。

本能的にとった受身。ごろごろと地面を転がり、すぐに体制を整えることが出来たが、体中すり傷だらけになった。

不意打ちであつたのに、そこは、どこかの若輩武士とは違う。経験の差と言おうか、修羅を生き抜いてきたからこそ、研ぎすまされた野生と言うか。

反射神経もまだまだ、とうに四十をすぎた今でも、衰えてはいないようだ。

良兼は体を起こすと、勢いよく背後を振り返り、呆然とする。

「……な、なんだあれは!？」

先ほどまで、良兼がいたその場所から空高く、天に続く、火柱がそびえ立っていた。

なぜだ。

今さっき、自分の重臣に子供と謀反人を処罰せよと、命を下したばかり。

なのに、なぜ！

どうして、強烈な爆発音と衝撃波が自分を襲うこととなるのだ！

おぼつかない足取りなのは、今、馬から落ちた時に痛めたからではない。

一步一步、そこへ近づくにつれて、だんだん浮かび上がる光景に、さすがの良兼も目を見開いた。

「こ、これは……」

地面からまっすぐ天に向かって伸びた、真っ赤な光の柱。ただの光の柱ではない。ごうごうと大きな音をたて、燃えさかる柱だ。

外に出ている顔や手の皮膚が、焼けるように熱い。

火柱によって、周囲の空気の温度は二百度を超え、そこから激しく、灼熱の上昇気流が吹き荒れていた。

顔に吹き付ける熱風によって、あっという間に口の中が乾き、ひりひりし出したのを自覚していた。

良兼は、思わず一歩足を後退させた拍子に、ふらりとめまいを覚え、近くの木に右手を添えた。

が、手がぬるつとすべる。その暖かな感触に、ぎょっとして、木の幹を見れば、幹には大量の血液が付着していた。

少し視線を上によらずと、枝に串刺しになり、息絶えた従者の姿が目に入った。衝撃波で吹き飛ばされた先に、運悪く太い枝があり、串刺しになって絶命したのだろう。

だが、よくよく見れば、骨と肉の塊と化した従者は、彼だけでは

ない。火柱を中心にして、綺麗に円を描くようにいくつもの遺体が落ちていた。

全身を強打したのか腕も足もあさったの方を向いている者、炎に飲まれたのか墨と化した者。どれも皆、一瞬で絶命したに違いない。それほど痛ましい遺体で、長く直視はできない。原型が分からないものもある。

全滅だ。

（戦場よりもひどい有様だな……）

良兼の額を、冷たい汗が伝っていった。自分も、あの時、この場を去っていなかった同じ運命をたどっていたということか。

そう思うと、肝が冷えた。

と、その時、良兼の聴覚がわずかに反応した。熱波のうなり声の中に、かすかに人のうめき声が混じっていたような気がしたのだ。

（生存者がいるのかっ！？）

良兼は、自分の耳に神経を集中させた。

「……うつつ……」

今度ははっきりと聞こえた。

声は、火柱の向こうから聞こえてくる。

「誰か、生きてるのか！？」

良兼はじりじりと火柱の方へ近寄ろうとしたが、風圧と熱波でそれ以上近づくことができない。

しかたなく、円を描くように火柱の反対側へと足を踏み出した。一步一步、足を進めるうちに、火柱のすぐ横に、一人男がうつぶせで倒れているのが目に入った。そしてそれは良兼を驚愕させた。

（ばかな！　なんで、無傷なんだ。やけどもしていない！！）

良兼が、その男の倒れている場所に行くには、十メートル以上の距離を、熱さと風圧に耐えて進まなくてはならない。常人にはとても近寄ることは出来ないだろう。

それなのに、そこに転がっている男はどこにも火傷の後もなければ、着ている衣類ですら損傷がないように見える。

この激しい風も、その男の衣服どころか、髪一本すら動かせていない。

まるでそこだけ異空間であるようにも見える。その男が見えない壁で守られているかのようだ。

「おいっ！！　お前、無事なのか！　生きてるのかっ！？」

誰でもいい。生きていてほしい。

良兼は、自分でも気がつかないうちに、そう願っていた。

(1)

なんだろう。すごく気持ちがいい。

ここはどこだろう。

ひどく真っ暗で、何も見えない。

なんだかふわふわして、よくわからないや。

僕は、死んだのかな。

そうなんだ、そうに決まってる。

だって、あんなに矢が飛んできたもの。

助かるわけないよ。

そうか。

僕は死んだのか。

やっと死ねたんだ……。

『ばか言っでないで、目を覚ましなさい』

え？

その声はゆきしろ？

『いいから、目を覚ましなさい』

目を覚ますっていったって、僕はもう死んだんだ。
どうすることもできないよ。

『あんた死ぬってわかってるの？ 死ぬためには、生き物でなくて

はならないのよ』

え、何？

それはどういう意味？

『生きているから、死ねるのよ』

何を言っているのかわからないよ。

僕だって生きていたじゃないか。ちゃんと、息をして、ご飯を食べて、笑って、泣いて！

僕が生きていなかったとしたら、あれは何だったって言うんだい？

『わからない子ね。確かに、そのイレモノはヒトだわ。ヒトの形をしている。でも、あんたは生きていない』

えっ？

『でもね、そのイレモノはもう“モタナイ”のよ。あんたが、“こち”に残るなら、新しいイレモノが必要になる』

わけがわからないよ。モタナイとか、こっち、とかイレモノってなんだよ！

『いいわ。あんたも一緒にここへ入りなさい。これもそう長くはモタナイだろうけど、今は贅沢も言っていられないでしょう？』

ちょっとまって。

何、勝手に話を進めないでよ！

『さあ、こっち

「こちらへおいでなさい、鬼火の子よ……」

一人、暴風と熱波に立ち向かっていた良兼は、突如、目がくらむような閃光に襲われた。

とつさに、腕を顔の前にかざし目をかばったが、それでもまぶしく感じるほどの強い光だ。直に見ていたら、網膜がやられていたかもしれない。

まぶたの裏に、自分の血管が赤く写って見えていた。

十数秒後。

世界はあっさり一変した。

それまで体を感じていた、すべての進入を阻むようだった熱気も、姿無き強大な壁と化した風圧も、文字通り、消し飛んだ。数十秒間の閃光が、すべてを消し去ったのだ。

良兼は、完全な静寂の中にいた。先ほどまで、鼓膜が破れんばかりだった炎の唸り声も、強風が木々を揺らす音も、ぴたりと止んでいた。

今、唯一聞こえるのは、肩で息をする自分の鼓動のみ。

恐る恐る良兼は目をあけ、辺りを見回した。

見回したはずだったのに、目をつぶっていた時と何も変わらない。辺り一面に漆黒の闇が広がっていた。

自分は、本当に目を開けているのか疑わしくすら思える。だが何度、まばたきをしたとしても、状況はかわらない。

先ほどの閃光で、目がつぶれてしまったのだろうか。そんな不安がよぎったが、それも一瞬のこと。すぐに、己の視神経が正常であったことが証明されることとなる。

良兼は、十メートル程先に“それ”を見つけた。

「……」

思わず、ごくりと喉が鳴る。

恐怖が良兼の体を一気に取り込み、感じたことの無い寒気が足元から頭上へと駆け上がっていった。

（……お、狼か！？）

そう、彼は、一人闇の中で立ち尽くしていた。

人よりはるかに大きな、一匹の獣と対峙するようにして！

獣は、良兼の知るとんな獣とも違った。

暗闇に浮かびあがるような、白い毛並みは、まるで己で光を放つ恒星のように、美しくまばゆい。

全身、長い毛で覆われているというのに、人の拳よりも大きな真っ赤な二つの目が、毛の間からしっかりと良兼を見下ろしていた。

その瞳は、宝石のようにきらめき、引き込まれるような魔力すら感じる。

実に美しい獣だった。

いや、美しすぎた。妖美なその姿は、一瞬で多くの人を虜にするだろう。

良兼も、その魔力の餌食となりつつあった。

だが、そこは、良兼の強靱な自制心がものを言う。手を伸ばし、触れてみたい気持ち、かろうじて残った自制心が押さえ込む。

しかし、何よりも、良兼の正気の命綱となっていたのは、恐怖心であった。

獣の紅蓮の瞳の下に見える大きな口と、鋭い牙の存在には、さすがの良兼も、息を呑む。

口は目元近くまで裂け、紫色の長い舌がだらりと伸びていた。ぽたりぽたりと滴り落ちるよだれは、良兼に更なる恐怖をあおる。

それでも、徐々に、普段の冷静さの1割ほどを取り戻していく良兼は、さすがというべきであろう。

良兼の優秀な脳細胞も、落ち着きを取り戻していくほどに、良兼の視野も広くなってくる。

おかげで、その獣の体全体を見やることができるようになってきた。

そして、あることに気がついた。

たしかに、四足で立つその姿は、狼のそれによく似ていた。人の倍ほどある体高と、尻尾の先が三つに割れていることを除けば。

だが、狼とは、いや、良兼の知るすべての生き物とは、決定的に違うことがある。

（……燃えているのか？）

その獣は、全身が真っ赤な炎で包まれていたのだ。

だが、どこも燃えていない。苦しそうな様子もない。

（なぜ生きていられるのだ！ アヤカシか！？）

良兼の喉がごくりと音を立てた。

そういえば昔、父に聞いたことがある。

この、日本の国では、どの山でも川でも森でも、人の住まう村にだとして、その土地に昔から住みつく主つづみがいる。

その主を人々は、その土地の神、産土神うぶすながみ、氏神うじがみと呼び、畏れ、祀り、共存してきたという。

その中には、長い年月を経て古くなったり、長く生きた依り代（道具や生き物や自然の物）に、神や靈魂などが宿ったものも含まれるという。それを人々は九十九神つくもがみと呼んだ。

時に、それらの神は、己の縄張りがあらされることに怒り、姿を現すこともあるという。

（この森の主が目を覚ましたというわけか……？）

勝手に良兼の息が浅く、荒くなっていく。

なぜこのような状況になっているのか、まったく理解できない。ただ、自分はこのアヤカシによって、命を絶たれる恐れがある、ということだけはわかる。

「……………」

だが。

こんなアヤカシを相手に、どう戦えばいいのか。

このままあの牙に引き裂かれてやる気にはなれない。

しかし、自分の刀がああ神々しい毛の下に隠れる皮膚を、突き刺すことができる気とも思えない。良兼の刀より、獣の牙のほうが、よほど大きく、鋭利に違いない。良兼の肌はおろか、骨、いや、大地ごと良兼を切り裂くことも可能なのではないだろうか。

（しかし……。私にはまだやることがある。こんなところで死ぬわけにはいかぬのだ）

良兼は目の前の巨大な獣から目をそらさないように、腰に手をやり、刀を抜くと、アヤカシの顔に向けて構えた。その刀に、獣の赤い目が映りこみ、きらりと光る。

それを見た白光の獣は、口端をさらに引き上げた。

「……………」

まるで良兼を嘲り笑ったように見え、背筋が凍りついた。

そんなもので、立ち向かおうとするか、愚か者め。

そう言っ、高らかに嘲笑する声すら聞こえてきそうで、ぞくりとした。

静かに睨み合う白き獣と、ヒトの形をした獣。

その間を、すがすがしい秋のそよ風が、草の香り乗せ、優雅に通り過ぎていく。

（……………？）

そのそよ風の中に、懐かしい香りが混じっているように感じた。何の香りだろうか……。心地よく、それでいて胸が高鳴るような……。

……様。

良兼は息を呑んだ。

（今は……！）

確かに、暖かな香りが、そう良兼を呼んだ。

香りだけではない。人の気配がする。

だが、誰のかわからない。知っているはずだ。この香りも、この胸の安らぎも。

知っているはずなのに、わからない。

懐かしいはずなのに、思い出せない。

その香りを掴もうと、良兼の手が宙をさまよう。

そう。

自分は、かつて。

この柔らかな香りを、手に入れようと……した？

宙をさまよう良兼の手が何かに届きそうになった。

その時だった。

カシャン。

良兼の手から力が抜け、持っていた刀が地面に着地し、高い音をたてた。その音で良兼は現実に取り戻される。

なんということだ。

敵を前にして、茫然自失におちいるとは……。

まさか、これがこのアヤカシの力だというのだろうか。

すくみあがるほどの恐怖と、どうしても手に入れたくなる美しさで、標的から思考力を奪う。そして正気を失っている間に、今度は命を奪われることとなるのだろう。

“人の心を喰らう獣”。

それがこの白き獣の正体なのではないだろうか。

(とすると……)

先ほどの、懐かしい香りも、獣の仕業に違いない。

もしかすると、人の記憶をも食い物にしているのかもしれない。

標的が何に心を奪われるのか、何を欲しているのかを、いとも簡単に知り得るのだろう。そして、それを幻影として与え、夢見心地にしてしまう　先ほどの自分のように！

良兼の額に、見る見るうちに、汗がにじむ。いかに先ほどの自分が、死に瀕していたかを思い知ったのだ。

ついに、一滴の汗が頬を伝って顎へとたどり着いた。良兼は反射的に、それを右手で拭う。

(なんて恐ろしい獣だ……戦意を喪失させておいて、ゆっくりと食べるというわけか……)

そんな獣とどう戦えばいいのだろうか。何か手はあるのか。いや、まずは正気でいることが肝要であろう。再び相手の術にはまれば、次こそ命はないやもしれない。

しかし、何の策も浮かばない。そればかりか、この良兼ともあるうものが、脅威の前に、小さく震えることしかできないというのか！！

良兼が、自分の無力さに完全に打ちのめされた、その時だった。

(……なにっ!?)

再び良兼は息をのんだ。

白き獣の姿は跡形もなく消えていたのだ。

正確には、獣は力強く大地を蹴り、空高く舞い上がったのだが、あまりの速さで獣が行動したため、良兼には消えたようにしか見えなかったのだ。

良兼は、刀を構えたまま、立ち尽くした。動けなかった。

(助かったのか……?)

急激に、言い知れぬ倦怠感が全身を襲った。

「……………」

どこかで音がした。

呆然となった良兼の耳にかすかに届いたそれは、人のうめき声にも聞こえた。

良兼は周囲を見回す。だが完全に光源を失った視野では、容易にその声の主を見つけることができない。

耳だけを頼りに、荒い息をする男のもとへたどり着く。

「おいっ！　生きてるのか！」

良兼が男を抱き起こすと、ぬるりと手が湿った。血だ。手探りで確認すると、男の体には無数の矢が刺さっている。

かろうじて生きている状態のようだ。このまま、ここにいれば、命はないだろう。

「……………ひ……………め……………」

荒い息の中に、紛れた男の声。良兼はそれだけで、その声の主に思い当たった。

「……………おまえは……………」

その村にいた全員が、その光の柱に目を奪われていた。自分たちの置かれた、脅威もその時だけは、すっぱり忘れていた。

「……なんだあれは」

松吉は呆然とつぶやいた。東の空に立ち昇る赤い柱は、そう遠くない森で仁王立ちしているかのようにだった。

脳裏に、森にいるはずの、あどけない少年の笑顔がよぎり、全身があわ立つような感覚に襲われる。

「……驚太」

松吉は、ついこぼした。

松吉の隣に居た鮎太郎には、その小さな声が聞こえたらしい。

鮎太郎が彼を振り返った。二人の視線が交差する。松吉があの光の柱を見て、真っ先に考えたのは驚太のことだったが、彼も同じだったらしい。

心配するな、驚太なら大丈夫だ、というように、鮎太郎がそつと松吉の肩に手を置いた。松吉は、それを受けて、深くうなずいた。

村のどの人にも愛されていた息子。一緒にすごした日々は、わずかであったが、それでも自慢の息子にはかわりない。

頭のいい子だから、きつと何があってもうまく逃げて、元気に戻ってくるに違いないのだ。

松吉はもう一度だけ東の空を見上げた。

息子を信じよう。

あの子が信じる、命がけで守ろうとしている人を信じよう。

(だいたい、あの若さまが嘘をつけるタマか?)

松吉から自然と笑みがこぼれた。

泥だらけになっても、日に焼けても、白い歯を見せて朗らかに笑う青年のどこに偽りがあったというのだ。

嘘が言える性質^{たち}ではないのは、自分がよく知っているじゃないか。

それなのに、さつき突然現れた、得体のしれない、しかも明らかに村を害する存在であるあの男を信じるというのか。

まったく自分もどうかしている。

松吉の瞳に、わずかではあるが、明るい光がともったように見えた。が、すぐさま水をさされることになる。

「何がおかしい」

松吉の顔から、すつと笑顔が消えた。

得体の知れない男　扶は、薄気味悪い笑顔をたたえ、松吉を見下ろしている。森の異変などには興味がないようだ。

それ以上に、興味をそえられるものがこの村にはあると、確信しているのだろうか。

まったく反れることない視線は、松吉のすべてを見透かすように、一度だけ上下に動いた。

「つれて来い」

扶が従者に命じて、彼のすぐ足元へ松吉を移動させた。片足が不自由だというのに、この上なく乱暴な扱いを受け、松吉はわざとらしく憤慨してみせた。

「何か知っているのだな、お前」

「何度言ったら済むんですか。森の方へ逃げたのをみた。それ以外にお教えできることは何もありません」

今度は、足を投げ出し、あぐらをかいて見せた。あんたには屈しない。そう態度で示したのだ。

扶は、さらに、面白いおもちゃを見るような目つきで、すぐ足元にいる松吉を見下ろした。

「そいつも、だ」

扶は松吉の後ろを指をさした。松吉はその指の先を目で追う。

扶の指の先では、鮎太郎が明らかに動揺した顔を松吉に向けた。すぐに従者は、二人がかりで鮎太郎を取り囲み、さがるように松吉をつかがう彼の両腕をつかむと、松吉のすぐ隣に座らせた。

その様子を村人たちが固唾を呑んで見守っている。緊張感と共に二人を案じる視線が、二人の背中に注がれていく。それが心強く感じた。

「お前たち何かこそしていたな。隠し立てすると、いいことはないぞ。すべてを白状すれば、我が配下として取り立ててやってもよい。こいつらの下に付けてやる」

さも、愉快だといわんばかりに、扶は言った。

こいつら 扶が顎で指したのは、村を襲った盗賊頭だった。

「！」

若い鮎太郎の顔にあからさまな怒気が浮かんでいく。扶が自分たちの怒りを煽って、楽しんでいるのは分かっている。だが死んでいった妻子の顔がちらついて、感情が押さえられない。

松吉はそっと、そんな鮎太郎の腕をつかむ。松吉の手の優しさにはつとなった鮎太郎がこちらを向いた。松吉の柔らかな視線が鮎太郎の心を包み込んでいく。

落ち着け。相手の策に乗るな。

松吉の瞳が、一瞬、強く光った。鮎太郎には家屋の炎が反射して、松吉の目は赤く燃えているようにも見え、鮎太郎は押し黙った。

二人は、再び扶に向き直った。

（馬鹿にしゃがって）

松吉の中で静かに燃え上がる炎は、とどまるところを知らない。

いや、鎮火する方法など、忘れた。

「よかるう。私の最後の温情も受け入れてもらえないとは、実に残念だが、致しかたあるまい」

きらり。

その時、暗闇の中で、扶の目が怪しく光った。

その光は、赤い光の柱が閃光に変わった瞬間のもので、松吉はそ

の閃光を扶の瞳越しに見たのだ。

同時に、何かが、松吉の視野をかすめ、足に当たった。

（今……何かが落ちた……？）

視線を自分のひざに落とし、太もみに突き刺さる刀を目にした瞬間、激痛が松吉の全身の感覚神経を占拠した。

「ぎゃああああーっ！！」

村中を松吉の悲鳴が駆け抜けた。

扶が、あぐらをかく松吉の太もめがけて、己の刀を投げ刺したのだ。

前触れもなく行われたその非道な行為に、誰もが理解するのに時間を要した。刺された本人ですら！

「う、うわああっ！！」

松吉の隣にいた鮎太郎も、串刺しになっている松吉の太ももを見て、腰を抜かす。その場から逃げ出したい気持ちを何とか押さえ、とどまることに成功した。だが、今にも崩れ落ちそうな自制心の崖の上に立たっている状態。

少し離れてたところで、二人の様子を見守っていた村人たちも、迫り来る恐怖に我を忘れて、悲鳴を上げた。

殺される！

このままでは、全員殺されるっ！
助けてくれ！

叫び、その場から逃げ出した者もいたが、すぐさま扶の従者に捕らえられ、その場で切り殺されていく。

逃亡者の末路を目の当たりにすることで、その場にいた村人全員は、逃亡の意志を、完全に剥ぎ取られることになった。扶の狙い通りに。

逃げることは許されない。

村人たちに残された選択肢は 死か、服従か。

すべては、その二つの選択肢しかないことを、身をもって悟らせるため。

（ど……どこまでイカれた野郎なんだ……）

松吉は、激痛のあまり、手放しそうな意識をなんとかつなぎとめた。

「……やめろ！ ワシに話が……あるんだろうがっ！」

搾り出すような松吉の声は、村の隅々まで響き渡った。一瞬で、村はしんと静まりかえる。

しかし、松吉はそれだけ叫んだだけで、めまいを覚える。いつでも意識が飛びそうな状態だった。

「ま、松吉さん！」

我に返った鮎太郎が、今にも崩れ落ちそうな松吉を察し、自分の肩を貸すようにして寄りかからせた。

「ま、松吉さん大丈夫かつ！」

「ああ……」

「松吉さん……」

何とか笑顔を見せた松吉だが、額には大量の汗が、次から次へと湧き出てきた。

「ほう。気丈だな。足1本では足りぬか。次は手を切り落とすか」

扶はうれしそうに、言った。

「や、やめてくれ！ それ以上は松吉さんが死んじまう！」

鮎太郎は、震えた声で訴えた。

「では、おまえが、知っていることを話せ。ならば、考えよう」

扶は妖しく笑う。その言葉を待っていた、とばかりに。

鮎太郎は、ごくりと喉を鳴らした。松吉の顔を覗き込む。

松吉には、鮎太郎の動揺が手にとるようにわかった。

（だめだ……）

そう声に出したい。

あの人を、守らねば。

息子だって命をかけている。それなのに、自分ばかりが自分可愛さに、あの人を裏切れるわけがない。

「……っ……くっ」

だが、息をするのがやつと。声が出てこない……。

肩で息をする松吉を見て、鮎太郎は顔をゆがめる。どうしたらいいんだ。

「松吉さん！」

松吉は限界だった。徐々に細くなる意識を、完全に手放す覚悟をするしかないのだろうか。

（鷺太……………お多恵……………）

規則正しい蹄つづの音が聞こえる。薄暗い街道を、行きよりも若干、早いスピードで一頭の馬が青年を乗せて駆け抜けていく。

青年は、長い髪を後頭部で一つに結び、ところどころ穴の開いた、世辞にも綺麗とはいえないような、粗末な服装をしていた。

だが、衣服とは、不釣り合いとも言おうか、青年の肌は好けるように白く、キメ細やかだ。肌触りもよさそうで、人差し指でつつけば、かなりの弾力を味わえるに違いない。

よく見れば、黒く長い髪も、不精の類ではなく、普段から手入れされていたのが伺える。難なく櫛を通してうな、整えられた髪は、月の光を反射して見事な光の輪を頭部に形成していた。

その彼……いや、彼女は小さな胸が張り裂けそうな気持ちを抱えたまま馬を飛ばし続けていた。

(おねがい……無事でいて！)
すると、不意に進行方向がまぶしく光った。

「　　」

あまりの強い光に、尚子は声にならない悲鳴をあげ、目をつぶった。

その光に驚いた馬は、耳鳴りしそうなほど甲高い嘶きを上げ、後ろ足で立ち上がった。もう耐えられないというように、馬はおびえ、簡単に尚子を振り落とすと、進行方向とは逆の方へと逃げていった。

(しまった！)

腰をさすりながら、尚子はその馬の後姿を見送る。自分の失態に、チツと舌うちをした。

(いったい何んだっていうの！?)

八つ当たりをたつぷりと含んだ尚子の眼光が、前方をにらんだ。
が、すぐさま、その表情から怒りは消え、驚愕に変わり、それすらもあつという間に恐怖へと転じていった。

無理も無い。

そこにいたのは。

（お、狼！？）

尚子は動けなかった。

五メートルほど先に、大きな大きな白い獣が、じっと尚子を見下ろしていたからだ。

（食われる！！）

全身の毛の白さが、獣の紫の舌を際だたせ、妖しく光る鋭い牙から目が離せない。

僅かに鮮血の色を思わせる大きな二つの目が、ギロリと尚子を睨んだように見えた。ぎくりとなった尚子の細い肩が、小刻みに震え、ひざも笑い出す。食いしばった歯の僅かなすき間から、これまでずっと耐えていた不安と、恐怖と、心細さが、息と一緒にもれていく。ここで、この獣にかみ殺されて、食べられる運命にあるんだ。尚子はそう悟った。おいしそうな獲物を逃がしてくれるほど、自然のおきては甘くない。

走って逃げられるわけもないし、戦うとしても、武器がない。手ごろな石も足元に転がっていてくれればいいのに、小枝と砂利しか見当たらない。

これじゃどうにもならない。覚悟を決めるしかないのだ。

（ごめん……私、みんなを助けにいけないみたい……）

そう思ったときだった。父が自分の名を呼ぶ声が聞こえてきた気がした。

尚子は、首を回して父の姿を探す。だが、木々が作り出す闇の中には、誰も見つけられない。

空耳だったのだろうか。

僅かに差し込んだ希望の光は完全なる絶望の呼び水となる。

(父上……)

尚子は目の前の恐怖から目をそらすために、瞳を閉じた。

と、かすかな香りが尚子の鼻をかすめる。新緑の木々の香りだ。

そして……どこか懐かしい……。

この香りを知ってる……？

そう思った時、再び父の声が聞こえた。

『 尚子 』

今度ははつきりと。尚子を諭すような、優しさの込められた声で。

『 森には狼が住んでいるから、近づいてはいけないよ 』

あれは、まだ父が優しくかったころだ。野山と一緒に馬で遠出した時に、さまざま自然のおきてを教わった。

父はこうも言った。

『 強きものは弱きものを喰らい、命をながらえている。だが、それは強きものが悪いのではない。弱きものは、その弱さゆえに、強きものに食われるのである。人も同じだ。同じこの地に生き、弱きものを喰らい、強きものが生きながらえる。 』

だが、人は獣とは違う。

獣は、己の命を永らえるためだけに、弱きものを殺す。

人は、己の欲望のために、弱きものを殺す。浅ましい、愚かな生き物だ。

しかし、同時に美しい生き物でもある。弱きものが、強きものために喜んで命をささげるのも、人なのだから。

母は子のために、喜んで命を投げ打つであろう。そして、良い君主を持った者は、自らの意志で君主のために、その命を使う。

お前は、どちら側の人となるであろうか 』

父は、まだ歳が二桁にならぬ我が子を、自らの馬に乗せて、遠い目をしたものだ。

『父上はどちら側なのですか？』

娘は、無邪気に聞いた。

あの時、父の顔が少し曇ったような気がしたのを覚えている。

その答えは、なんだったのか。思い出せそうに無い。

ただ、父は嘆いた。お前が男であつたなら、どんなに良かったか、と。そして、静かに続けた。

『弱者であっても、強者であっても、“人”であることを忘れてはいけない。それが人である、ということだ』

幼い尚子には、難しくてよくわからなかった。だが、その言葉は、今思えば父が自分自身に言っていた言葉だったかもしれない。

(……なんで、そんなことを今思い出すのだろう)

父のことが気がかりでならない。

村に残してきた者たちの顔がちらついて、落ち着かない。

幼い少年と、大事な腹心と、母代わりであつた女官とのたくさんの思い出が、次々に湧き上がってきて、とまらない。

尚子の目頭からあふれた涙は、きらきらと光、地面に落ちていった。

ぽた。ぽた。ぽた……。

言葉にならない、思いがあふれていく。

(ごめんなさい……役に立たない子で……ごめんなさい……父上……女でごめんなさい……)

ぼろぼろと大粒の涙をこぼす尚子を、獣の赤い、大きな目が静かに見つめていた。

(！)

すると、獣は足音も立てずに、ゆっくりと尚子に近づいてくる。

一步、また一步……。

気持ちが混乱しているあまり、足を後退させることすら思いつかない、尚子。

獣の歩幅は大きく、あつと言う間に尚子の顔に獣の生臭い息がかかる距離になる。

次の一步を獣が踏み出そうとしたので、尚子はぎゅっと目を閉じた。

（　　っ！）

もうだめだ。

食われる。

覚悟を決めた尚子の鼻を、つんと嫌なおいが襲った。

（血のおい……）

視覚が遮断されたせいで、ほかの感覚が研ぎ澄まされたのか、生臭さの中にうつすら血の匂いが混じっている気がした。

この匂いに自分の血の匂いも混じるのだ。

そう思った。

静かな時が流れた。

（あれ……？）

予想される痛みが、こない。獣の鋭い牙が、尚子を容赦なく切り刻むはずだ。

恐る恐る目を開けようとした時だった。

ふわふわとした柔らかいものが、尚子の頬に触れた。ぎよっとして、目をあける。

視界は、一面、白銀にきらきらと輝いていて、それがまた尚子を驚かせた。

（白い……毛？）

よく見れば、白く輝く毛は、規則正しく上下にリズムを刻んでい

た。

尚子はそつと手を差し出して、目の前の白銀の毛に触れてみた。柔らかい。

猫の毛のようだな、と尚子は思った。

この毛の上に寝転んだら、きつと気持ち良いに違いない。

（あたたかい……）

すると、目の前の毛の塊が動いて、尚子のすぐ顔近くに大きな目が二つ現れた。尚子はどきりとした。

真っ赤な、二つの宝石は、尚子の姿を鏡のように映しこんでいる。不思議と、先ほどまでの恐怖はどこかに吹き飛び、変わりに尚子の心を懐かしさが埋めていく。

すると、獣は自然な動きで鼻先を尚子の顔にこすりつけたかと思うと、ぺろり、甘えるように舐めた。

（……………）

何かが尚子の記憶のかけらにひっかかった。

紫の長い舌で付けられた、たっぷりのヨダレが尚子の頬を、ねつとりと伝っていく。

それが顎に達し、べちゃっと地面に落ちた時、尚子の口から自分でも信じられない言葉が零れ落ちた。

「……………雪白？」

何も考えずに飛び出した言葉。発した尚子が一番驚いていた。

まさか、この獣があのお白猫のはずが無いのに。

しかし、獣の反応は、尚子の予想に反して、まるで喜んでいるように、三つに分かれた尻尾を右へ左へ動かし、再び頬擦りするように鼻先を尚子の頬にこすりつけてきた。

「ほ、本当に雪白なの？　なんでこんな姿にな……………わっ！」

尚子は最後まで言うことが出来なかった。突然、鼻先で尚子の体を軽く押したからだ。

「な、何？」

じつと獣の様子をうかがうと、獣は体を右回りに九十度動かし、尚子に長い胴体が見えるようにした。そして、首をくいと動かし、尚子の顔を見つめる。

「背中に乗れっていつの？」

獣はまるで肯定するように、口端を少しあげた。微笑んだように取れなくもない。

そう思うと、急にその大きな恐ろしい獣の姿が、先日までひざの上で丸くなって昼寝していた白い猫の姿にかぶって見えた。

(ほんとに……雪白なんだ……信じられないけど)

ごくんと、尚子は唾を飲み込んだ。色々な疑問と一緒に。

「わかった。でも、どうやって乗れば……」

乗れといわれて乗れる高さではない。背伸びしても手が届かない高さに、どう乗れというのだろうか。尚子が腰に手を当ててため息をついた時、尚子の体が浮いた。

「……ちょ、ちよっと!」

うまいこと、尚子の着ている着物だけをくわえて、獣が尚子の体を持ち上げたのだ。

ばたばたと手足を動かして暴れている尚子を、獣は何食わぬ顔で、ぽいつと自分の背の上に放り投げた。

「う、うわああ……あれ?」

ぐるりと空が一回転したかと思えば、ふわふわな白銀の毛の中に尚子はいた。

『つかまって』

「!?!」

尚子の心臓がどくんと脈打った。

(今の声は 驚太!?)

尚子はきよろきよろと辺りを見回した。しかし、尚子の探していた少年の姿はどこにもない。

空耳だったのかと落胆した尚子に、再びその声は“聞こえた”。

『動くよ!』

「驚太！？ 驚太なの！？」

尚子は必死で少年の笑顔を探した。だが、自分以外の人の気配はまったくしない。

『大丈夫、ちゃんと聞こえているよ』

その声は、尚子の頭の中に直接響いてくるようだった。

「どうなってるの？ 驚太はどこにいるのだ！」

落ちないように、しっかりと獣の毛をつかんだ尚子は、体をひねり、死角になっていた獣の足元付近に視線を落としたが、結果は変わらない。

『僕は大丈夫。それよりも、早く逃げよう。追っ手がこっちにも向かってるはずだよ』

ぐらりと尚子の体が大きく揺れる。獣が立ち上がったのだ。尚子の視野がさらに高くなり、広がった。村から立ち昇る煙が、はつきりと見える。

「だめだ、行けない。村が！」

『村には連れていけないよ。姫様のお命を守ることが、僕が“ここに”にいる理由だから。危険なところには連れて行けない』

「それでも、私は行かなければならない。皆が危険な目にあってるというのに、私だけ守られるわけにはいかない」

『それもダメだよ。松吉さんにも、姫のことを頼まれてるんだ』

「ならば、一人で行く」

尚子は自分の背丈の倍はある高さから躊躇せずに飛び降りようとした。が、間一髪、ため息交じりの声が制止する。

『わかったよ。僕が行く。僕がみんなの様子を見てくるから』

「え？」

『姫は先に小次郎様の国へ逃げて。僕はすぐに追いつくから大丈夫。それでいい？』

驚太の声は有無を言わせない強さがあった。しかたなく尚子は従うことにする。

とは言え、尚子が一人で行っても大して戦力にならないだろうこ

とは目に見えていたし、自覚もあった。

尚子ではなく、この大きな狼が姿を現せば、父の軍勢も戦意を喪失させるに違いない。

父の従える追っ手も、尚子にとっては、大切な自国の民。誰一人死んでほしくないのだから、戦わずして皆を救えるならばそちらのほうがいい。

そんな打算があつたのも確かだ。

「わかつた。でも、馬も逃げてしまったし……」

『……雪白』

鷲太は、白猫の名前を読んだ。

すぐさま、白き獣は大きなとがった耳を左右に動かしはじめた。

そのたびに、獣の左右それぞれの耳から出た二束の長い毛が、まるで触覚のようにゆらゆらと揺れている。

数秒の後、尚子たちの前に、一頭の馬が姿を現した。先ほど逃げていった馬だ。

尚子は信じられないと、目を丸くする。

「どうなってるんだ！」

「驚かせてごめん、て謝っておいたからもう大丈夫だよ。さあ、行って」

今はそんなことを気にしてる時間はない。そうでしょ？

そう鷲太の声に必死さがこめられていた。だから尚子は渋々、うなずく。

獣が再び姿勢を低くし、頭までもを地面にぴたりとくっつけ、伏した。

『さあ、頭の方からすべり降りて』

尚子は言われるままに、獣の頭部へよじ登り、両耳の間を四つんばいになって通ると、大きな額の上にすわり直した。

そして、鼻筋を滑り降りるようにして、軽やかに地面に足を付けた。

「この先に、少し開けたところがある。そこから川原の方へ向くと、

一本の木が見えるはずだ。その木の下で小次郎と一緒に待っている」
言い終えると、尚子はさっと馬に飛び乗った。そして頭上を見上げる。

先ほどよりだいぶ高くなった月が尚子たちを見下ろしていた。あと一刻（約2時間）ほどで、真上に達するだろう。

「あの月が真上にくるまでに、村の皆を連れて戻ってきなさい。その広い背中なら、皆を乗せることもできるでしょう。私が新しき国で、皆の面倒を見るから、安心してつれておいで」

獣は、返事の変わりに、すくつと立ち上がった。

獣の耳が、再び先ほどのように、ぴくぴくと左右に動いた。

突如、尚子を乗せた馬が、小次郎のいる桜の方へと向かって走り出す。

何の指示もしていないというのに、まるで自らの意思で、尚子を運んでいるようだった。

あわてて、尚子は馬に捕まりながら、後ろの獣を振り返った。

「約束だ。誰も死んではいけないよ！」

獣は赤い目でじつと尚子を見送っている。

「待っているから！！ 皆を、ずっと待っているから！！」

尚子がそう言い終える前に、馬は全力で走り始める。すでに遠く離れた尚子からは見えなかったのだが、獣の耳がまた動いていたのだ。

突然のことに、尚子は振り落とされぬように、必死に馬にしがみつき、舌をかまないうちに、黙るしかなくなった。

それから数分、身動き一つせずに、尚子の後姿を見つめていた赤い目が動いた。

次の瞬間、そこには獣の姿はなく、代わりに、不自然な風が木々を揺らし、かすかな血の匂いを舞わせていた。

(6)

『松吉さん』

松吉は薄れ行く意識の中で、確かに聞いた。

(……驚太……?)

まぶたを開ける力も残されていないのだろうか。
体が鉛のように重い。

何とか、頭を動かそうと、力を搾り出したとき、村が再び騒然とした。

「わああああーっ!!」

「助けてくれええーっ!」

聞き覚えのない男たちの死に瀕したような叫び。村の入り口方向から聞こえてくるようだ。村の外を取り囲んでいた扶の私兵のものに違いない。

松吉は、寄りかかっていた鮎太郎の手を借りて、なんとか上半身を起こし、村の入り口を見やる。

「……………」

ふと、村の外に再び、静けさが戻った。

静かすぎる。

不自然なくらいだ。

誰もが、今のは何だったのだろうか、と思った時、村を取り囲む生垣の一部が炎を上げて一気に燃え上がった。

「ぎゃああああーっ!!」

突如、村を引き裂くような悲鳴が再び上がった。

その声に驚いた鮎太郎がびくりとなって、鮎太郎が手を添えていた松吉の肩を揺らす。

次の瞬間、激しい炎の塊が村の入り口に現れた。

（……まさか人か！？）

炎の中に、人の影がなんとか確認できた。

それほどに、炎の勢いは激しく、誰にもどうすることもできなかった。

呻きながら右に左にのた打ち回る炎の塊が、ついに動かなくなるまで十秒間。

その場にいた誰もが息をすることを忘れた。

村は水を打ったような静けさに包まれた。

明らかに、何か恐ろしいことが起きている。尋常ではない何か。松吉は、固唾を飲んで、村の入り口を見つめる。その視線の先で、パチンと、垣根の枝が炎の中で弾けた。

そして、それは 姿を現した。

（な、なんだあれは……）

松吉だけでなく、その場にいたすべての者が同時に息を呑む。文字通り、災厄が歩いてきたのだ。

白く輝く毛をもつ、大きな獣の形をした災厄が！

その大きさや、牙の鋭さもさる事ながら、松吉の目を奪ったのは、その体を取り囲む赤い炎。

確かに、炎に覆われているというのに、白い毛が燃えている様子もなければ、熱さを感じている様子もない。文字通り、炎に“包まれて”いるのだ。

同じく激しい炎に包まれていた先ほどの男とは、似て非なる光景が、いつそこの恐怖心を生み出すようだった。

このままでは、あのバケモノに殺される！
さっきの男のように。

生きたまま焼き殺される！

そう想像するのは一番自然なことだ。松吉ですら、火だるまになった自分の姿を一瞬、想像した。

「……バ、バケモノだ！」

誰かが、声を発した。その声は、まるで水鏡に一滴の雫をたらす様に、静まり返った村に波紋を生んだ。

いつせいに人々が、逃げ場を求めて、走り出す。

恐怖から逃れるため、我先にと駆けていく。しかし、先ほど自分たちが着火した家屋の炎は、もともとそれほど広くはない家屋と家屋の狭間に、横いっぱいにはみ出し、行く手を阻んでいた。おかげで、無傷で通過できそうな道幅は、せいぜい一人通るのがやっとというところだろう。

そこへ多くの者が殺到すれば、無理が出る。

その浅ましさといったら、無かった。

兵士たちの殴り合い、蹴飛ばし合いが、すぐにあちこちで目につくようになる。それが殺し合いとなるまで、時間はかからなかった。しかし、村人たちの多くは、その争いの中心にはいなかった。出遅れたものがほとんどだからだ。

鮎太郎も、思わず腰を上げたものの、動けない松吉のことが頭をよぎって、その場で立ち尽くしていた。

そこへ、同じくその場から動かなかった肝の据わった男が、大きな声を上げた。

「何をしている！！ 矢を放つのだつ！！」

村に扶の太い声が響きわたった。六割ほどの扶の私兵が、ぎくりとなって、動きを止めた。

争いあっていた者たちも、お互いに顔を見合わせたかと思うと、持ち場に戻った。一瞬で本分を思い出したのだろう。

結局、二十余名が主人と獣の間に立ち、弓を構えた。

「放てっ！」

扶の声にあわせ、無数の矢が放たれた。矢は放物線を描いて、いつせいに獣に降り注ぐ。

（やったか！）

兵士たちの奮闘ぶりを見守っていた松吉も、眼差しに期待をこめた。さすがの獣も、これではひとたまりもないだろう。

しかし、すぐに期待は絶望となつて、松吉を凍りつかせた。

（矢が……消えた……。一つ残らず……）

放った矢は、獣を傷つけることはおろか、触れることすら出来なかった。白き獣を包む炎が、一瞬にしてすべての矢を焼き消したからだ。

矢は、まったく無力だった。

誰もが戦意を手放し、立ち尽くす中、ついに獣が動いた。

松吉が瞬きをした次の瞬間、白き獣は兵たちの手の触れそうな距離に、悠然と立っていた。

（なっ……そんなに早く動けるのか！）

兵士たちより少し後ろにいた松吉は、ぞくりと寒気を感じた。

これでは、狙われたら逃げられない。矢も歯が立たないというのに。

つまり、戦うことも逃げることもできないという絶体絶命の状況にあり、それに気がついたのは松吉だけではなかったようだ。

「わああああーっ！！」

一人の兵が、たまらず悲鳴を上げて、逃げ出した。

彼が地面に投げつけた弓を目で追い、その後姿にあっけにとられていた他の兵たちも、駆り立てられたように逃げ出した。

これで、松吉たちの姿が獣に晒されることとなる。

（！）

真っ赤な燃えるような目が、まっすぐに松吉を捕らえた。

本当に獣であれば、動くものを目で追うだろう。それなのに、白

き獣は逃げ惑う兵たちには目もくれず、ただ一点を見つめていた。今度はゆっくりと、獣の足が前に踏み出される。足音がしない。

(！)

松吉は、はっとした。

あきらか、獣の鋭利な視線は自分に注いでいる。

(……ワシ……か?)

獣の標的は、自分だ。

ほかの人には、まるで興味がないようにも見える。

こんな大勢の中から、なぜか自分が狙われている。

先ほどは、一瞬で、標的の前に移動した獣は、まるで松吉の反応を確かめるように、大地を踏みしめるように、ゆっくり前進してきた。

また一步、松吉に近づいた時、すぐ隣にいる鮎太郎が小さな悲鳴を上げて、腰を抜かした。

背後にいる村人たちが、這うように逃げ出すのも、振り向かずとも気配でわかる。

だが、松吉は逃げようとは思わなかった。

獣の二つの赤玉から目を逸らすことなく、静かに見つめ返した。自分でも驚くほど、呼吸も落ち着いている。

「……ま、松吉さん！」

鮎太郎が、逃げよう、と松吉を促す。

その間も、獣は一步一步、松吉に近づいてくる。

と、その時だった。

『松吉さん』

松吉は、反射的に辺りを見回した。

「松吉さん？」

「今、驚太の声がしなかったか!？」

「何、言ってるんだ、こんな時にっ！ さあ、逃げよう！」

松吉には、確かに聞こえたのに、すぐ近くにいる鮎太郎には聞こえなかったようだ。

だが、確かに驚太の声だった。
空耳だったのだろうか。

いよいよ、死期が近いということだろうか。

松吉が小さくため息をついた時、再び松吉の頭に声が響いた。

『松吉さん。僕だよ』

無言で、松吉は前方を見た。獣の瞳が煌く。

ふわりと柔らかな風が、松吉の髪を揺らしたかと思えば、松吉のすぐ目の前に、獣が瞬時に移動した。

いつの間にか炎が消えていて、触れるほどの至近距離で見た獣の白い毛は、透き通るように煌いて見えた。触れば羽毛のように柔らかく、お日様のいい匂いがしそうだ。

「……驚太なのか？」

松吉の手が、吸い込まれるように獣の鼻先に伸びていく。

『そうだよ。僕だよ』

「本当に、驚太なのか？」

松吉の瞳をじっと見つめながら、獣は口端を少しだけ上げた。
(笑った……?)

『みんなを迎えにきたんだ』

その瞬間、この恐ろしい獣が、確かに驚太に見えた。

「……………」

最西の部屋に一步踏み入れたところで公雅は言葉きんまさを無くした。

まず彼を襲ったのは、臭気。部屋のあちこちから立ち込める血生臭さ。

胃を乱暴にかき混ぜられたような吐き気を覚え、公雅は慌て庭に駆け込んだ。

胃液を吐き出し、咳き込めば、口の中の苦さより何倍も強い嫌悪感が、彼を襲う。公雅の脳裏に、一瞬で、凄惨な殺人現場の情景が焼き付いてしまっていた。

藤乃があそこで首をはねられた。そのむごい情景が、簡単に想像できるほどおびただしい量の鮮血が、部屋の中央からあちこちに飛び散っていた。なんともおぞましい光景だ。

父の話では、藤乃は盗賊を姉の部屋へと手引きし、抵抗する義兄を縛り付け、盗賊逃走の手助けをしたという。そのため姉の誘拐後、藤乃は扶によって処刑された、と。

公雅は再び、変わり果てた姉の部屋に足を進めた。

「……………」

部屋の入り口に立った公雅の顔が、苦々しく歪む。

彼のよく知る姉の部屋だというのに、その面影はどこにも無い。

倒れた記帳。

粉々に砕けた油差しの皿。

その日も皺しわ一つ無く床に敷かれただろっ寝具は、ぐちゃりと折れ曲がり、枕もあさつての方にある。

どれほどに、激しい格闘がくりひろげられたのだろうか。

きっと義兄が、体を張って盗賊から姉を守ってくれたに違いない。容易に、義兄がその背に姉を隠し、それでも、多勢に無勢ではなすべがなかったのだらう。

扶の無念や、姉の恐怖にふるえる顔が目に見え、公雅の胸はぎりぎり締め付けられた。

（それにしても……信じられない）

本当にあの藤乃が姉を裏切っていたというのだろうか。あの、姉が人生のすべてだ、と全身全霊で訴えている女官が！

だが、そう簡単に、警備の目をかいくぐり、多くの女官に気付かれることなく、姉の部屋へ忍び込むことができるだろうか。その上、乱闘の末に姉を拉致していくなど、不可能だ。

確かに内通者がいれば、話は別だが……。

（……本当に、あの藤乃が……姉上を裏切っていたのかな……）

公雅が、腕を組んで思い悩み始めた時、にわかに屋敷の外が騒がしくなった。

はっとした公雅は、すぐさま、きびすを返す。

（父上が帰ってきたに違いない！）

もつと詳しいことが父から聞きたい。何かが引つかかる。
大股で廊下を歩きながら、建物の外へと出た。

すると、すぐに、門のところにいる父の姿が目に入る。

(……え！？)

公雅は、自然と駆け足になりながら、だんだんと大きくなる父に視線を送り続けた。

だが、そこには、馬にまたがった父の姿と、明らかに狼狽えている馬番しかいない。馬番は、父が敷地内に姿を見せた直後に駆け寄ったのだから、つまり、父がたった一人で戻ってきたことになる。あれほどに家臣を従えて出ていったというのに。そもそも、国の主たる父が、単独行動をすることがありえない。同行した家臣たちが、それを許すわけがないのだ。

しかも、父の様子もおかしい。

まるで、どこをどう通ってきたか覚えてないというように、呆然と一点を見つめている。馬を降りようとしないう。

不思議に思った馬番が首をかしげ、おそろおそろ馬上の父に声をかけたのが見えた。

「と、殿……」

しかしまったく反応がない良兼に、馬番はとほと弱り果てた顔になる。きっと、父は戻って来てからずっとこの調子なのだろう。どうしていいかわからないようだ。

「父上！」

やっと、声の届く距離にきた公雅は父を呼んだ。父が首だけを動かし、こちらを見る。

しかし、やはり様子がおかしい。

(まさか……！)

公雅の全身をざわざわとした悪寒がかけ上がった。

何かあったのだろうか。天下一、気丈な父が心を壊すような、衝撃的なできごと、
愛娘の死　　のような！

（姉上が死んだなんて、そんなことあってたまるかつ！）

「あ、姉上は！？　一緒ではないのですか！？」

公雅は声を荒げながら、すばやく姉の姿を探した。そして、はつとなる。騎乗している良兼の背後に、何者かの下半身が見えたからだ。

「……姉上！？」

弾かれたように、公雅がその人物を馬から引き降ろして、息を呑んだ。見覚えのある顔だ。

すぐに、姉の背後にいつも控えていた男だという考えにいきつく。

「これは……姉上の……」

ぐったりとしたその男は、かろうじて息をしていた。

なぜ、姉の共が一人で！？

しかも、瀕死の状態で！

「おい、姉上はどうしたのだ！！　おい、しっかりいたせつ！！」

力任せに公雅は男をゆすつたが、完全に意識を手放しているため反応が無い。すると、頭上から父のかすれた声が振ってきた。

「手当てをしてやれ」

それだけ言うと、良兼は馬を引き返した。再び、ゆっくりと屋敷を出て行こうとする。

「父上！？」

公雅はあわてて、父の背中に声をかけたが、父は見向きもしない。

「お、おまちください！！　お一人では危険です！　であええー」

！！　急ぎ、父上の供をせよーっ！！　であえ、であえ！！」

夜盗が逃走したと騒がれている中、父を一人で行かせるわけにはいかない。

だいたい、今の父は抜け殻のようだ。いつもの父のように、息子の自分ですら震え上がるような、恐ろしさがない。そんな父を一人で行かせていいわけがない。

（父上……何があったのですか……）

良兼が振り返ること無く、街道を西へ進んでいく。

間もなく、公雅の呼びかけに答え、屋敷に残っていた兵たちが姿を見せた。すぐに父を追うように、指示を出す。

その様子を見守りながら公雅は胸が詰まる思いがした。彼には父の背中が寂しげに見えた……。

「迎えに？」

鷺太の声が聞こえない鮎太郎には、松吉が独り言を言っているようにしか聞こえない。気でもふれたのかと、鮎太郎が声を荒げた。

「松吉さん！？ いったいどうしたっていうんだ」

「鷺太だよ！」

松吉は、強い力で鮎太郎の腕をつかんだ。

「この獣は、鷺太だと名乗ったんだ、ワシに！」

「……なんだって？」

鮎太郎が険しい顔で松吉を見下ろしている。

そうだろう。信じられるはずが無い。松吉とて、信じ切れない。

あの鷺太が、この恐ろしい獣であるはずが無い。

鷺太のはずが無いのだ！

（だけでも、鷺太なんだ！ 誰がなんと言おうとも、ワシにはわかる。これはワシの息子の鷺太だ！）

その根拠ならある。

だが、それを言ったところで、鮎太郎は納得しないだろう。

獣に触れた手から、暖かな何かが流れ込んでくるのだ。

懐かしい気持ちちが松吉に注ぎ込まれていく。胸が、つまるほど、懐かしい。

鷺太がいて、多恵がいて。

三人で笑い合い、狭い我が家で体を寄せるようにして、寝起きを

共にした。

あの日々が次々に、そして、鮮やかに蘇ってくる。

（鷲太が、これを見せているのか？）

思わず、心の中で松吉はつぶやいた。

『そうだよ。僕は、こんな姿になってしまったけど、何も変わらない。僕はあなたの息子の鷲太です。松吉さんと多恵さんの、息子の鷲太です』

言葉にしていけないのに、返事があったことに松吉は驚いた。だが、もう疑うことはない。

赤く穏やかに輝く二つの目を、まっすぐにとらえると、松吉はこくりと頷いた。

『みんなを僕の背中に乗せて』

（わかった）

松吉は、勢いよく鮎太郎を振りかえった。

その鮎太郎の肩ごしに、ツネ婆を含む六名の村人と順々に視線を合わせていく。

「鮎太郎。ワシらは助かった。鷲太と一緒に逃げよう」

「正気か！？ こんな獣が鷲太のはずがないだろう！ 殺されちまう！」

「大丈夫。見てみる、ワシが触っても死なないじゃないか」

「……だけど！」

「わかったよ。獣が鷲太だと信じられないなら、ワシを信じる。ワシが皆を助ける。だから、信じてワシの言うとおりにしろ」

「……………わかった」

「さあ、皆を獣の背中に乗せるんだ」

鮎太郎は、じつと松吉を見つめ返した。

信じられないのはわかる。鷲太の声が聞こえないのなら、なおさらだ。

だが、今は松吉の言葉を信じてもらうしかない。それが、生き残った村の皆を助ける唯一の方法に思えた。

だから、自分の言葉を信じる。

松吉の瞳に、強い光が宿る。それは、鮎太郎の中で何かを動かした。

鮎太郎は、力強くうなづく。そして、松吉の指示に従うために、背後の村人を振り返ったちょうどその時。

何かが頭上を通り過ぎていった。

はらはらと鮎太郎の毛が、数本地面に落ちていく。

松吉も、それを目で追った。

ギヤイイイイ。

この世のものとは思えぬ音が、空気を揺らした。

金属をこすり合わせたような甲高い音に、耳を塞がずにはいられない。

それでも、聞こえてくる。

どうやら、耳を通して聞こえているわけではないらしい。まるで頭に直接響くようにも感じた。

松吉が、耳を塞ぎながら、振り返ると、白き獣の首もとに一本の矢が突き刺さっているのが見えた。

獣は激しく、もがき苦しんでいた。そのせいで、矢の根元から止めどなく、紫色の液体が流れてくる。

「……驚太ーっ!!」

松吉は鬼の形相で、その矢を射た人物を振り返った。

「なんだ。刺さるではないか」

斜め後方に、口端に不適な笑みを浮かべた扶が仁王立ちしていた。左手には弓を握ったまま……。

「手こずらせおって」

扶は、吐き捨てるように言った。そして、己の兵が、主を守る義

務と一緒に放り投げた矢を、片手で拾い上げると、すぐさま獣に向かって次々に放つ。

右後ろ足を集中的に狙った矢は、吸い込まれるように、足首、もも、ふくらはぎに命中していく。

ギヤイイイイ。

「驚太ーっ！！ やめろ撃つなーっ！！」

松吉は必死で叫んだ。

獣が激痛に、身をよじるたびに、矢傷から飛び散る体液が純白の毛を黒く染めていく。

獣の右後ろ足のアキレス腱に矢が刺さった時、ついに獣はバランスを失うように膝をついた。

「驚太ーっ！！」

やめろ。

やめてくれ！

息子が死んでしまう！！

扶が再び、弓を構えた。

「やめろーっ！！」

悲痛な松吉の叫び声が、村に響き渡った。

松吉には、幼き子供が痛みに泣き叫んでいるようにしか見えていないのだ。

松吉は、這うようにして、肩で息をする獣に近づく。

ただでさえ一本しかない足。その残された足はほんの少し動かすだけで、先ほどの刀傷が焼けるように痛い。それでも松吉はやめない。

体をできる限り起こし、両手をいつぱいに伸ばすようにして、獣と扶の間に入った。

だが、扶はかまわず弓を構え、矢を放つ。松吉は力の限り左に飛んだ。

矢は松吉の左腕の脇すれすれのところをすり抜け、獣の体に突き刺さる。獣が悲鳴をあげるのと同時に、松吉の体は、重力のままに、地面に強く体を打ち付けることになった。

「……くっ」

再び苦しみに鳴き叫ぶ獣の声は、松吉の胸に突き刺さって、激しい痛みを生んだ。全身を襲う怪我の痛みよりも、はるかに強烈に。まるで胸をえぐられたように、痛んだ。

「……しゅう……た……」

貧血で、うまく力の入らない体を引き寄せ、上半身を起こそうとした。

腕が小刻みに震え、言うことを聞かない。

それでも、松吉の意志が勝った。絶望と痛みよりも。

ふらふらと、松吉は立ち上がった。

いったいどこに、そんな力が残されていたのだろうか。傷ついた片足で、両手をいつぱいに広げ、自らを的にするように。

松吉の黒々とした目に、炎が宿った。その炎は、誰も容易には消すことはかなわない。

もう、これ以上息子を失うのはごめんだ。そんな思いが、今の松吉を動かしていた。

（今度はワシが守ってみせる……！）

松吉には、三人の子がいた。が、いずれも幼くしてこの世を去っている。

最初の子は生まれた時すでに息をしていなかった。その後生まれ、息子たちは、いずれも利発な子で、夫婦はこの子たちを実に可愛がった。

だが、末っ子が言葉を覚え始めた頃、村に蔓延した流行り病で、二人の息子は同じ日に息を引き取った。

その日から、多恵は、丈夫な子に生んでやれなかったと、自分を責めた。そんな多恵が日に日にやつれていく様を見て、かけてやる言葉を捜すのに苦労する毎日だった。

松吉も、悲しみの底なし沼から抜け出せないでいた。頭から離れないのだ。

末の子が、息を引き取る間際に、言った言葉が。

あの光景が。

高熱にうなされ、松吉に伸ばされた助けを求める小さな手。

とおちゃ……。

覚えたて言葉で、この父を呼ぶ声が……。

それからというものの、夫婦で話し合ったわけではなかったが、もう子供は持つまい、と二人とも思っていた。

良尚と出会ったのは、その後のこと。

よく笑い、よく泣く、実に素直な子供だった。

松吉は、そのまっすぐな少年の姿に、失った自分の子供の姿を重ねていた。きつと、末の子が生きていれば、あのくらいの年になっ
ていたはずだ、と。

多恵に笑顔が戻ってきたのも、その頃からだったと記憶している。その、息子同然であった良尚が、本当の息子を連れてきた。

事情はよく聞かなかったが、多恵が笑っているから、それでいい
と思った。

そこから、松吉たち夫婦は、毎日が幸せだった。

たとえ血が繋がっていないくとも、長い月日を共にしていなくとも。自分たちは親子だった。

きつと多恵もそう思っていたに違いない。

（多恵と一緒に探しに行くって約束したんだよ、鷺太と二人で！）

松吉はぎろりと扶を睨んだ。

二度と子供を奪われるわけにはいかない。

苦しむ息子の姿を。

助けられず、ただ見守ることしかできないもどかしさを。

己の命を失うよりも、苦しい痛みを味わうくらいなら……。

（ワシが死んだほうがまだ！）

松吉の気迫は、確かに扶を驚かせたようだ。不思議なものを見るように、扶の視線が小さく揺らいた。

なぜ、松吉が傷だらけになりながらも、この獣をかばうようなそぶりを見せるのか理解できないのだろう。

『松……吉さん……！？』

獣の荒い息が松吉にかかる。松吉は、振り返らずに心の中で強く叫んだ。

（逃げる！！ お前がここを離れるまで、ワシは動かん。早く逃げる！！）

『でも……僕は良尚様と約束……したんだ』

（ばか者！ 父の言うことが聞けないのか。ワシはお前に、若様の命を託したんだぞ。お前の役目は、若様を守ることだ！！ お前が本当にワシを父だと思うならば、父の命令に従え！！）

『でも！！』

（さあ、行け！！ ぐずぐずするな！）

『わかったよ……父さん』

松吉の背中がびくつと揺れた。

……父さん……。

最後の言葉が松吉の胸に響いた。

松吉はゆっくりと獣を振り返った。松吉を見つめ返す獣。ふわりと松吉の顔が笑顔に包まれた。

（行け）

返事をせず、獣は姿を消した。

つむじ風のような激しい風を後に残して　。

（……父さん……か）

松吉の頬を、一筋の、熱い雫が流れていった。

己の最後に聞く言葉が……息子が自分を呼ぶ声だというのも……。

「悪く……ない……な………」

「松吉さん!!」

張り詰めていた糸が切れたように、松吉の体がぐらりと揺れ、その場に崩れ落ちていく。すかさず鮎太郎が受け止めた。

気を失った松吉の顔は、生きていることが不思議なくらい土気色をしていた。

その時だった。

この国の当主、たいらのよしかね平良兼が、この滅びかけた村に姿を現したのは。

瀕死の男を息子の公雅に預け、ふらりと単身、屋敷を後にした良兼は、馬に揺られていた。馬はある場所へと、のんびり向かっている。

良兼は小さく息をこぼすと、心のなかでつぶやいた。

(あの香りは……もしま……)

彼は、白き獣に対峙してからというものの、ずっと一つのことには捕らわれていたのだ。

あの香り。

そして、あの気配。

確かにあれは……。

だが、そのはずはないのだ。

しかし……。

その答えを探しに、自分はそこへ行かなければならない。

あの桜のもとへ。

ふいに、背後に多くの気配を感じた。屋敷に残っていた家臣たちのようだ。

公雅が、自分の身を案じて、後を追わせたのだろう。嫡男としては賢明な判断ではあるが、今の良兼はそれを必要としていない。一人になりたかった。

（そももいかぬか……）

当主に何かあれば、国が傾く。虎視眈々と領地を狙うものがこの板東には多すぎるのだ。

（……ままならぬものよ）

もう一度、小さくため息を吐き出すと、良兼は西の空を仰いだ。すると、暗闇の中に、さらに漆黒の煙を吐き出す火柱がいくつも上がっているのを見た。

あれは、先日、尚子が盗賊に襲われたと言っていた村の方角。今そこには、扶が居るはずだ。

なぜ炎が上がっているのだ。
何が起きているのだ。

ふと良兼の脳裏を、扶の妖しい笑みがよぎった。先刻感じた嫌悪感と警戒感が、さっと全身によりみがえる。

「……………」

良兼の顔に険しさが戻る。

（調子にのるなよ、若造）

この国の領地で、好き勝手するものは、誰だとして許さない。
たとえ、強大な力をもつ源氏の嫡男だとて、悪戯がすぎれば容赦はしない。

「村へ急ぎ参る。後から参れ」

良兼は従者にそれだけ言うと、馬の腹を蹴った。

村の入り口に姿を現した良兼は愕然とした。

「扶殿。これはどういうことだ」

首を左右に動かし、村を見渡す。

すでに、まともに形をとどめる家屋はない。その上、炎に包まれた家屋の脇には、多くの遺体が転がっている。

ひどい有様だ。とても、人が住む場所ではない。

「これはこれは。義父上様。どうしてこのようなところに？」

さわやかな笑顔を携えて、扶がゆつくりと歩み寄ってきた。

その白々しさに、良兼の口元がかすかに歪む。

「村から煙が上がっているのが見えた。これはどういうことなのだ」
「この村の住人が、得体の知らぬ獣を飼いならし、近隣の村々を襲っていたということを突きとめましてございます」

「う、嘘だ！！ そんなの嘘だっ！！」

扶と良兼のやり取りを見守っていた一人の青年が、急に声を荒げた。

身なりから、この村の住人だとわかる。よく見れば、腕には中年の男を抱えていた。中年の男は血の気の失った顔で、意識もない。虫の息といったところだ。長くはもつまい。

「ここは私にお任せくださり、良兼殿はお屋敷にお戻りください」
敵意むき出しで、村人が扶を睨みつけている。しかし良兼には、彼が嘘をついてるようには見えない。

どちらの言葉を信じるべきか、明らかだった。しかし良兼は静かに扶に問いかけた。

「つまり、こやつらが、近隣の村を襲っていた盗賊だったということとか？」

「そのようです」

「ということは、私の娘をさらったのもこやつらなのか？」

「そうかもしれない。私が必ずや、姫の居所を吐かせ、助け出し、みせましょう。安心して屋敷にお戻りください」

良兼は、黙って扶を見つめた。そして、再び村人たちに視線を落とす。

（どうも、私を追い返したいようだ。私に知られたらまずいこともある、かのように）

いったい何を隠そうとしているのか。

暴き出して欲しいらしい。

皆の前で恥がかきたいのなら、その要望に応えてやらぬこともない。

良兼は、扶にかまわず馬を下りた。

そして、村人たちに向かって足を進める。

「殿様！！ こいつにだまされちゃいけねえ！！」

後方の老婆が、良兼に向かって声を張上げた。

「殿様！？ あんたが良尚様の！？」

けが人を抱えた青年が、良兼をまじまじと見た。

「いかにも。私が、この国の主だ。今、良尚と言ったか？」

「そうです。俺らは、良尚様に命を救われたから、こうして生きていられるんです！ 良尚様が、俺らを盗賊から救ってくださった！」

「ほう。そなたたちが盗賊なのではないのか？」

良兼は、それはおかしいことだ、と眉をひそめて見せた。

どちらかが嘘をついている。

この国の当主に。

それは死にあたいする不敬。

さあ、いったい、どちらが真実なのだ。

良兼は、わざとらしく、腕を組み、悩むふりをした。

すると老婆が、駆け寄ってきて青年の横に並んで、ひざまずいた。

「盗賊のわけがないっ！ この老いばれまで、お救い下された若様を、ワシらはお慕いしております。そんなワシらが、若様の大切に思ふ民の命を、民の生活を脅かすとお思いか！？」

「……………」

「殿……様……………」

そこで、青年の腕の中で、中年の男がかすれた声を出した。 気絶しているのかと思っていたが、意識はあったらしい。

「……盗賊に……村を襲わせたのは、そのお方です」

中年の男は、重そうな臉を半分だけ開けて、視線だけでそのお方扶を指し示した。

「……………なに？」

良兼の眉がぴくりと動いた。彼も予想していなかった言葉に、耳を疑う。

扶が村を襲わせた？

それが本当ならば、捨ておくことなどできない。

扶がひとりでやったことか。それとも　父の源護みなもとのまもるがやらせたことか！？

（源護め！　よもや、この国の力を弱め、この私を殺そうとしているわけではあるまいな！）

良兼は静かに扶を見た。扶の顔には動揺は見られない。

「たわ言でございます。耳を貸しますな」

表情を変えずに扶はそう言ったが、この男ならば白を切り通すことなど容易いだろう。

それに、もし扶が村を襲っていることが真実だとしても、証拠なく問い詰めれば返り討ちにあうに違いない。

（どうしたものか……）

良兼は再び村人たちに視線を戻した。

その真剣な瞳には、偽りの色は微塵もない。

良兼の視線をうけ、中年男は再び、かすれた声で訴える。

「殿さま……この方が……盗賊を……」

男は痛みに顔をゆがめ、ついに、言葉がつむげなくなった。代わり、老婆が続ける。

「盗賊を使つて、村を襲わせ、女子供、食料を奪い、村に火をつけて回つてるのです。さっき自分でそう言っていた！」

「無礼な！　私を盗賊と言うか！　切り捨ててくれる」

扶が、逆上し、刀を振り上げた。いや、逆上したように見せかけて、この者たちの命を奪おうとしているようにもみえる。

これ以上余計なことを言うな。そう扶の目が妖しく笑った。
「待て！」

良兼は制したが、扶はかまわずに刀を振りあげた。反射的に、村

人たちは体を硬くし、身構える。

刀の軌跡は完璧な弧を描く　　かと思われた！

ギャイイイイイ

悲鳴が空気を真つ二つに裂いた。

老婆のではない。

青年でもない。

悲鳴の主がわかった時、良兼ははつと息を呑んだ。

（先ほどの！）

真つ白な獣の首もとに、扶の振り下ろした刀が、深々と刺さっていた。

獣は、足元に三人の村人をかばうようにして、仁王立ちしている。

「この、死にぞこないがつ！！」

獣に食い込んだ刀を、扶が引き抜こうとした。再び獣を攻撃し、息の根を止めようと考えたのだろう。

だが、思ったよりも深く食い込んだ刀は、思うように抜けない。そうこうしているうちに、獣が頭を大きく振って扶を振り飛ばした。良兼の頭より高く、扶の体が宙を舞う。

残った良兼を、威嚇するように獣は歯をむき出しにした。

良兼の体は、石化したのかと思うほど、思うように動かなくなつた。

額には、いつの間にか汗が噴出し、手もぐつしより濡れている。

ギロリと赤玉の瞳がわずかに妖光を放ったような気がした。

すると、不思議なことに、良兼は、胸の奥底から何かが湧き上がってくるのを感じた。

見る見るうちに、陽だまりの中で寝転ぶ時のような、暖かさが体いっぱいにあふれていく。

（まずい……）

このままでは、先ほどと同じく、心を喰われる。

そう思ったが、もう遅い。

良兼は、いつのまにか、在りし日のぬくもりの中へと、さらわれ
ていった。

草の匂いにする。

小次郎は、両手両足を投げ出し、川原に寝転んでいた。頭上の桜木の葉の間からは、憎らしいほど美しい満月が覗いている。

「……オレはいつたいここで何をしているんだ」

そんなつぶやきも、川の水音に浄化されて、心地よいリズムだけが川原に刻まれていく。

五感のすべてが麻痺してしまいそうだと小次郎は思った。

自分のいた日常からは、想像できない世界だ。

草の匂いと土の温かさに抱かれながら、落ちてきそうなほど美しい月や星の光を浴び、さらさらと流れる水音の子守唄は小次郎をまどろみの世界へと誘惑していく。

「あとは酒と女がいれば、文句ないな」

独りごちた小次郎は、苦笑に顔をゆがめた。

(このまま、逃げてしまおうか)

小次郎はふと思った。

命をかけても手に入れたいと思えるような女と、このままどこかに身を潜め、二人で生きていこうか。

この腰の刀も、身分も捨て、名すら捨て。

かわりに農具を手にし、二人で子を育て、その日暮らした生活を営む。

そこには、贅沢な食べ物も、柔らかな絹着物も、イグサの香る新緑の畳もない。

おながが空く前に用意されるご膳も、思わずなでたくなる毛並みの駿馬だって手に入らない。

だが、同時に、失うものもないのだ。

自分の心を削る必要はない。

したいことをして、好きな者と一緒に、大して変わり映えのしない日々を、笑いながらただ生きていけばいい。

（きつと、そんなオレを見たら、あの伯父上殿はここぞとばかりに笑い倒すのだろうなあ）

小次郎は本当にうれしそうに笑った。

なんと、落ちぶれたことか。あの平良将の嫡子ともあろう男が。
たいらのよしまさ

そう世間は笑うだろう。

だが、どうだろう。

小次郎はさつと体を起こし、胡坐をかいた。そして辺りを見回す。
（そう笑うやつに限って、本当の贅沢というものを知らないのだろう）
かつての俺がそうだったように）

小次郎は尚子に出会った。

身分卑しき村の民と混じって、大声で笑い、喉がかれるまで泣く、懸命に“今を生きる”少女に。

己の感情のすべてを体いっぱい表現し、他者の感情を心のすべてで受け止める。

小次郎には、尚子の表情一つ一つが、まぶしく見えたのだ。

そうか、対話というのは、こういうものか。

言葉とは、これほどに心を伝え、染み入るものだったのか。

世辞と偽りの言葉しか知らなかった小次郎には、人を操るためにしか使うことの無かった言葉たちが、なんと新鮮なものとして生まれ変ることか。

他者には理解することは決してできないだろう。そう小次郎は確信する。

それほど、尚子を通して見た世界は輝いていた。

美しい世界で、自分も生きて行くことはできないのだろうか。

そんな淡い夢すら抱いてしまう。

（オレに、そんな生活が送れるだろうか？）

ザワワ。

不意に通り抜けた秋風。

ゆれた頭上の桜木に、笑われたような気がした。

お前には、この世界に留まる資格はない。

人の血の味を糧に、人を欺き、落としいれ、出し抜くことで高みを目指す。

そんな世界に生きるお前が、なぜ“ここ”に残れると思うのだ。

お前は、誰よりも赤い血を好むのだろうか？

生き血を吸わねば生きていけぬのだろうか？

五感を通して伝わる自然たちの姿が、自分を拒絶するためにざわめいたように感じた。

それまで小次郎を満たしていた心地よさが、次々に血なまぐさいものにならなくなっていくようだった。

口の中まで鉄くさい。

「……………」

わかっている。自分は、もうあの闇の世界から抜け出すことはできない。

一度、血の味を知ってしまった獣は、野生の、弱肉強食のおきてにしたがって生きていくしかないのだ。

わかっているのだ。

だが……。

真つ暗の世界を照らす、あの月のように、尚子は自分を導いてはくれないだろうか。

自分が、道を見失うことのないように。
人であることを忘れないように……。

ふと、小次郎の全身に緊張が走った。

ヒズメの音がする。

（追っ手か！？）

身構えたが、追っ手にしてはヒズメの音が一頭分しかない。

（尚子か！？）

小次郎は体を跳ね起こし、街道へ躍り出る。

前方から猛スピードで駆けてくる馬が見えた。ずっとしがみついていたのだろう、乗っている尚子にかなりの疲労が見える。今にも投げ落とされそうだ。

「尚子！！」

小次郎の叫び声を聞いて、馬の上の人影が顔を上げた。もうろうとしてるように見えた。

意識がそれたおかげで、ついに尚子は馬から振り落とされる。

小次郎は必死で駆け寄り、強く地面を蹴った。いっばいに伸ばした両手に、確かな重み加わる。

「おい、しっかりしろ！！」

「……う……馬は……」

小次郎は、言われて初めて、自分の失態に焦りを覚えた。

馬がなければ、この後二人で逃亡するのも、困難となるというのに、尚子にばかり気をとられてまったく忘れていた。

尚子を腕に抱きながらも、ぱっと半身をひねり、背後に馬の姿を
探す。

「……な……に？」

小次郎は拍子抜けした。

馬は、小次郎が先ほどまでいた、桜の木の下で水を飲んでいる。
てつきり、あのまま一目散に街道を駆けていってしまったものと

思ったので、その姿がにわかに信じられない。

信じられないが、助かったのは確かだ。

運が味方している。

得体の知れない、何かが、小次郎たちの背中を押している。そう確信した。

小次郎は、力強く尚子を抱き上げると、足早に馬の方へと歩み寄った。

今しかない。

時が見方してる間に、国へ帰るのだ。

腕の中で、尚子が呻くような声をだした。

川の水を口移して飲ませてやると、尚子はすっと和らいだ顔を見せた。

「行くぞ。国まで飛ばす」

「……ま……て……」

「もう、しゃべるな」

少しの間、尚子は、なおも何かを伝えようとしていたが、ついに意識を手放した。

その強情さというべきか、芯の強さというべきか。

思わず小次郎は肩をすくめたが、その目には愛しさがあふれていた。

まるで霧が晴れるように、良兼の目の前に、川原が広がった。風に草花が揺れ、良兼を手招きしている。

だが、何かがおかしい。良兼は首をかしげた。

前方の草木が次々に揺れて、波のように連なっている。風は、徐々に良兼へと近づいてきて、一気に通り過ぎた。良兼の着物が、ふわりと舞う。

それで、やっと良兼は異変の正体に気がついた。

(そうか……草の匂いがしない)

確かに目には鮮やかな、美しい川原が広がっている。しかし、そこに生き物の匂いはない。草木の匂い、土と水の混じる生臭さ、川音、鳥のさえずりさえもない。

良兼は、そっと川に近づき、右手を水中へと差し入れた。何も感じない。

流水は、良兼の指の間をすり抜けているように見えているというのに。

片手で流水をすくい、口に含んでみた。水の冷たさ、味は愚か、何かが喉を通過したという、感覚も得られない。

自分の五感は、いったいどうしてしまったのだろうか。視覚しか働いていないのか？

(私が狂ったか、それとも、すべてが幻か……？)

ふっと良兼の顔が緩む。

まるで、美しい世界から、自分だけがつま弾きにされているようだ。

お前には触れる資格がない。ここに留まることは許さない。

目に見えるすべての生き物たちが、そう自分を拒絶しているように感じた。

（血なまぐさい、日のあたらしめ世界が、自分には似合いということか）

川面が、日光を反射させ、きらきらと輝いている。空はどこまでも青く澄んで、目に沁みた。

（そうだな……もう、私には眩しすぎる。眩しすぎて、ここでは生きていけないだろうよ）

良兼は、目を伏せ、ゆつくりと川に背を向けた。

ここに自分の居場所はない。良兼の背が、うなだれているかのようになくなった。

ふと、その肩に、そっと誰かの手が添えられる。

確かな人の手の温もり、重みを感じ、良兼は、はっとなった。

いつのまに！ 先ほどまで誰の気配もなかったというのに！

幾多の修羅をくぐり抜けてきた彼の体が、本能的に身構え、勢いよく首を右にひねった。

（……！）

すぐ隣に、柔らかに、そして、華やかに微笑む女性の姿。

良兼は息を呑んだ。

夢でも、しばらく見る事ができなかった、彼女がほほえみかけている。

見て。雪のよう。

彼女はそう言うと、頭上いっぱい枝を伸ばす、桜の木を見上げた。促されるように、良兼も天を仰ぐ。

はらはらと、そよ風に舞う花びらが、二人に降り注いでいた。不思議なことに、良兼の頬に、今度は確かに風を感じる。

すると、どういうわけか、臭覚まで戻ってきた。

心が弾むように軽くなった良兼は、桜の華の香りをいっぱいに吸い込む。澄んだ空気が体中に沁みわたって、桜色に染まっていくなうだった。

花を愛でる心は、人を愛でる心の中に咲くそうです。

良兼は、そつと彼女の横顔を見つめた。

彼女は目の前に舞い降りた、一枚の花びらを両手ですくった。

今、私がこんなに花を美しく思えるのは、お慕いする良兼様に、慈しまれているからですわ。良兼様の隣にいるから、こうして美しい桜を見ることができるとですわ。

良兼は、天上に広がる桜華を見上げた。そして、なるほど思っ
た。

熱くなる目頭を意識しながら、自然と笑みがあふれる。

君の隣にある桜は、実に美しい。

財をはたいて手に入れた、宝石よりも。

血に手を汚してまで、奪い取った権力という美酒よりも。

何よりも暖かい……。

また、ここに桜を見にきましょう？

再び、彼女に視線を落とすと、満開の桜よりも、ずっとまぶしく見え、思わず良兼は目を細めた。

忘れていた、君の言葉を。

君はここに今も生きているのだね。

そうだ。

君は私に言った。

『私があなた様の心を守ります。

どんなに、あなた様の心が傷ついて、ぼろぼろに碎けてしまったとしても、私がそばに居ります。

あなた様の優しい心を、この世につなぎとめるための鎖となりましょう。

だから、あなた様は存分にお働きください』

そう言っ、彼女はいつも微笑みかけてくれた。だから、良兼はかろうじて人の心を保ってこれていたのかもしれない。

彼女が良兼の前から姿を消してから、いつのまにか、良兼の心は蝕まれていった。それが己で自覚できぬほどに。

良兼の父や祖父、朝廷で己の欲望のままに政治を動かさんとする大臣たちの醜さを見て、ああはならないと自分の心に、彼女に、誓ったはずだった。それなのに。

知らぬまに、権力という麻薬に飲まれ、野心の底なし沼にどっぷりと浸かって……自分では抜け出せなくなるとこまでできてしまっていた、ということか。

良兼は、ふっと笑った。

「そうだな。また桜を見に来よう」

彼女は、一面の花々が一気に咲き誇るような笑みを良兼に向けた。

ええ。この美しい、桜を。来年も再来年も、ずっとずっと、一緒に……。

「うおおおおおおっ！！」

良兼は、地獄のそこから唸るような扶の声で我に返った。

良兼の脳が正常に働くようになるまで、少しの時間を要した。自分は河原にいたのではなかったのか？

隣にいた彼女は……！

いや呆けている場合ではない。そうだ、自分には獣との死闘が待っていた！

良兼が思考回路を再起動させる間に、扶は良兼の脇から刀を抜き取り、白き獣に向かっていった。

（何っ！）

予想外の扶の行動に、良兼は度肝を抜かれた。良兼の刀一本で、手負いとはいえ、この強大な獣に立ち向かうとは、無謀としか言えない。

そんな男に、懷から刀を奪うことを許すという、隙を作った自分も悔しい。

良兼が、苦々しく口元を歪めた時だった。

良兼様……。

良兼の心臓がどくと脈打つ。

良兼は真っ直ぐに獣の目を見た。

良兼様は、人を愛でる心を持つ優しい方。

獣の目がきらりと瞬く。

もう恐ろしさを感じない。己の身の危険すら微塵に感じない。

この獣が自分に害をなすはずがない！！

なぜなら、真っ赤な瞳の中に、良兼は見たのだ。

確かに、はつきりと　　桜の花びらを……！

「バケモノめええーっ！」

扶が大きく刀を振りかぶった時だった。

ドン、と鈍い音と共に、扶が倒れた。後頭部を強打され、一撃で
気絶している　　良兼の手に握られた鞘によって！

「……………」

倒れた扶の姿と、鞘を持ったまま微動だしない良兼の姿を、交互
に見比べる村人たち。彼らの視線を感じながら、良兼は言い放った。
「源殿を、“丁重に”屋敷にお連れしろ」

それまで、後方で固唾を吞んで見守っていた従者たちが、弾かれ
たように扶に駆け寄った。

「それから、この者たちを屋敷に。至急、薬師を呼べ。ほかにも、
息のあるものは急いで手当てをするのだ。手分けをして、遺体の収
容も同時に行え」

てきぱきとした良兼の指示で、兵士たちが村を駆け回る。

そんな村の様子を、獣は静かに見守っている。

良兼の家臣の一人が、獣を意識しながら、良兼の足元にひざまず
いた。

「村人を問い詰めますか。姫の居場所を吐かせましょう」

確かに村人たちは、何かを隠しているにちがいない。だが良兼は首を横に振った。

「よい」

良兼は短く答える。

それを聞いた家臣は、ぽかんとした顔をした。

先ほどまでの、剣幕はどこへ行ったのだろう。地を這ってでも、草の根を掻き分けてでも、探し出せと、息巻いていた人と、同じ人だろうか。

「しかし」

「よい。そんなことをしている暇があれば、遺体の収容をせよ」

「……はっ」

兵士が去っていくと、そこには良兼と獣だけが取り残された。

「これでよいか」

良兼は、ふわりと表情を和らげ、獣に語りかけた。

「私も、娘の幸せを祈る気持ちは同じだ。相手があの男でなければ、素直に喜べたのだが。確かに骨のある男ではあるがな」

小さくため息をついた良兼は、静かに天を仰ぐ。

「いや、単に、娘に見損なわれたくないだけかもしれない。卑怯な手を使って、あの男を亡き者にするのは、情けない。それに」

良兼は言葉を切った。

人は人であることを忘れてはいけない。

自分は愚かで浅ましく、無力だ。

だからこそ、強大な力を手にしようとする。そのために、自分を見失ってはいけない。

自分が自分であることを。

自分の弱さ、醜くさ、愚かさも。

すべてが自分の一部であり、目を背けてはならない。

（君を亡くした寂しさを、いつしか野心で埋めようとしていたのか
もしれないな）

「次は、この平良兼らしく。正面から、堂々と、あの男の領地を手に入れてくれよう」

それまで娘は預けておこう。

扶とその一族の謀略の可能性が浮上した今、大切な娘をその渦中へと放るわけにも行くまい。

それに扶があのような多重人格であつたとは、全く気がつかなくなつた。

（全く私の目も、ずいぶんと曇っていたようだな……華姫が化けて出てくるわけだ）

さも可笑しいというように、口端を緩めた。

良兼は、再び夜空に妖しく浮かぶ満月を見上げる。満月は、天頂で煌々と輝いていた。

「それにしても……娘の父親とは、つまらぬものだな」

すぐに大きくなつて、この手をすり抜けていつてしまう。美しく、優しく、愛でて、慈しんだ華は、いつの間にか誰かの手で手折られ、奪い去られていくのだから。

良兼が再び獣に視線を落とした時には、もうその姿はどこにもなかった。

さらさらと、朗らかな音を奏でる流水は、天高くのぼった月を映し込み、閉じ込めている。

水面で反射した月明かりは、美しい宝石のように光輝き、獣の顔を照らしていた。

首筋や足から止め処なくあふれる体液は、ついに川へと流れ込み、水鏡の月を赤黒く染めていく。

ふわりと風が舞い上がった。

大きな桜は枝を揺らし、葉の歌声が囁くように獣に降り注ぐ。

獣はゆっくり目を閉じた。

あの人は、もうすぐここへ現れるはずだから、もうすこし待ってよう。

必ず来るはずだから。

でも、あの人は、なんというだろう。

言いつけを守れなかった自分に、がっかりするだろうか。

皆と一緒に連れてくるといったのに、自分ひとりで、のこのこ来てしまった。

けれど、あの方が殿様に任せておけば大丈夫だと教えてくれたんだ。

もう、あとは殿様が、必ず村の皆を助けてくれるからと。

獣は急激な眠気に襲われた。

なぜだろう。

このまま眠ってしまいたい。

でも、もうすぐあの人がくるから。

あの人の笑顔を、もう一度見たいんだ……。

おまえの名は、今日から鷲太だ。勇ましく、自由にどこまでも飛んでいけるように。

そう……あの方に僕が翼をあげるんだ……。僕の翼を……。

ザワワ……。

再び、夜風が桜木を揺らしたのと同時に、獣は動かなくなった。その顔はとても穏やかで、楽しい夢を見ているかのように。月だけに見守られながら……。

すると不思議なことが起きた。

獣の体から、無数の光の玉のようなものが飛び出してきたのだ。

青白く輝く、指先ほどの小さな光は、風に揺らめくようにして天へと上っていく。まるで最後の宴を催すように華やかに、命の喜びに満ちていた。

かつて、このような命の終わりを目にした人たちは、蛍と見間違えたに違いない。なんと幻想的な光景だろうか。

中に一つだけ、人目を盗むかのように、こっそりと別の方向へと浮遊していく光玉があった。

そして、その光は迷うことなく、桜の幹へと、吸い込まれていく。その様子に、他の光たちは気づく様子もない。

最後の光の玉が、獣から飛び出した時だった。獣のいた場所には、小さな小さな白猫が傷だらけとなつて息絶えていた。

よく見ると、その光だけ他のものと色が違う。形状も球体ではなく、鮮血のように赤く燃える、まるでの蠟燭の炎のようにも見えた。炎は、その白猫と別れを惜しむように、暖かな光を放ちながら、額近くを漂った。

そして突如、猛スピードで西の方へと飛び去ってしまった。

つぎには、河原は何事もなかったように、日常を取り戻した。

心地よい揺れの中に尚子はいた。臃気な意識は、なんとも頼りなく、再び手放してしまいそうだ。

うすら開いた瞼は重く、その瞳に届く光は弱々しい。あたりは闇に包まれていた。木々にさえぎられ、月明かりもほとんど届かない。完全に意識のない尚子を落とさぬように腕の中に抱えながらでは、流石の小次郎も馬を飛ばせない。人目に付かぬように、街道を離れ、薄暗い林の中を進むしかかったのだ。

「目を覚ましたか？」

尚子が僅かに身じろぎを、小次郎は見逃さなかった。そつと尚子の頬を叩く骨ばった手は、鉄さびの匂いがした。

「喉が乾いただろう。これを飲め」

小次郎から手渡された水筒を受け取ろうと、手を伸ばす。腕が鉛のように重い。

水筒をうまく水平に保てず、中の水がこぼれそうになる。

「しっかり持て」

慌て小次郎の大きな手が尚子の手を包むようにして、添えられた。首をひねり、振り返ると、優しい色をした瞳に見つめられた。

尚子の胸がぽおつと暖かくなる。

「どうした？ 早く飲め。楽になるぞ」

ふわりと微笑む小次郎の姿に見とれたまま、尚子は一向に動かない。しびれを切らした小次郎は、照れたように笑った。

「たく。寝ぼけているのか？ いつもの勇ましさはどうしたのだ。急に塩らしくなると、ちょっかいを出したくなるぞ」

そう言つて小次郎は尚子の手から水筒を奪い取ると、自分の口に

水を含んだ。

ぼけっとその様子を尚子は眺めている。

小次郎のたくましい腕が、ぐっと尚子の腰を引き寄せたかと思うと、小次郎の顔が目の前にゆっくりと降りてきた。

どきりと尚子の胸が弾む。

互いの唇がふれそうな、すれすれの位置で止まる。尚子から口づけよ、というのだ。

尚子とはつさに顎を引き、真っ赤な顔で小次郎を睨む。残念なことに、どうやらすっかり目が覚めたな、と小次郎は思った。しかない、この続きはまた国に帰ってから……、と悪ふざけをやめようとした時、柔らかな感触を唇に感じた。

驚きに見開かれる小次郎の大きな瞳。

ごくり。

のどが鳴る。尚子に口移しで飲ませてやろうと、口に含んでいた水をすっかり飲み干してしまった。

数秒ふれただけの唇が、そっと離れていく。小次郎は固まったまま動けない。

尚子も、前方をむき、真っ赤な顔で、手の甲で自分の唇を隠すようにしている。

「……」

「……よくわかんなかったから、もう一回」

「……阿呆っ」

「ちっ。正気にもどりやがって」

小次郎はまだぶつぶつ言っているが、尚子が目を覚ませば、飛ばせる。あっという間に小次郎の頭は、逃走の謀略がかけ巡り、それどころではなくなった。

と、その二人の目の前に、ふわりと何かが舞い降りて来た。

赤い。

小さな。

暖かな 炎だ。

それは、二人を見つけたことを喜ぶかのように、くるくると飛び回る。

害はなさそうだが。

何だろう？

見合わせた二人は、少しの間それを目で追っていた。

ふと、炎がぴたりと尚子の目の前で止まった。

「何か私に伝えようとしているのか？」

尚子は、何とはなしに、水をすくうように、両手を広げた。すると、意志があるかのように、炎は尚子の手の中へと降りてきた。

良尚様……。

「驚太！？ 驚太なのかつ！？」

はじかれたように叫ぶ尚子に小次郎はビクツとなった。

尚子には何か聞こえているらしいが、自分には何も聞こえない。

小次郎は首を傾げた。

みんなをつれていけなくてごめんなさい。

「皆……村の皆はどうした！ そうだ、桜のもとへ行かねば！」

尚子は勢いよく小次郎を振り返った。

「皆も一緒に連れていく！」

「……無理だ。俺たちだとて無事につくかわからないのに、大勢を連れてはいけない」

「何か方法があるはずだ！」

良尚様。村のみんなは心配ないよ。殿様が何とかしてくれる。

「父上が？」

確かに父なら村が焼かれるのを黙ってなどいないだろう。だが、それは以前の父ならば、だ。

今の父は尚子の尊敬する父とは違ってしまった。

大丈夫。あの方がいる。殿様にはあの方がついてるから。だからもう大丈夫だよ。

「あの方？」

尚子はつぶやいた。

「あの方とは、誰のことだ」

父に忠言できるような家臣はいない。義母だとて、結局は生家の源氏の言いなりだろう。

ほかに、誰があの方に進言できるだろう。

尚子の眉間のしわが深くなる。

あ。あの方が呼んでる。もう行かなきゃ。

小さな炎は、ふらふらと浮遊し始めた。あわてて尚子が声を上げる。

「待って、鷲太！」

尚子の声を受けたように、小さな炎はくるりと尚子の周囲を一回転した。

自分の心に従いなさい。それが、皆の願いです。あなたの好きなように、生きなさい。

「……え」

尚子は呆然となった。

今のは、明らかに、驚太の声ではなかった。聞いた事の無いでも、どこか懐かしい……。

小さな炎はもう一度だけ、くるりと尚子の回りを一周すると、すうつと天高く舞い上がっていった。

「……尚子」

その炎を目で追う尚子に、小次郎はいたわるように声をかけた。

「……母上……？」

「何？」

「母上が、心のままに生きよと。そうか……母上が、父上のそばにいらつしやるのだな……ならば……」

疑問に顔をしかめながら、小次郎は尚子の視線の先を追った。もう炎を識別することはできない。

驚太だと言ったり、母だと言ったり。いったい誰と話をしていたのだろう。

何者かの魂が、尚子を思って、後を追ってきたのは間違いないようだ。

「父上に任せておけば、上総は大丈夫だろう」

尚子はそう言っ、すがすがしい微笑を小次郎に向けた。

「そうか……」

小次郎は、内心ほっとした。再び、村人を助けに行くときをこねるようならば、気を失わせてでも、尚子だけを連れて行くきでいたからだ。

そんなことをすれば、後々、恨み言を言われるのはわかっているが、手段を選んではいられる状況でもない。

だが、尚子自身で納得してくれたようだ。

確かに何か、強大な力が二人を守っている、そう感じずにはいられない。

ならば、この期をありがたく使わせてもらおう。

自分と尚子の、これからの生きる道を拓くために。

「皆のためにも、これからもお前らしく生きていけ。おまえはそのままでもいいんだ」

「……」

「それには、お前と俺が、自分らしく生きていくための、国が必要だ。そのために俺が、自分を見失うこともあるかもしれない」

尚子は静かに小次郎の言葉を待った。小次郎も不安なのかもしれない。

自分でいられなくなることが、怖いのもかもしれない。

「そのときは、私が殴ってでも引き戻してやる」

尚子はにっと笑った。

小次郎と一緒にならば、自分らしく生きていける。そんな国と一緒に作れるような気がする。

「……お手柔らかに」

ふっと小次郎は笑う。

きつと尚子と一緒にならば、己の望む国を築いていけそうな気がする。自分を見失わずにいられる。

「落ち着いたら、里帰りしてもいいか？」

「……………それで、俺は舅殿いひいに殴られるわけだな」

口を引きつらせて、肩をすくめる小次郎を見て、尚子は本当に可笑しそうに笑った。

「仕方ないだろう。一人娘を夜逃げ同然で奪ったのだから」

「何を言う！ 俺は、盗賊から姫を助けて、自国へお連れするだけだ。そうに決まっている」

言い終える前に小次郎が馬の腹を蹴ったので、尚子は前のめりになり、小さく声を上げ、小次郎の腕に捕まった。

小次郎を睨むと、にやりと笑みをたたえている。わざとだ。

「さあ、姫。我が国へご案内しよう。飛ばすぞ」

二人を乗せた馬は、再び風に乗って、下総へと向かった。

これから、坂東八力国を巻き込む大きな戦が、二人を待ち受けて

いるとも知らずに。

今はただ、希望だけを胸に、二人は駆けていった。

エピソード

翌朝、何年ぶりかに、ひとり、その桜木を訪れた良兼が、根本に小さな小さな白猫が冷たくなっているのを発見した。

良兼は、複雑な顔でその猫を両手に抱えたとき、その体に無数の傷跡があることを知る。

「……………」
しばらく呆然とその傷跡を見つめていたが、ふと目の前にきらきらとした何かが舞い降りて来たような気がして、頭上の桜を見上げた。

（まさかな……花びらのはずがない）

桜はこれから落葉する支度に忙しい。最近はずいぶん朝も冷え込むようになっていた。

そういえば。

いつからこの桜を見ていなかったのだろうか。

君との約束を、守らなくなったのはいつからだっただろうか。

心から笑うことができなくなったのは……。

「……………私はまた」

良兼はぼつりと呟いた。

「……………君を独りで逝かせてしまったのだね……………」

良兼の顔は悲しみと寂しさにゆがみ、必死で何かをこらえるように口元が震えていた。しかし、そっと秋風が彼の頬を撫でて行った時、彼には珍しいほど、優しく微笑んでいた。

「そうだな。春にはここに来よう……………君と桜を愛でに、な」

まるで彼だけに風が何かをささやいたようだった。

白猫は良兼の手によって、桜の木の下に丁重に埋葬された。

そして、数日後。

平小次郎将門が、『京から下総の国へ戻った』という知らせが上総の国にもたらされたという。

序章『赤い月が見ている』 完

一章『災厄の姫君』に続く。

あとがき

長い間、応援ありがとうございました。
ついに、完結を迎えました。

ラストは白猫と桜の話进行全面にもってくる感じになりましたが、同シリーズの『桜華の雫』や『朧月の標』を連想させるシーンになればいいなあと思い、執筆しました。
いかがだったでしょうか。

彼らのように、自分の行動を「身分」と「権力」という見えない鎖に縛られてしまう。

そんな時代に、自分らしく生きたいと模索することは、本当に難しいことだと思います。

彼らのように、一瞬一瞬を大切に、力強く生きていきたいと思います。そして、自分の人生の選択を誇れるように。

しかし、忘れてはいけないことがあります。

誰かの自由を奪ってまで、「自分らしくある」べきなのか。

それを、KYだ、自分勝手だと片付けてしまえば、簡単ですが。

それでも自分を通さなくてはいけない場面もあるはずです。

それだけの覚悟があるかどうか。覚悟があれば、周囲を納得させられる。周囲が納得すれば、それは「自分勝手」ではなく「自分らしさ」なのではないでしょうか。

尚子や小次郎の姿を通して、「私らしさ」ってなんだろう。
そんなことを思う毎日でした。

最後になりましたが、本当に、長い間応援ありがとうございました。

皆様の心に、何か一つでも、残る言葉があれば、幸いです。

また、評価、感想、「読みました！」報告、気軽にお願いします。

一言感想大歓迎！！

2009・8・28 日向あおい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2617f/>

赤い月が見ている

2011年2月19日07時53分発行